

332.25
To.347i



0022413-000

332.25-T.347i

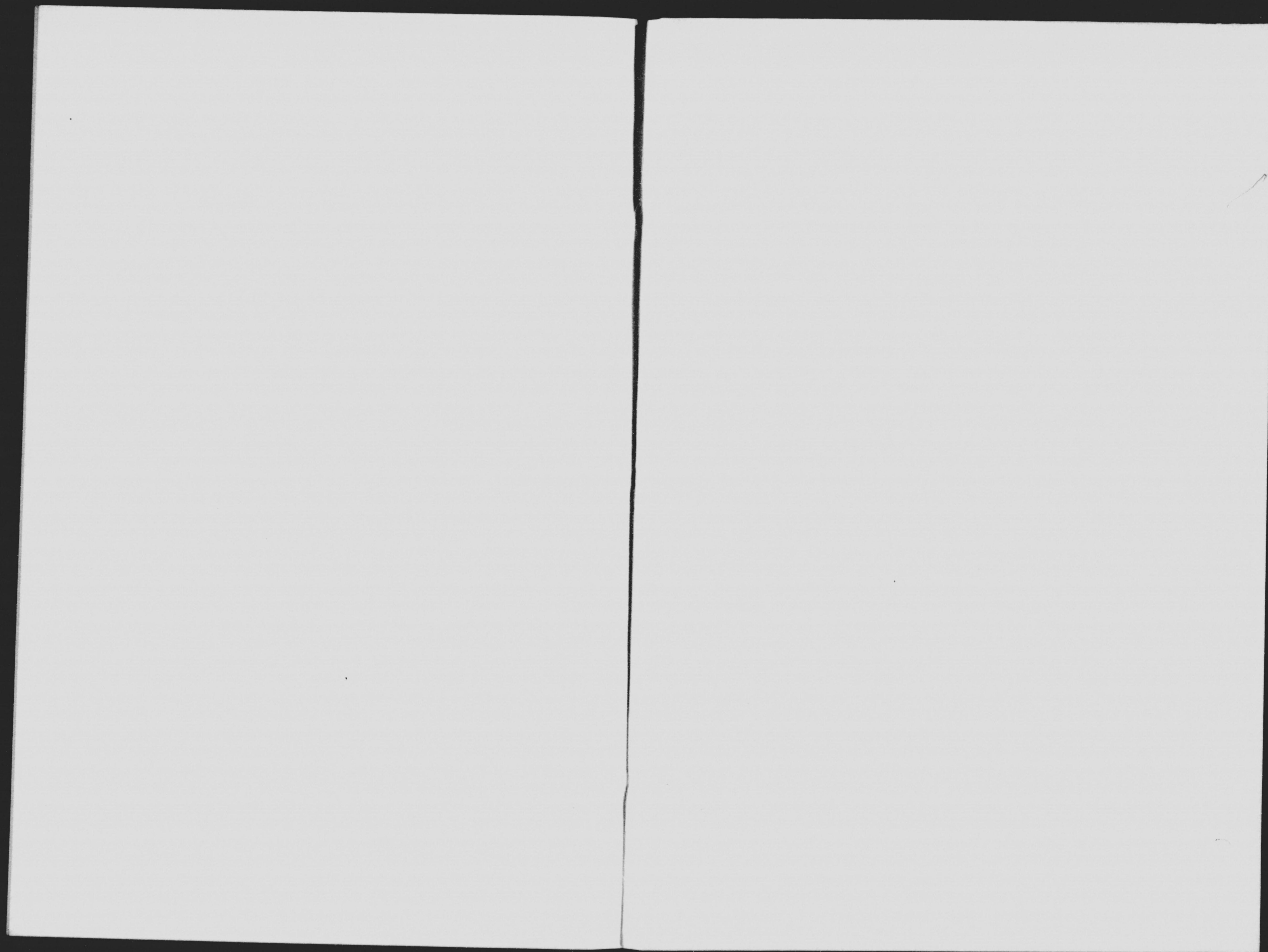
イギリスの印度統治

東亜經濟調査局・編

東亜經濟調査局

1935

ADC



128

經濟資料通卷第百九十四

イギリスの印度統治

— 其經濟諸政策の研究 —

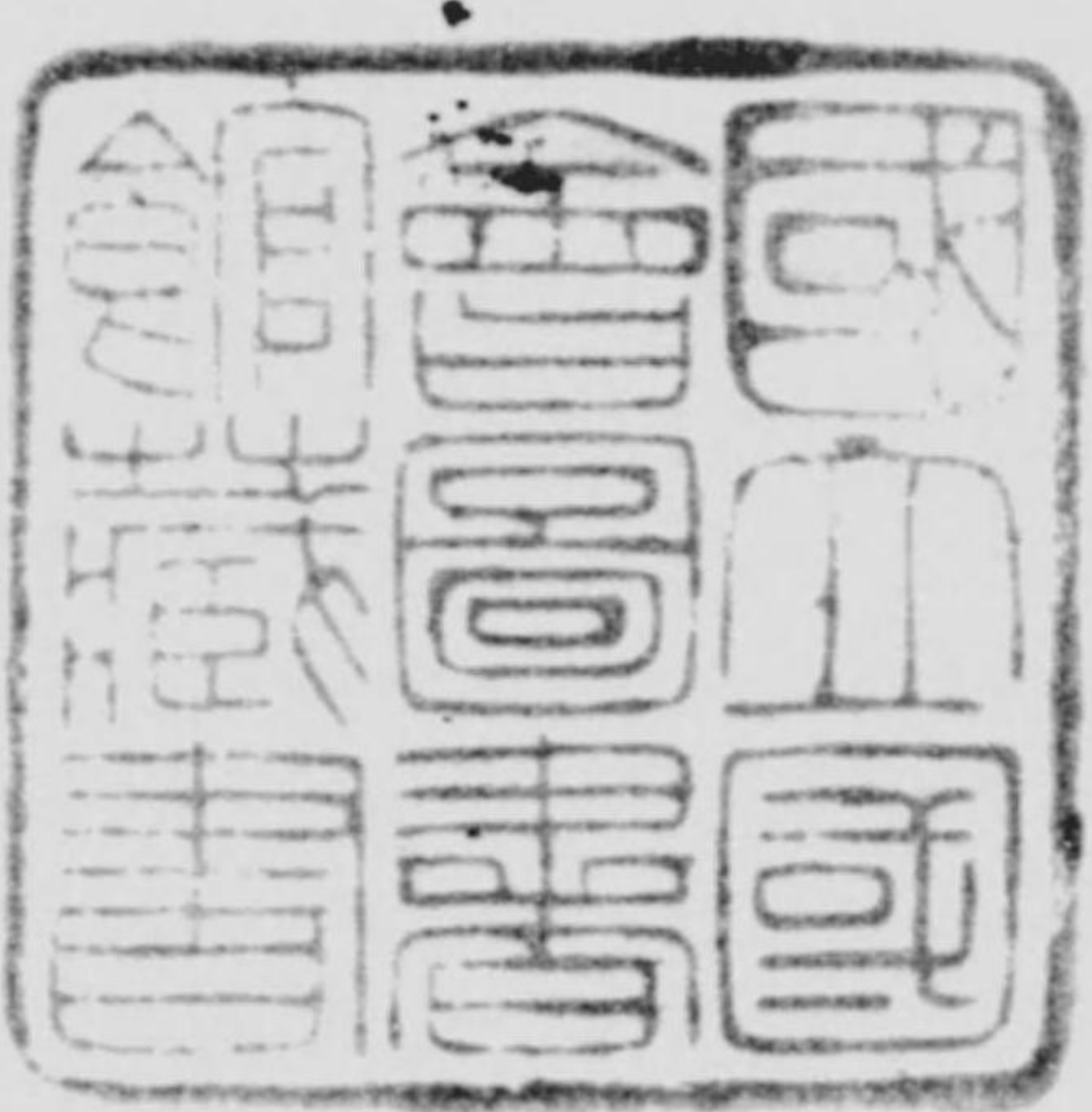
東亞經濟調查局編

332,2371494

33225
M494i



332.25
T0347i



おしり



345755

序

現在世界の列強に算へられる國家は、すべて巨大なる植民地領有國である。就中イギリスは最も古い植民地獲得の歴史を持ち、數世紀に亘る其支配の上に今日の隆盛を築いてゐる。それは現在世界の全大陸に跨り、二十四萬平方料人口四千四百萬の本國に對して、四億五千萬人を擁する四千萬平方料に及んでゐる。

イギリス人は何よりも實際的政治家である。この廣汎なる植民地に對する政策を、各の地域の具體的狀勢に應じて、諸階級の勢力の洞察に於て組立てゝゐる。本書は現在イギリスの直接的支配の下にある唯一の巨大なる領域、印度に對する經濟政策を解明したものである。

日本も亦植民地領有國家の一であり、又アジアの盟主を誇る大帝國である。従つて、他國の植民地統治の實績を批判し其長所を攝取することは必要事であり、又アジアに於ける三億五千萬の住民を持つこの地域の狀勢に不斷の關心をもたざるを得ない。而もわが國

に於ては、一般に植民地問題に關する理解が尙充分でない現在、本書は此の方面に何等かの利便を與ふるものと信ずる。

本書の執筆者は局員、枝吉勇である。

昭和十年四月

財團法
東亞經濟調查局

例言

一、本書は、表題の示す如く、イギリスの對印度經濟政策を解明せんとしたものであるが、同時に、印度に於ける社會状態をも併せて窺はんとした。

一、本書第一部は、イギリスの經濟的發展の諸段階に於ける諸政策を通じて、植民地對本國の一般的關係を概観することを主眼とし、第二部は、土地と水との獨占、地主・高利貸・商人とイギリス支配との結合、並に之に關する諸政策等々を、第三部は、印度に於ける工業の發展を辿りつゝ、工業阻害政策に重心を置いた。

一、問題が、かく多岐に亘つた爲に、本書は概論に終つたことは遺憾である。この事は素より筆者の淺學が根本的原因であるが、遁辭を許されるならば、一般にかの國の狀態が殆ど紹介されてゐない爲に豫備智識に於て缺く所があり、従つて材料を、各州の詳細に至るまで集收し得なかつたことにも基いてゐる。印度を取上げた英人並に印度人の書籍はもとより世に多數出されてゐる。然しそれ等はすべて各自の體系によつて記述されてゐる爲に、筆者の願望する資料と喰ひ遣ひがあり、原資料の不備が一層痛感された次第であつた。

一、従つて若干の資料については孫引を餘儀なくされたが、それ等は近く入手される運びであり、且つ大方の批判と教示を待つて、他日機會を得て訂正し更に政治的諸政策と併せて研究を進めたいと思つてゐる。

目次

第一部 イギリスと印度

緒言

第一章 イギリス商業資本の印度征服

一、商業資本の歴史的性質

二、イギリス侵入以前の印度社會

村落共同体——水利と所謂國家的土地所有——土地占有の諸段階——商業資本の發達——モグール朝下の政治上・經濟上の危機

三、西歐商業資本の東進

ポルトガル、オランダの侵入——イギリスの侵略——英佛の葛闘とイギリスの勝利

四、イギリス商業資本の搾取

強制的賣買——前貸制度——イギリス支配層と印度

第二章 産業資本支配下の印度

一、産業資本の印度支配の確立……………	二
イギリス商品の氾濫——印度の生産化——東印度會社の消滅	
二、産業資本支配下の印度……………	三
産業資本と植民地——イギリスと印度市場——工業の發達と其限界	
第三章 イギリス帝國主義と植民地印度……………	三五
一、帝國主義時代の植民地の意義……………	三五
原料資源地として——投資市場として——商品市場として——植民地の軍事的意義	
二、イギリスと印度……………	三七
イギリスの感ずる印度の意義	
三、イギリスの印度支配と土着ブルジョアジ……………	三〇
工業阻害政策と土着工業の發達の限度——帝國主義母國と土着ブルジョアジ	
第二部 農業に對する諸政策……………	三五
第一章 序説、農業發展の概観……………	三五

一九世紀前半期——鐵道の開設と棉花景氣——スエズ運河の開通——反動來と饑饉——其後の發展	
——今世紀の状態	
第二章 土地制度の改革……………	四一
第一節 序言 土地所有の諸形態……………	四一
第二節 イギリス支配以前に於ける土地私有の發生過程……………	四三
王朝の衰微と事實上の土地私所有——私所有の諸起源——村落の二形態	
第三節 土地制度の改革……………	四八
一、改革の意義……………	四八
組織的體系的搾取の必要——商品市場の前提として——同時に普遍的に行れた地租の金納	
化——Divide et impera	
二、東印度會社の統治……………	五〇
支配直後の暴政——ワーレン・ヘースティング卿の租法改革——ベンガル、ウード、北マド	
ラスに於ける事例	
三、ベルガル地主其他地主の法認、創設……………	五一
コーンウォリス卿の改革——ベンガル大地主の創設——ベナール、マドラスへの實施	
——この制度の意義——財政の急迫と別個の制度——ウード、ボンベイへの適用	

四、共同的地主、村落地主

ホルト・マツケンジー報告と新制度の實施——アグラの例——中部諸州の村落地主——パ
ンジャールプの共同的地主

四

五、小農民の設定

南印度の新改革——マドラス、ボンベイの状況

五

第四節 土地所有の推移

一、中間地主の發生

中間地主の發生——二三の補遺

六

二、小農民の没落

ボンベイに於ける零細所有——マドラス農民の階級分化——パンジャールプ其他

六

第三章 小作及び小作制度

第一節 小作法の制定

一、制定の一般的意義

農民反抗の緩和——地主とイギリス支配との結合

七

二、各州の小作法

七

三、小作法と農民の保護

諸救済策と農民——永小作權の賣却——永小作の状態

七

第二節 普通の無權利の小作

地主自家使用地の小作——ベンガル、中部諸州——アグラ——パンジャールプ——リョート
ワリ地主——イナム下の小作

七

第三節 現存する小作制度

生産物を以て支拂ふ賃労働——分益小作——定量生産物を以て支拂ふ小作——定額貨幣を
以て支拂ふ小作——バタイ制小作——カンカット制

七

第四節 若干の補遺

一、小規模經營の優勢

平均耕地面積——ボンベイ、パンジャールプ——耕地の分散——政府の對策

八

二、農業労働者、下僕

農業労働者の増大——奴隸的下僕「ハリ」「カミアウテイ」——一般労働者の勞賃

八

第四章 饑饉及び灌漑

九

五

第一節 饑饉と其對策

六

一、其諸原因と慘害

九〇

印度の自然的條件——人爲的諸原因——各饑饉の慘狀

二、饑饉救済の諸政策

九四

各饑饉と救済策——提案された根本的方策

第二節 灌漑の發展

九六

一、灌漑施設の發展

九六

イギリス統治以前の灌漑——會社統治下の灌漑——灌漑の發展と現状——灌漑の諸方法

二、灌漑に於ける社會的諸問題

一〇一

井水灌漑——灌漑と小農民——運河と水利稅

三、灌漑地植民

一〇五

パンジャーブ灌漑地植民——勅命農業委員會の勸告

第五章 高利貸・商人・地主による緊縛

一〇八

第一節 負債の重壓

一〇八

一、老大なる農民の債務

一〇八

農民の債務——負債の總額——恐慌と負債の重壓

二、負債の原因

一一一

負債の眞因——マドラスの例——負債の結果

第二節 高利貸の活動

一一四

一、高利貸の種類

一一四

職業的高利貸——地主・搾取農——高利貸——商人——高利貸——貸付利率

二、高利貸と背後の資本

一一八

高利貸と土着銀行業者——土着バンカーと株式銀行、帝國銀行

第三節 商業資本による緊縛

一二三

零細農と高利貸仲買人——買付方法——仲買人と價格の決定——仲買人と背後の資本——各州の實例

第四節 高利貸の抑制並に負債防止政策

一二六

高利貸抑壓の諸法律——土地委譲の防止——低利資金の貸付——如上の諸法律の失敗と勅命農業委員會の告白

第六章 協同信用組合運動

八

第一節 信用組合運動の歴史的概観

一三〇

法令の發布まで——一九〇四年法——一九二二年法

第二節 信用組合の活動

一三三

一、初級農業信用組合

一三三

組織——活動資金——貸付の對象と擔保——利子と返済期間

二、組合上級組織

一三七

組合聯合——中央組合銀行——州組合銀行——組合運動の概表

三、土地抵當銀行

一四二

設立の目的——其の活動概要

第三節 若干の批判

一四四

其利用範圍——支拂の延滞——組合運動と高利貸——救はれる者は誰か

第七章 農業政策に於ける新方位

一四九

第一節 地主の資本家的經營

一四九

一、地主の資本家的經營の獎勵

一四九

普通の地主と農業の退歩——農業危機打破の政策——勅命農業委員會の報告——獎勵の方策——新計畫と土着資本——障碍と勅命農業委員會報告

二、地主の資本家的經營の特徴

一五四

各地方に於ける實例——地主の資本家的經營の特徴

第二節 高利再貸編成の志向

一五九

編成の目的——編成の方針——其意義

第八章 恐慌裡の印度農村

一六一

一、農業の一般的状態

一六一

土地の獨占——經營の過小化——總生産高の沈滞——生産の遞減

二、最近の農業恐慌

一六五

先進國に於ける戰後農業の發展——恐慌と本國——物價の反落と工業品、農業品——卸賣物價と小賣物價——輸出品物價と輸入品物價——輸出の減退

三、農家經濟状態

一七一

第三部 印度に於ける工業政策……………一七七

第一章 印度の手工品製造の衰退とイギリス……………一七七

著名なる手工製品——東印度會社の緊縛——イギリス製造業者の利害——イギリスの關稅——印度國內關稅——英印貿易關係の逆轉

第二章 工業の發達と土着資本の抑制……………一八四

第一節 工業の發達——世界大戰に至る……………一八四

一、鐵道の敷設と其の發展……………一八四
鐵道の開設と保護政策——著しい浪費——國營時代——新なる保護政策——其後の發展と印度經濟への影響

二、近代的諸工業の發達……………一九〇

炭礦業——石油業——黃麻工業——綿工業——栽培園

第二節 土着工業阻害政策……………一九一

一、關稅を通じて……………一九一
財政關稅を巡るイギリス綿工業家の反對——印度政府の讓歩——關稅引上と國產消費稅

第三章 世界大戰と工業の躍進……………二〇六

第一節 工業政策の轉換……………二〇六

——工業發達阻害の他の事例……………二〇六
二、幣制改革に關連して……………二〇六
銀單本位制の實施——印度の好況と金本位制の要望——銀價下落と金貨採用の請願——ハーシエル委員會の勸告——銀單本位と土着工業の阻害——金爲替本位制——其運用と土着工業

第二節 大戰と各種工業の躍進……………二一九

大戰と轉換の根據——新政策と工業委員會の設立——財政委員會報告——關稅に現れたる變化
黃麻工業——綿工業——鐵鋼業——其他の諸工業——一九二一年の工業狀態

第四章 戦後の工業狀態とイギリスの政策……………二二九

第一節 印度工業保護の途行……………二二九

一、イギリスの衰凋と政策の變化……………二二九
印度工業化の幻想——戦後恐慌とイギリスの衰凋——政策の變化(復讐)と幣制の改革——印度關鍵工業の重要性——國民解放運動の潮流

二、印度經濟の悪化と工業の保護……………二三四

印度經濟の悪化——鐵鋼業の保護——印度紡績の保護要求と綿布關稅の引上——砂糖工業の保護——保護の真相

三、數字に示された諸工業の状態……………二四〇

各産業生産高——纖維工業狀態の詳細——一般の工業狀態

第二節 印度工業の特徴……………二四三

イギリス資本の優勢——發達の遅緩と不均衡——巨大なる手工業者の存在

第五章 最近の恐慌と印度工業……………二四八

第一節 イギリス經濟政策の變化と印度の恐慌……………二四八

一、イギリス經濟の凋落……………二四八

イギリス經濟の悪化——オッタワ會議——オッタワ英印協定

二、印度に於ける恐慌……………二五一

物價下落——金の輸出——外國貿易——日本商品進出の防止

第二節 諸工業の狀態……………二五九

綿工業——黃麻工業——製糖業——製茶業——鐵道——鐵鋼業——石炭業

第六章 労働者狀態……………二六七

第一節 労働者狀態と労働立法の概史……………二六七

初期の労働狀態と調査委員會(一八七五年)——第一次工場法(一八八一年)——第二次工場法(一八九一年)——第三次工場法(一九一一年)——第四次工場法(一九二二年)——鑛山労働其他の保護——脱法行爲——第五次工場法(一九三四年)——労働者補償法——藩王國の労働立法

第二節 労働時間と労働賃銀……………二七六

一、労働時間……………二七六

各種企業の労働時間——労働時間一覽表

二、労働賃……………二七八

各種企業の労働賃——労働者の月収——罰則による控除——家族の收入——高利貸の跋扈

三、栽培園労働者……………二八四

労働賃——労働者募集方法——失業問題

第七章 労働組合及び労働者運動……………二八九

一、世界大戰以前……………二八九

初期の労働者運動——運動の性質

二、戦後に於ける勞資對立の激化……………二九〇
 戦時に於ける組合の發展——戦後恐慌と資本の攻勢

三、労働組合法の制定……………二九二
 組合法の發布——組織状態

四、最近の恐慌と労働者運動の傾向……………二九四
 一九二八年以後の高潮——恐慌の深化と勞資對立の尖鋭化——運動の傾向(政治闘争化)

五、組合戦線に於ける分裂……………二九八
 右派の分離(第一〇回労働組合會議)——カルカッタ會議の分裂——組合運動の分離——組合統一運動——全印度労働組合聯合(大右翼)の結成——(附)右派、左派の統一綱領、革命派の綱領

イギリスの印度統治

——其經濟諸政策の研究——

第一部 イギリスと印度

緒言

『印度人の平均所得は、人口三人に就いて二人を養ふ（或は必要なる三度の食事の代りに、僅に二度の食事を總ての人に與へる）に足りるだけである。然しこれは、總ての人々が裸體で歩行し、年中青天井の下に生活し、何等の娯樂或は慰安を有つてゐないことに甘ずる、と云ふ前提の下に、食物以外に、而も最も悪く、最も粗末であり、最も滋養に乏しい食物以外に何物も必要としない、と云ふ前提の下に於てある』（K. T. Shah & K. J. Khambata; *Wealth & Taxable Capacity of India*, 1924.）

或は、永くアッサムの長官であつた Sir Charles Elliott は云ふ。『農民の半數以上は、三度の食事を完全に食べた時の心持がどんなのか知らないのだ』（J. T. Sunderland; *India in Bondage*, 1929.）又、『現在ベンガル農村の大部分は、鼠でも五週間とは生きて行かれない程のものを常食としてゐる。彼等の生活は、今では不適當な食物の爲に非常に悪化してゐるので悪疫の傳染を防ぎ得ない。昨年は十二萬人がコレラで、二十五萬人がマラリヤで、卅五萬人が結核で、十萬人が腸チブスで死んだ』（州衛生長官報告一九二七—二八年）

其面積——一、八〇八千平方哩——は、ロシアを除いたヨーロッパと等しい印度は、北部には東流するガンジスの流域

が、小麦と黄麻と米の豊庫をなし、西流するインドの上流には棉が咲き小麦が實つてゐる。アッサムの山地は茶に名高く、ビルマは米の輸出を以て聞え、中部デツカン高原も亦棉と小麦の主産地である。ベンカルの鐵、ビルマの石油、オリッサの炭田等、天恵は極めて豊である。

其人種はトルコ・イラニア、インド・アリア、シットオ・ドラヴィダ、アリオ・ドラヴィダ、モンゴロ・ドラヴィダ、モンゴロイド、ドラヴィダの七種に大別され、合して三億五千萬——地球人口の六分の一——の住民をなしてゐる。其約七割は農業に従事し、一割は工業に従つてゐる。然し近代的工業に従事する者は僅々二百萬餘に過ぎない。更に又、二億四千萬の印度教徒の間には、今も尙、婆羅門、刹帝利、吠舍、首陀羅の四階のカスト、並に「不可觸」身分に分れる種姓制が根強く残存してゐる。

イギリスは、此廣大なる國土を、既に二世紀に亘つて支配してゐる。今日大ブリテンの王は同時に印度皇帝を兼ね、印度總督は副王の身分を併せて印度に臨み、十數萬のイギリス高級官吏と武官が、この三億五千萬の住民を統治してゐる。二世紀に亘る支配の結果は、豊饒なる天恵にも拘らずこの住民の貧窮であり、經濟的發達の人為的遲滞である。

第一章 イギリス商業資本の印度征服

一、商業資本の歴史的性質

商業資本は、單純なる商品流通及び貨幣流通のみの條件の下にも存在し、歴史的に、最も古い資本の存在様式である、先資本主義社會構成に在つては、生産は、本質的には自己消費に向けられてゐたのであり、この自己消費目的の爲の生産の剩餘のみが商品となるのであつた。商品流通の發達と共に、貨幣財産は次第に商人の手に集積され、資本として機能し、他方に商業資本の發達は、諸生産物を益々商品に轉化せしむる様に作用して行くのである。かくて「商業資本の存在と或程度の發達とは、それ自身、資本主義發生の歴史的前提である」。

封建社會でも、既に高利貸業と國際貿易は廣く發展し、商業資本は相當活潑に活躍してゐる。然し、此時代の貿易は主として奢侈品であり、且つ運輸技術の發展も亦低度であつた爲に、取引される商品の量は僅少であつた。とは云へ、系統的包括的商品生産も、又價格の國際的均一化を伴ふ世界市場もない當時にあつては、國際貿易に於ける莫大な仲介的利潤の可能性が生ずる。「商業資本が未發達の諸社會の生産物交換を媒介する限りは、商業利潤は、單に商略及び欺瞞として現れるのみでなく、大部分之等の原因から生じて來る」のであり、此場合、貿易と掠奪とを區別することは、殆ど不可能であつた。

地理上の大発見と共に、西ヨーロッパの諸國には、アメリカ、アジア等の新発見地の住民を収奪することを専門にした所の商業會社が設立され、それらの本國政府から特定の商業植民地との貿易獨占權を與へられたが、之等の商業會社が、後れた尨大なる民族に對して、政治的權力を獲得するに至つた時には、更に系統的な収奪にまで發展した。欺瞞、掠奪、海賊行爲、征伐は、強力に武装した組織的な軍隊として活動する商業資本の跡に示され、かくて未開の植民地住民は、この資本の本源的蓄積の英雄の犠牲となつた。

商業資本は、又他方に、使用價値を目的とする既存の先資本主義生産様式に對して、何處にても、多かれ少かれ分解的作用を及ぼすものである。封建制の時代では、それは一方では土地所有者をして半奴隸的農民の搾取を強化することに作用し、他方奢侈品貿易は搾取者の消費を質的に高める。更に又それは手工業に對する支配を獲得しつゝ、之を衰亡に導くものである。

商業資本は、かくて、商品生産及び資本の蓄積の發展によつて、資本家的生産様式の前提の創造を促進する。中世紀末の大発見は、封建的生產様式から、資本家的生産様式への過渡を刺戟した重要なモメントであり、之等のものは、生産の封建的制限を破壊するに本質の貢献を與へたのである。

イギリスの印度への侵入、征服は、イギリス資本主義成立の爲に偉大なる寄與をなしてゐる。

二、イギリス侵入以前の印度社會

叙述の順序として、先づ、イギリス侵入以前の印度社會の状態について述べねばならない。然し此處では問題を、後

述する發展の道行に對する理解を助ける意味に限定する。

中世の印度に於て、其住民の大多數を構成する所の農民は、諸種の形態の村落共同體をなして生活してゐた、と云ふことは明である。これ等の共同體は、自足的全一體をなし、それは農業と家内工業(手織、手紡績)との特殊な結合状態に基礎を置き、共同體内部に於て勞働の分割が行はれて居り、同時に、他方に共同體とカスト制の社會的結合が農民を結合させ、相互に或程度の支援を與へてゐたものである。生産諸力の水準が低く又農民經營の再生産がこの埒内でのみ可能である限りに於て、更に又現物地代の形に於ける支配者(國家)の收奪が共同體の生産基礎を破らない限りに於て、全社會は停頓性を免れなかつたし、又これ等の關係が農民を一層土地に附着せしめ、地方的範圍に追ひ込んでゐたのである。十七、八世紀の段階に於ては、印度の村落共同體——此時代に初めて世に出た所の——は、大部分既に太古的農業共同體からは脱したものである。大部分の場合、共同體の耕作地は、不可分的家族に分割され、共有地が残存する場合は、それは牧場、荒地、果樹園に止まつてゐた。村落には長老——徵稅義務を司り、多くの場合其村落の最良地を占取してゐた——があり、權利を享有する共同體員と並んで、全體として共同體の利益、個々の成員の利益の爲に半奴隸的勞務に従事する所の、又土地を耕作する事は出来るが分割された占有地を持つことを許されない所の、低いカストの一群が存在してゐた。

印度に於ては、氣候と土地の諸條件が、運河其他の給水上の工事による人工的灌漑を農業の基礎としてゐたのである

1、ボンベイの Mirasi、或は Kholé 治下の村落の Dharekari Ryot は前者に、Upri、或は Ardheji Ryot は後者に屬するものと思はれる。

が、生産諸力の發展の低い且つ地域の廣大なる此國に於ては、この農業の必要條件たる水の利用を、個人的合意によつて結ばしめることなしに、中央政府の集權的權力の干渉に委ねてゐた。この事情、即ち、人工的灌漑の必要と而もそれを自然的水系に従つて廣汎に統一的に施行せねばならぬと云ふ事情が、土地を、中世歐洲に見る如き個々の封建領主に分割することを不可能ならしめてゐる。従つて、印度に於ては、土地と水は國家的規模に於て所有されることとなつてゐる。此處では租税と地代とは一の單位に融合されてゐる。この農業の基礎をなす人工灌漑が、集權的權力の干渉の下に行はれると云ふ事は、又、國家の共同體支配の爲の強固なる物質的基礎を置くものである。國家は自己の存続の爲にこの人工灌漑を修理、擴張せしめる。國家は、かゝる灌漑の擴張、維持の爲に農民の強制労働を組織する。だがこの強制労働は農民を傳統的な現物地代から、それだけ解放するものではない。

然し、國家的規模に於ける土地所有は、其依つて立つ基底の範圍内に於て、支配者層内部に於ける土地の分割的領有を否定するものではない。ヒンヅの諸王國では、通常王及び其家族は、國內の最良地 *Best Land* —— 多くの場合最大の —— を持ち、王家に従属する貴族の一群は、多く邊境の小地域を占據してゐた。此場合、之等の邊境貴族は、相續に際しての王家への納金、服従並に王の要求に應じ其軍隊を出動せしめること等の義務を持つてゐた。

多少とも中央集權化された國家的封建制がある場合、廣大な、官吏的收税機關の必要が搾取の形體から出てくる。そして租税と現物地代は、封建社會のヒエラルキの幾段階によつて分けられ —— 王の取分は勿論最大である —— 土地占有の數段階が形成されてゐる。其根柢は、全體として農奴的存在に置かれてゐる共同體が横はる。

回教徒の征服は、ヒンヅ貴族の土地領有を破壊した。彼等は征服地の住民に *Khiraj* —— 現物地代で、王の取分は生

産物の五分の一等々 —— と *Jiziyat* —— 人頭税 —— を課し、土地は征服者に属するものとなした。モグール王朝は國土を王領地 *Khalisa* と *Jajir* とに區分した。前者はヒンヅ王國のそれと同一の意味を持ち、この國土は —— *Saba*, *Sirkar*, *Pargana* (時に *Mahal* と稱せらる) *Dastur* に區分されて徴税が行はれてゐる。後者はヒンヅの貴族領に應じてゐるが、それは軍官、大臣等に與へられ、最初は生涯的の、奉公に對する領有地で、其土地の管理を許され、其地の徴税は彼並に其軍隊の維持に使用され、國家の統制の強力なる間は、委讓定額を越ゆる徴税の剩餘はそれを國家に納入すると云ふものであつた。

封建貴族に奉仕する爲に、共同體内部にある完全に世襲的な農村の手工業とは分離した所の都市の手工業者が漸次發

2. B. H. Baden-Powell, *The Land-systems of British India*, Vol. I, p. 250

3. ヒンヅ諸王國の下では、各官吏は其段階に應じて其奉仕に對する代償として一定の免税地 —— そこからの収入が彼の取分になる所 —— を持つてゐた。(See, Baden-Powell, *ibid.* pp. 253-255)

又、ヒンヅ王國 *Bijanagar* の *Harihar Rai* (A. D. 1334-47) は、黨を含めて農民の總生産高の半分を租税として取り、之の三分の一は國王に、三分の一は上級占有者(官吏、其他)又は村落の「所有者」に、三分の一は僧侶に分れ、この最後の分は國王が僧侶を保護すると云ふ名目の下に王の取分となることがあつた。(B. P. *ibid.* p. 265)

4. モグール朝の後年には、服従したヒンヅ・ラジャの反抗を緩和する爲に、彼を徴税官吏 —— 或は一定契約高を以て領域から徴税せしめる —— に任命した。國家の統制が素れ勢力が弱まるにつれて、契約的徴税方法は地方統制の紛擾を回避する意味から一般に採用され、古い領主権者のみならず、投機業者、以前の官吏等が其持つ影響力によつて一定地域の徴税事務に任ぜられ、徴税人 (*Revenue farmer*) となつた。之が後 *Zemindar* の起源である。(B. P. *ibid.* pp. 258-260)

生したのであるが、同時に印度は早くから手紡績、手織、香料、其他の手工製品を以て、世界通商の中に入り込んでゐる。この事情を助長したものは、印度の支那と地中海との中間に位する地理的、交通上の地位である。現物地代^{II}租税が全部的に封建的支配者によつて消費され盡されず、其一部が商品化されると云ふ事情の下に、遠隔の地域との交易の上に商人が一の役割を演ずることとなる。商業が、漸次的にはあるが、或程度の發達を遂げると共に、封建的支配者の消費を質的に高め、彼等の農民に對する搾取の大きさを増加せしめるやうになる。それは農村に對する課税方法をより精密ならしめ、總括的な一般的課税方法から、個々の農民經營に對する長期に亘る正確な徵稅組織へと移行する傾向を帯びてくる。

チムールの子孫バベルに統帥されたトルコ・モンゴル人が、モグール王朝を樹立し(一五二六年)、それが先づ北印度に於て單一帝國にまで結成されたこと云ふことは、それ以前に存在した個々の國家の範圍内に於ける交換の或程度の發達によつて條件付けられる。モグール帝の南征は、北方陸路貿易(アフガニスタン、ペルシヤを経て地中海に達する)に對する南方海上貿易の優越並に之が把持に——これより先、一四九八年にヴァスコダガマを先頭にポルトガル人が海路によつて印度に達し、一五〇三年、アルブケルケの遠征はインドに於けるポルトガル人の占領に先鞭を着けゴアは一五〇〇年に征服された——其理由を見出すことが出来る。又この單一帝國への結成は、商業の發達に新しい拍車を加へ、西歐商業資本との接觸は、地方的にはあるが或程度の貨幣經濟の發達を促進し、貨幣地代^{II}租税への移行に對する刺戟を與へ、部分的に金納地代^{II}租税が實施された。

かくの如くモグール帝國時代には、商業^{II}高利貸資本の或程度の發達が見出されるが、然し、それ等は東洋に侵入し

つゝあつた西歐商業資本に對して優位を占める事は出来なかつた。自足的な共同體を根柢とする此國の生産諸力の發達の段階——印度では此時代にマニユファクチュアは殆ど見出されない——は、西歐のそれよりも遙に低く、軍事技術や艦隊の力に於て問題とならなかつた。海上貿易の覇權は西歐商業資本の手中に歸した。此點に、後にこの帝國を崩壊に導いた所の一の拍車が潜在してゐる。

西歐商業資本との接觸並に國內に於ける商業^{II}高利貸資本の發達は、モグール帝國の其後の時代に、帝國を崩壊に導いた所の、政治上、經濟上の危機を呼び起した。

住民に對する負擔は Akbar 帝以後急速に増加した。アクバールの下では尙小量の慰安と備荒貯蓄を持ち得た所の農民は、Shahjahan の時代(一六二七—一六五八年)には總生産物の半乃至それ以上を國家に取り去られ Aurangzeb 帝(一六五八—一七〇七年)の治下には、この農民の總生産物の半を徵收することは一般的となり、而も彼等が實際に耕作しうるよりもより大なる土地に對しこの率を以て課税され、従つて事實上、負擔は其生産物の半を超過し、其他種類の課税に於ても増大を見たのみならず徵稅の方法は暴力に於て行はれた。其官吏に發したアウランゼブ帝の命令(一六六八年)には、次の一句が見出される

5、北印度を統一したアクバール帝(在位一五五六一—一六〇五年)は、大臣 Todar Mal の助力に於て土地の課税負擔能力を調査し、瘦肥に應じて四種に分ち(各々良中劣の三段階がある)總生産物の三分の一を國家に取つてゐた。彼は又穀價の平均價格を基として金納地代^{II}租税を西海岸の一部地方(グヂェラット)——當時の貿易、工業の中心地——に課した。(Tuhar & Beri, Indian Economics, Vol. I. p. 400, B-P. ibid. pp. 276—280)

「……然し、若し(農民が)耕作すべき手段を有するにも拘らずこの義務を遂行せぬことを發見せば、汝は出張し彼等を威脅し、又強力とむちを用ふべし」と。

農民はこの専制政治の下に、商業に高利貸と結合する暴壓に悩んだ。Bernier は之について述べて云ふ。「かくて農民の多数は、この専制によつて絶望的となり、國を棄て町に我慢の出来る生存方法——荷擔人、水運人——を求めた。時に彼等はラジャールの領域に逃れた。蓋し其處では、彼等はさして壓迫されず、相當の慰安が許されたからである」土地は強制なくして耕されたことは稀である。一人として自ら進んで水を運ぶ爲に溝渠又は運河を修理せんとし、又しうる者はない。それ故に全國の耕地はなくなり、又灌漑缺乏の爲に不生産地となつて了ふ。家々も廢頽せる状態の下にあるのみである」と。今や農民大衆は、明確に帝國に對する敵意を示し初めた。反抗は人種的、宗教的の様々な外皮と様相を採つて行はれた。それはマラッタ (Marathas) の反亂が十七世紀に於て中南部印度に成功した所の地盤であつたし、又十八世紀に於て西北部印度のシーク教徒 (Sikhs) の嵐の如き運動が成長した所の所以でもあつた。

イギリスの商業資本は、この相當長期に亘る危機の爆發の一應の完了を示した頃に印度への侵略を開始した。王朝は衰微し、貴族或は官吏は個々の地方に事實上獨立して相抗争し、農民も亦王朝を離反してゐた。イギリスはこれ等の矛盾を利用した。個々地方の獨立的状态を利用し、印度商業資本に仲介者の役割を演じさせつゝ、イギリスは支配階級の内訌によつて蟲喰まれた所の王朝を打倒したのである。

三、西歐商業資本の東進

西歐商業資本の海路によるインド到達は、十六世紀の最初ポルトガル人によつて先鞭を着けられた。其遠征隊はカリカット、カナンノール其他の西海岸の諸地に商館を設け、要塞を構築し、ゴアを中心として此世紀の間に東方の海上権印度に於ける外國貿易を一手に支配した。やがて東方の管理權は、十七世紀の前半にイギリスと競争するオランダの手に移り、一六〇二年にはオランダの諸小貿易商會社は、聯合東印度會社に併合され、或は印度の地方的侯伯と聯繫し、或は海上の戰鬪に於て次第にポルトガルの勢力の驅逐に努力した。

イギリス商業資本の印度侵出も亦此期に開始される。東洋貿易に従事するロンドンの商人達は、一六〇〇年末日エリザベス女王の免許狀を以て初代の東印度會社を設立し、最初の商館を一六〇八年スラットに設け、ポルトガル人の對抗を、一六一二年、一五年にその海軍に加へた大打撃によつて壓服せしめ、印度皇帝より通商權を獲得した。續いて英葡

6、アクバールの治下では農民の總生産物は以下の如く分配されてゐた。即ち二分の一——耕作費、生活費。三分の一——國への納付。六分の一乃至以下——慰安、荒備貯蓄。ジャハーンの下では二分の一乃至以下が生活費、耕作費に宛てられ、二分の一又は以上が國家並に中間請求者の手に歸した。『近時の經驗によつて判斷すれば、アクバールは、農民に、農業遂行上の最少限を許容したのである』とモーランド氏は述べてゐる。

モグール帝國時代の收税額の増大はビハール、アラハバッド、ウード、アグラ、メルワ、グヂェラット、アジュメール、デリー、ラホール、ムルタンの十州に於ては次の如くなつてゐる。アクバール(一五九四年頃)三、四四一萬ダム(指數一〇〇)。シヤハーン(一六四七年頃)五、七一〇萬ダム(一六六)。其後、六、〇四六萬ダム(一七九)。アウランゼブ(一六六八年前)——ビハールは推定數)六、三五四萬ダム(一八七)(W. H. Moreland, From Akbar to Aurangzeb, pp. 254-56, p. 323)

7 Bernier's Letter to Colbert—Moreland, ibid. p. 256

兩王家の婚姻によつて葡領ボンベイ島を割譲され(一六六一年)、東海岸に於ても漸次アルモガオン(ネロル區)、マリスパタム(一六二五年)、バラソール(一六三三年頃)の各地に貿易所を、フーグリーに植民地を設立し、一六九〇年には、今日のカルカッタに小植民地を完全に樹立した。

だが、商會の眞の發端は一七〇二年以後である。この時、東印度貿易の獨占權を要求した諸會社は一の會社に合併された。この時までには初代の東印度會社は屢々危機に迫られ、一度はクロムウエルの革命政府の下で中斷され、又ウイリアム三世の治下に議會の干渉によつて解散の危機に遭ひ、政府への贈賄によつて辛じて權利を獲保、維持したのである。東印度會社の存立が議會によつて承認されたのは、イングランド銀行が設立され、保護主義がイギリスに確立し、ヨーロッパに於ける武力の平衡も決定的に定まつた時であり、又この時には、舊土地貴族は敗北し、ブルジョアジーは金權財閥の保護によつてのみ其地位に取つて代ることが出來た時代である。

之より先、諸國に遅れてではあるが、フランスも亦印度貿易に侵入してゐる。種々の失敗の後、印度商會と命名された強い團結が、ルイ十四世の保護の下に一六六四年に形成された。フランスの企業は本國からの補助が缺乏して居つたが、尙七四年にはボンデイチエリー(マドラス)、更に八八年にはカルカッタ附近のシャンダナガルに植民地を樹立し、其他其勢力は、西海岸のマレー並に東海岸のカリカール、ゴダーバリ川口地方のヤナムに及んだ。

印度に於ける英佛兩國の決定的鬭争は、最初は一七四〇年の塊地利王位繼承に關する兩國の交戦に從つて起つた。此の事件に於て英佛兩國は各々艦隊を派遣して抗争したが、略々この時を境として東印度會社は、商業的權力から軍事的並に領土的權力に轉換した。印度に於ける英佛間の第二次の戦争は、從つて印度の政治的紛争——ハイデラバッド、ア

ルコット侯族間の繼承に關する紛擾——を機として起つた。フランス總督デュプレーは其後繼者を指名し、一時全南印度に權力を振つたが、マドラスの英人も亦自衛上他の候補者ムハメッド・アリをアルコットの侯位に擬し、ロード・クライブを先頭に、戦鬪はアルコットの占領(一七五一年)を初めとして一七五四年兩國講和に至るまで續けられ、この結果イギリスは勢力をマドラス海岸(カルナティック)地方に張つた。かくて一七六〇年の兩國の最後の戦争に於てイギリスは佛領印度の首都ボンデイチエリーを陥落せしめ(一六一年)、此處に於てマドラス州に於ける多年の抗争は終り、フランスの國旗は殆ど影を留めぬこととなつた。

之に先立つてイギリスは、ベンガル侯(Nawab)の英人壓迫(一七五六年)に端を發するブラッシーの戦——ベンガル侯スラジャー(Surajah Daulah)は此際にフランスと結んだ——に於て印度軍を破り、ミル・ジャファール(Mir Jafar)をベンガル侯として擁立し、後に之に向つて巨額の償金を要求し、その支拂不能に乗じて多額の寶石及び金片を我手に收め、又カルカッタ附近の廣大なる土地の所有權(a rich jagir)を得た。一七六〇年イギリスはミル・ジャファールを廢しミル・カシム(Mir Kasim)を立て、彼から巨額の報償と Burdwan, Midnapur, Chittagong の三縣を獲得した。然るにミル・カシムは會社官吏の暴行——彼等はイギリス國旗の下に國內貿易に於て勝手に振舞ひ、その獨占的特權を得ん

8、ハムメッド・アリ(Nawab of Karnatic)に對して、イギリス人は巨額の金を貸付け、遂に領域の徵稅實權を我手に收めた。又軍事もイギリスの手に移り、其費用は徵稅によつて賄れた爲にナワーブ廳の支出は益々増大し、一層イギリスの金貨に緊縛されて行つた。ベンフィールド事件以後之等イギリス金貨のカルナティックに對する要求額は、二千三十九萬磅に達したが、英領となつて以後再調査の結果、債權額は百三十五萬磅に過ぎず、千九百萬磅は fraudulent and bad として支拂を拒否された。
(Romesh Dutt, The Economic History of India, under early British Rule, pp. 98-100, p. 115)

としてゐた——に憚らず、偶々會社官吏とミル・カシムの税吏との紛争の爆發に際してイギリスに反旗を翻した。この戦に敗れたミル・カシムはモグール帝シャー・アラム (Shah Alam) にたより、イギリスは之をバクサル (Buxar) に撃破した。此處に於てイギリスは再びミル・ジャファールをミル・カシムに代へ(一七六三年)、更にナジム・ウド・ダウラ (Najim-ud-Daula) (一七六五年) に代へた。かくてこの戦争の結末として東印度會社はベンガル、ビハール、オリッサ三州のデワーニ (Dewan) 租税徴收權を獲得し、此處に印度統治の第一歩が踏み出されたのである。⁸⁾

四、イギリス商業資本の搾取

イギリスの商業資本は、オランダ人がジャヴァで行つたと同様の典型的の活動——欺瞞、狡智、暴力、掠奪を以て印度に望んだ。對外貿易は東印度會社に獨占されてゐる事は勿論であるが、國內商業に對しても會社と其吏員の侵略は極めて顯著であつた。彼等は土着商人の重税——釐金税——に比し、イギリス國旗の下に堂々と何等課税の虞なく交易に従事した。この爲に土着商人は没落し、ナワブの収入は減じた。この事の爲にナワブの税吏との對立が激化するや彼等は武力を以つて之を撃破した。『彼等は農民、商人の貨財と商品とを、其の價値の四分の一を以て強奪し、又暴力と壓迫によつて、農民をして僅か一ルピーにしか値せぬ貨物に對し止むなく五ルピーを支拂はしめた』⁹⁾或は『ルックプール (Lucky-poor) の會社吏員 (Gonastah) 等は、ターシルダールからタルクダールの治域を強力を以て取り上げて自用に供し、何等の地代をも支拂はなかつた』¹⁰⁾

彼等は自己の商館を中心に、附近の住民に前貸を強制した。此前貸を拒否する織工は逮捕、鞭打、追放を以て報ひら

れ、一度前貸を受くるや、かゝる織工は登録され、會社の奴隸と異らぬものとなり、品質と價格の強定は勿論其納入の期日も勝手に定められた。モローの證言によれば、バラマハールに於て會社は主要なる織工を集め、會社への供給品が完成し終るまで之に監視を附した。織工が遅延する場合には巡警が派遣され、この經費一日一アAnnaは、被監視人の負擔に於て支拂はせられた。かくて此地方の織工一五〇〇名——家族を除く——は、商館の爲に完全な隷屬状態に置かれた、と稱せられる。商館によつて決定される價格は通常市價の一五%減であり、甚しい場合は四〇%減ですらあつた。かゝる状態は、獨りこの地方の木綿業に關するのみでなく、ナゴーツの生糸生産者の間にも、又カシミア・ショールの生産地にも見出される。否、それは、會社の勢力の及ぶ限り、全印度的な現象であつた。一七九三年の會社規定には、『會社より前貸を受けたる者は、會社と契約された勞働乃至生産を、英人、土着人たるを問はず、何人にも與ふることを許さず』とし、納品遅延については『駐在官は、自由に巡警を派し、以て引渡を督促せしむべし』としてゐる。かゝる前貸方法は、インヴェストの名を以て呼ばれ、其額は一七九三—一八一三年の十九ヶ年に於て年々一、三二三千磅に達したことを知れば、其範圍の如何に廣汎であつたかを推知することが出来る。¹¹⁾

8) ブラッシーの戦に於てイギリスの官吏と軍隊は一、二、三、九千磅の償金を得、ミル・カシムの擁立の代償として二〇〇千磅を、更にミル・ジャファールの再立から五〇〇千磅を、ナジムの就任に際して二、三〇千磅を獲得した。これ等の贈物として八ヶ年に得た二、一六九千磅の外に、イギリスはこの期間に賠償として三、七七一千磅を得てゐる。(House of Commons Committee's Third Report, 1773—(R. Dutt, *ibid.*, pp. 32—3))

9) Nawab's letter, May 1762—Dutt, *ibid.* p. 23

10) Letter of Mahomed Ali, Collector of Dacca, to the English Governor at Calcutta—Dutt, *ibid.* pp. 24—5

イギリスに於ける資本主義への發展は、かの産業革命と、印度に於けるこの收奪を本源的蓄積の一要素としつゝ、十八世紀中葉以後に行はれたのであるが、マニユファクチュア乃至工場工業の擡頭につれて、東印度會社の貿易獨占到對するこれ等の要素の反抗は、次第に増大を示した。ロンドン、リヴァプール、ブリストルの商人の側から特權更新の際に會社の通商獨占を破壊し、「眞の金山」と見られてゐたこの貿易に参加する爲の努力が繰り返された。かくて一七七三年の法律によつて、イギリスの私人が殆ど凡てのイギリス製造品を輸出し、又イギリス宛の輸出品を輸入する事の出来る規定を採用したが——議會は毎年三千噸の貿易をば會社外商人に許した——尙イギリスの封建的勢力は、この法律の承認を印度に輸出する爲の私的商人の權利に關し、其効力を無効ならしめる諸條件に結びつけてゐた。かくて貿易に關する會社の勢力は、一八一三年まで持續された。

貿易部面のかゝる對立にも拘らず、東印度會社を通じての印度の收奪に關する限りは、イギリスの封建的要素と近代要素とは、互に手を取つて進んだ。會社は一方には獲得した三州を地盤に漸次領土擴張の爲の征服戰を續行し、他方には印度の專制的機構を利用して極度に農民を收奪し、之を本國政府に貢納(年四〇萬磅)し、自己の軍隊を養ひ、征服戰を賄つた。農民の反抗の局面に至るや、彼等はより體系的な本源的蓄積の過程を押し進める爲に、又其支配を強化する爲に土地制度を改革して大地主を創造し、同時に税制を改革した。これ等の過程の裡に、印度の古い孤立的自足的な村落共同體は次第に破壊されて行つた。

この破壊の主役を演じたものは、だが、イギリス機械工業の製品であつた。イギリスの商業資本は直接の政治的權力と經濟的權力を同時に利用して、「印度の生産方法に革命的影響を及ぼした」のであるが、「廉價なる商品は、農工業生産

の合一の太初的な組成部分たる紡績業及び織物業を破壊し、かくて此等の共同體を分解せしめた」のである。

かくて此の行程の間に、商業資本は今や産業資本の爲に従屬せしめられ、一國の生産の世界市場への連絡への強要、一國の資本家的生産様式採用への強要を歴史的役割とする産業資本の時代が登場する。東印度會社の印度貿易の獨占は一八一三年に終り、支那貿易へのそれは一八三三年を以つて終焉をつける。

二 R. Dutt. *ibid.* Chapter II 及 XIV

第二章 産業資本支配下の印度

一、産業資本の印度支配の確立

「世界市場それ自身が資本家的生産方法の基礎をなしてゐるが、他方に不斷に擴大される所の規模を以て生産しようとする資本家的生産方法の内的必然は、世界市場を不斷に擴大せしむる刺戟となるものである」。イギリスは、かの本源的蓄積と産業革命によつて、十八世紀の後半はすく／＼とした資本主義的生産の成長の過程を辿つてゐた。一七七〇年から、一八一五年にかけて、其綿工業が不振又は沈滞に陥つたのは僅に五ヶ年を數ふるのみであり、又この四十五年間に、イギリスの製造業者等は、機械及び世界市場を我手に獨占したのである。

印度に於ては、此時期は、其主要地方の占領の時期であり、又イギリス製造工業の印度市場征服の時期であつた。一七八五年から一八一九年にかけて、東方はビルマ、アッサム（一八二六年）を、西方はパンジャブ（一八四八年）シンド（一八四三年）を除く豊饒なる地方は、悉くイギリスの手中に歸した。一八一三年には、印度貿易に於ける東印度會社の獨占は終焉して、この市場はイギリス製造業者に解放された。イギリス商品の巨濤の如き流入は、忽ちに此國を入超國に變化せしめ、それは「一般に一ルビーが二志六片に當る爲替相場は、一八二二年には既に一ルビー當り二志までに減退してしまつた」程のテンポを以て行はれ、イギリス製造工業者の利得した富は、短時日の中に三倍以上となつた。

今や印度は、低度の單なる名目のみの關稅の下に、イギリス商品の氾濫に見舞はれた。一八一三年のカルカッタ輸出（對ロンドン）の綿花二百萬磅は、一八三〇年には同額の輸入綿製品によつて代置された。一七八〇年に於けるイギリス商品の印度輸出額は、僅に三八六千磅、貴金屬輸出一五千磅で、全外國貿易の三十二分の一に過ぎなかつたが、一八五〇年には、大ブリテン並にアイルランドからの印度輸出額は、八、〇二四千磅を計上し、全輸出額の八分の一以上を、綿製品は五、二二〇千磅、同總貿易中の四分の一以上を占め、木綿工業は大ブリテンの人口の八分の一を働かせ、全國民所得の十二分の一を提供したのであつた。かくて「東印度との貿易は、イギリス木綿製造家に對して格段の意義あるものとなり、東印度大陸は、事實上彼等の最上の市場となつた。木綿製造家がブリテンの全社會制度に對して重要な意義あるものとなるにつれて、東印度は、イギリス製造家に對して、非常に意義あるものとなつた」のである。

他方に、十八世紀末年から十九世紀の前半にかけては、イギリスに於ては、政權を擁する商業資本、絶對王朝と、この古いマーカンテイリズムを今や桎梏として打破せんとする新興ブルジョアジの對立抗争の時期であつた。かゝる目的に向つての新興ブルジョアジの努力は、一八二三年の關稅引下並に航海條例の廢止に勝利を得、その抗争は一八三二年の選舉法改正、同じく四九年の穀物條例の撤廢を以て完了するのであるが、印度に對しては、少くも十九世紀の最初の四分の一までは、此國を其所有地とする商業資本の利益と其軍隊を以て占領した絶對王制の利益、並に其商品市場とする製造家の利益は、相一致し、提携して進んだのである。蓋し租稅並に商業を通じての東印度會社のかの收奪、巨大なる貢納と賄賂にほゞ笑む絶對王朝、かの收奪に基因する資本家的商品流入の道均しと市場擴大の可能性は、この三者の利を、二三の點で相反しつゝも一致せしめてゐたが故である。

かくてイギリスの蒸氣力と其科學は、既に十九世紀の前半の終りには、印度の農業と手工業の特殊な結合の大部分を破壊し、其停頓状態の主因であつた此國の經濟的孤立状態を破壊しつゝあつた。此過程のうちに、嘗て華かであつた製造地ダッカの人口は、十五萬から二萬に減少し、同時にベンガルの絹工業、ボンベイ、カルカッタの造船業も没落を辿つた。かくてイギリスの廉價なる商品の重砲とかの土地制度の改革とは、此國の古い社會に經濟的機構を爆破し、引續く本源的蓄積の過程と共に、住民を益々困憊の淵に投げ出した。されば一八四二―四六年の四ケ年に、イギリスの印度輸出は二六〇百萬磅を計上したが、一八四六―五〇年の四ケ年には二五三百萬磅に降り、同じく輸入は同期間に、二七四百萬磅から、二五四百萬磅に減少したことも偶然ではなかつた。印度の人口一人當りのイギリス商品の消費量は、南アメリカの九志乃至六志は勿論、中央アメリカの一〇片に比してすら尙低く、僅に九片であつた。

この事情は、長きに亘つて印度を彼等の商品市場たらしめん事を切望するイギリス産業資本の旨に、印度に於て其國內産業の破壊に代る新しい生産力を作り出す必要を痛感せしめた。既に一八三〇年 Sir John Malcolm 氏は其一般的覺書に述べて云ふ。「イギリスをして其最も價値ある製造工業が依存する原料の相當部分を、諸外國より獨立せしむる爲に」印度を専ら原料生産國たらしむべきであると、今や鐵道の敷設が、又長く荒廢に委ねてゐた所の排水、灌溉に對する施設の必要が認められ、その必要の認識は又、偶々十九世紀前半末に起つた所のアメリカの棉花凶作に基きイギリス綿業資本の痛い損失によつて強化された。

然るに彼等が印度に資本を投ずる凡ての機會は、印度官憲側の妨害——例へば一八三三年迄はイギリス人の印度での土地所有は禁ぜられてゐた——と詭計に遭ひ、從來印度に對して一致してゐた本國工業家、商業資本家並に絶對王制と

の利害は相對立するに至つた。かくてイギリスの新興ブルジョアジエは、本國に於ける勝利の勢を以て、印度の舊支配機構の碎破、東印度會社の徹底的排撃を要求し、一八五七―五八年のセポイの反亂を機として、東印度會社は廢止され、同時に名目上存在を續けたモグール王朝は廢滅し、印度は擧げて近代的資本の支配下に置かれることとなつた。

二、産業資本支配下の印度

一般に、産業資本的契機を出ない間は、植民地の本國資本主義に對する利益は、自國商品の販賣市場、其齎らす所の超利潤の可能性が第一義的であり、植民地の生産する原料の吸収が之に附隨してゐた。この必要から鐵道が敷設され、運河が開築されるのである。産業資本の隆盛の時代、自由貿易の黄金時代に於ては、従つて、植民地は、其統治の困難なる點に照して、有害なる邪魔物であるとの觀念が、イギリスの有力なる政治家の間にすら行はれてゐた。それにも拘らず印度が、此時期に於て一層鞏固に本國の支配下に緊縛されたと云ふ事情は、それが單なる商品市場に止まらず、此國の秩序の維持、其の市場の安全性が、商品販路の擴張の重要な條件であつたと云ふこと、並に此國が「善政」に對する貢物としての豊富なる収入を産む所の「乳牛」でもあつたと云ふことによつて説明される。然し、此處でも勿論市場としての重要性が首位を占めてゐることは明である。

かくの如く、産業資本の支配の時代に於ては、印度は、其廣大なる市場的價値に於て重視され、政策の焦點は此處に

— Sir J. Malcolm's General Minute of 30th November, 1830—Dutt, *ibid.*, p. 299

結ばれてゐた。この見地から、既に一八三三年には中央財政が確立し、一八三五年には統一的幣制が施行され、同じく四四年には釐金税が撤廢された。一八五三年に初まる所の鐵道は、海港と内地大都市との連絡に先づ重點を置かれ、内地都市相互の連絡は顧られなかつた。而も、鐵道は、海港に至る原料、食料品に對して特惠を與へて差別的運賃を設定してゐる。この事は、自由貿易制度を眞向に振り翳して、政策的保護を忌避する本國の態度と相俟つて、内地に於ける土着産業の競争力を弱め、海港並に外國に於ける産業を保護する結果を招來してゐる。更にそれは、印度の切望する金貨本位制を一貫して拒否する所の幣制改革を巡る諸問題に於て示されてゐる。自由放任主義は、後進國印度に於ては、本國の利益を守護する所の、誠に鋭利なる武器であつた。

アメリカ南北戦争に起因するランカシアの綿花恐慌とスエズ運河の開通は、印度の農業原料源泉としての重要性を確立した所の二大要因であつた。殊に印度未曾有の棉花景氣は、鐵道の急速なる延長と、農業部面に對する資本主義關係の廣汎な浸透を齎らした。單一作物の生産、貨幣經濟の深潤等々は、唯にイギリス商品の販路を擴大せしめたのみならず、印度内地相互の依存關係を強めたのである。この状態はスエズ運河の開通によつて倍加された。交通並に灌漑施設の整備が、今や印度政府の主要關心事項となり、又、茶園を初め栽培園が此時期に發展を遂げた。印度は綿花、黄麻、生皮革、亞麻仁、米、小麥、茶等の原料、食料品を主要輸出品とするに至り、之に對して綿製品、機械、器具其他の製造品並に金銀の巨大なる輸入國となつた。

「ブルジョアジイは自分自身の姿に似せて、世界を創るものである」。既に一度交通制度の裡に機械が導入された以上此國の工業の勃興は不可避である。鐵道に續いて石炭業は、一八五六—五九九年に發展の基礎が置かれ、クリミア戦争を

契機として一八七〇年代以降には黄麻工業が次第に勃興し、同時代に綿工業も亦眞の發展を遂げた。この近代的産業の勃興は、必然に土着工業資本の發達を惹起した。イギリスは、國債の利子其他本國費の名目を以て印度が生産し、蓄積した富を本國に持ち去り、土着資本の集積を阻害し、土着資本を單に商業資本としてのみ存在させ、之を自己の買辦たらしめて來たのであるが、今や土着資本は其最も容易に入りうる輕工業、就中綿工業——勿論、最初は本國工業の抵抗の最も少い粗糸粗布に於てあるが——に進出し初めた。然し乍ら、印度に發達した所の工業は、二種の纖維工業と炭礦業並に栽培園に止まつてゐる。綿工業を除けば、それ等は凡て本國資本の手に於て行はれ、又何等本國産業の利益と對立するものでない。印度に於ける近代的企業はこの發展の裡に、又産業資本時代に於ける本國と植民地の經濟關係が如實に示されてゐる。

世界經濟に於て自由競争の支配する所の資本主義の最高發展は、略十九世紀の六〇年代乃至七〇年代に相當してゐる。この時以後に、各國の植民地獲得のどえらい競争が行はれ、列強の植民地占領を通じて資本主義は其最高發展段階たる

2、例へば印度の本國費として年々負擔する額は次の如くである。(百萬磅)

年	平	均	公債利子	海軍費	陸軍費	行政費	鐵道利子 保證官 營業	物資購入	總計
一八六一—七四年	二・〇	〇・一一	二・五	一・一	三・五	一・一	一〇・五(東印度會社 配當ヲ含ム)		
一八七五—九八年	二・六	〇・一〇	三・四	二・三	五・三	一・二	一四・九		
一八九九—一三年	二・五	〇・一四	四・一	二・五	六・九	一・六	一八・九		
一九一四—二〇年	三・五	〇・一四	四・六	二・六	九・六	二・九	二三・九		

C. N. Vakil, Financial Developments in Modern India, pp. 580—581(矢内原忠雄「印度幣制の植民政策的意義」より引用)

帝國主義へ推移するのであるが、印度の支配の確保は、イギリス資本主義のこの推移の有力なる前提をなしてゐる。そして帝國主義の時代に於て、植民地土着資本と本國資本との對立の激化、植民地被壓迫民衆と本國支配との對立等の諸々の矛盾は全面的に展開される。

第三章 イギリス帝國主義と植民地印度

一、帝國主義時代の植民地の意義

生産の集積と獨占への、金融資本への資本主義の推移は、略々十九世紀の六〇—八〇年代から開始される。それは又、植民地獲得の激しい闘争の時代であり、かの推移は、この闘争と結び付いてゐる。

獨占資本主義は、植民地を自己の工業の爲の農業的原料的從屬物に轉化せしむるものである。一般に、資本主義の發展と共に、工業と農業との發展の不均衡性は、擴大され強化され、之が爲に原料問題は益々激化してゐる。然るに植民地は、かゝる原料の基本的生産者である。されば帝國主義は、又其の採取から超利潤の堅實なる可能性を持ち得る所の之等の原料源泉を獨占的に確保しようとするのである。

植民地に於ける超利潤獲得のこの可能性は、原料の獲得と密接に聯結されて、金融資本をして投資部面としての意義を植民地に感ぜしめる。事實この投資は、政治的支配と共に廉價なる土着の勞働力を吸収して、巨大なる利益を齎してゐる。この投資は、又、より屢々植民地借款の形を取つて行はれてゐる。かかる借款は、その利子が普通の利子に比べて一般に高率に當ることを暫く除外しても、尙本國資本の手に、發行費、種々の手数料と云ふ形で利益を與へてゐるのみならず、それは、屢々本國資本に有利なる利權獲得の機會を、本國商品の販路擴大の爲の機會を提供してゐる。

然し乍ら、資本の輸出は、殊に植民地が完全に本國資本に隷屬せしめられてゐる場合には、其の基本的方向は、植民地の工業化の線に沿うてではなくして、反對に其の隷屬化の強化、本國の農業に原料的附屬物への強い轉化の努力の線に沿うて行はれること、並に著しい程度に非生産的目的(國債其他公債等の形に於て)の爲に行はれることを指摘せねばならない。

販賣市場として、植民地は、此段階に於て、尙、或は舊にも増して、大なる意義を持つてゐる。獨占資本は、關稅、輸入禁止等々によつて、自己の商品を以て自己の國內市場を残る限なく獨占しようと努めるにつれて、國內市場に於ける供給は、人爲的に押下げられ、其結果既存の資本の利用の減少に反比して生産費が高まる。これは一方に於て、資本輸出の基本的原因をなすのであるが、他方に、外國市場での強行的な販賣によつてこの矛盾を解決しようとする原因をもなしてゐる。この獨占價格實現の機會、他國の經濟領域に對する強行的販賣の機會の根底に、植民地市場は著しい役割を演じてゐる。其他に、植民地との貿易は、海運の方面から見れば、本國汽船會社に航路獨占の機會を提供してゐる。それは貿易收入の外に、海運收入、保險代理業務の費用、保管料等々の見えざる收入費目が、本國の植民地銀行並に本國銀行の手に流入するのである。

植民地が本國によつて吸収される所の利益は、以上に盡きるのではない。植民地の經濟外的收奪の可能性も亦之に劣らず重要である。植民地の本國の「善政」に對する貢納、高額なる本國人高級官吏の收入、巨大なる恩給等の本國への送金は、殆ど大部分が直接、間接に植民地の租稅收入を源泉としてゐる。

最後に、植民地は、直接に防禦的、攻撃的根據地として、一般に純粹に軍事的、戰略的意義を持つてゐる。之につい

ては、かの世界大戰に、數百萬の植民地兵が本國の爲に戦線に動員され、又植民地内部に於ては、戰時公債の強制的實現、並に本國の戰時經濟に補充する所の生産への動員に關して、それが演じた役割を想起すれば足るであらう。

二、イギリスと印度

印度は、かかる關係の一の典型を示してゐる。

原料源泉として、又之と結合する投資市場として、此段階に於て、印度はイギリスに對する其意義を新にした。云ふ迄もなくこの廣大なる植民地は、農業に原料供給の盡きない泉である。イギリスの資本は、農民の大多數を零細所有、零細經營の埒内に抑制し、農業制度に於ける封建的遺物の支配を保有し又之を支持しつゝ、地主、土着商業資本、高利貸資本を媒介として、單一作物の強制的栽培、農産物の半強制的買占、獨占的輸出を行ふと共に、直接に此國の重要な生産諸力、生産手段を獨占して、その廉價なる労働——それは、封建的諸關係の殘滓の維持せられる爲に生ずる農村の労働過剩人口を、より有利に利用しうる結果であり、「人間の生命と労働力は、印度で賣られる凡ゆる商品の中一番廉い」のである——を利用する目的を以て、農業に原料的諸企業に着目し初めた。

かくて、此時期には、イギリス資本下にある黄麻工業が隆盛に趨き、茶園を初め栽培園が等しくイギリス資本の下に巨額の利益を擧げ、食料品の本國への輸入と共に、それ等は、原料獨占と植民地經濟の本國への從屬を鞏固にした。一九一三年に於て、印度は、イギリス本國の輸入飲食料品總額の七%(帝國內輸入の二六%)を占め、原料並に半製品について八%(帝國內二三%)を占めてゐる。前者は、合衆國、アルゼンチン、デンマーク、カナダに次で第五位に在り、後者

は、合衆國、ロシアに次で第三位、帝國內第一位に、更に輸入總額は六%（帝國內二六%）を以て、合衆國、獨逸に続き帝國內第一位に當つてゐる。

然し乍ら、印度に對するイギリスの投資は、其經濟全體が本國によつて獨占的に支配されてゐる爲に、工業的目的よりも寧ろ、高利貸的性質を帯び、より屢々國債、鐵道借款等の形式を採つてゐる。最近の資料は、それを次の如く物語つてゐる。(一九三〇年末現在、セイロンを含む)

投資額 百万磅	對帝國領		對全世界	
	内投資額	投資額	内投資額	投資額
政府、自治體政府	二六一	五七・〇	二四・〇	一八・一
鐵道	九〇	一九・六	二五・四	一一・四
公共事業	一二	二・六	一九・〇	七・〇
合計	二六三	七九・六	六八・四	三六・五

Sir R. Kindersley, British Overseas Investment in 1931 (Economic Journal, June 1933)

この投資に對する巨額の利拂の外に、印度はイギリスの「善政」に對して、即ち印度に於てイギリス資本の利益を代表する僅々數萬人の官吏の俸給、恩給其他に對して年々四〇クローアール・ルピー、即ち三千萬磅の支拂を負擔させられてゐる。印度の商品市場としての重要性は、此段階に於て益々増加してゐる。蓋し帝國主義列強の間に市場争奪戰が激化してくる時に際して、此廣大なる植民地を、永久的に自己の販路として確保し、之等の海上運輸の獨占と共に巨額の利潤を吸収することは、激烈なる對立抗争に於ける無限の武器として役立つからである。一九一三—一四年に終る五ヶ年間に於てイギリス商品は印度總輸入額の中の六三%を占めてゐた。さればイギリスは、飽くまで土着工業の發達を阻害し、

續けて來たのである。

然し、世界大戰並に戰後恐慌に發端する資本主義の一般的衰退の狀勢の下に於て、又近時の深刻なる世界恐慌の條件の下に於て、現實の發展は様々な要素を加味して極めて錯綜する様相を採つてゐる。それを次に印度に於ける土着資本家階級との關連に於て概観する。

1. 印度に於ける外國投資額の推定は區々として正確に知るは困難であるが、それ等を列記すれば左の如くである。(百万磅)

推定者又は發表雜誌	發表年度	總額	推定者又は發表雜誌	發表年度	總額
Economist	一九一一	四七〇	Sir D. Sassoon	一九一七	四二〇
Sir G. Paish	一九一一	三六五	Sir Lionel Abrahams	一九一九	四五〇
Sir G. Paish	一九一六	三九〇	Financial Times	一九三〇	六〇〇
Sir A. Birkenyre	一九一七	五〇〇	G. F. Shirras	一九三二	四八一
又 V. K. R. V. Rao 氏並に Dr. B. R. Rau 氏は、この投資を左の如く推定してゐる。(Economic Journal, Mar. 1933)					
India Analysed Vol. III. p. 88)					
磅拂印度政府公債		三三九・四百萬磅	市債及港灣トスト借入		一三〇・〇百萬磅
ロンドンに在るルビー公債		六・二	印度ルビー會社資本中の株式		四二・五
外國登録株式會社にして印度に事業しつゝあるもの		一六一・七	印度に事業する合名、合資會社の外國人持株其他		一五・〇
印度以外に主として事業する銀行、保險、貿易會社		三四・六	合計		六一二・四
控除 印度人所有磅公債		三七・五			
印度人所有の在外(stationed abroad)資本額		一〇〇・〇			
總計		五六四・九			

三、イギリスの印度支配と土着ブルジョアジ

再説。帝國主義の時代に於ては、母國の金融資本は、植民地の經濟生活を完全に其の手中に收めてゐる。植民等に於ける生産諸力の發展は植民地民衆の大多數の慾望に従つて統制されるのではなく、其時に於ける母國資本の價值増殖の慾望に従つて統制される。従つて植民地の經濟は、原則として片輪な發展を遂げしめられてゐる。たとへ或る條件の下に植民地の土着資本が發達したとしても、根本的には、それは益々植民地經濟の帝國主義經濟への依存を強めることが條件となつてゐる。

帝國主義母國が、植民地に於て工業の發展を促進し、土着資本の發展を許す場合は、次の如き特別な條件の下に於てである。一、戰爭の準備又は戰略的に重要な各種の金屬工業、化學工業の必要の場合、二、他の帝國主義國の市場侵略に對し、土着資本との妥協に於て植民地關稅を引上げる場合、此場合には母國資本は特惠關稅を設定するを專断れなす。三、植民地民族革命運動の高潮期に際して、土着資本を味方とする必要上から讓歩する場合、が之である。

この事情は印度に於て餘す所なく示される。既に述べた如く前世紀の終りの廿年以降、イギリスが印度に齎した工業的發展は、多かれ少なかれ、土着工業資本家階級を發達せしめ、彼等は綿工業に其牙城を見出してゐた。彼等は、關稅を、國內消費稅を、幣制を通じてのイギリスに依つて加へられてゐる植民地經濟の獨立的發展に對する阻害に不満を抱き、國民會議なる黨派を組織し、ポイコットを以てイギリスに對抗してゐた。然し、世界大戰に起因する所のイギリスの全經濟の變向、印度に對する日、米兩國の急襲は、イギリスをして印度土着工業資本への讓歩、工業の發達促進を餘

儀なくせしめた。綿工業の發展、鐵鋼業の急激なる活動を始め、全經濟の成長は此時期に見出される。

一九一六年には、印度に於ける工業的發達の可能性、技術的要因等の先要條件の研究を目的として、印度工業委員會が組織され、工業發展の諸手段を勸告し、一九二二年には財政委員會は、資本の自由なる流入、關稅保護、急激なる工業的進歩の諸政策を採ることを勸告してゐる。そして此の勸告の基礎をなした所の要因は、戰時に印度で收められた莫大なる利益の影響の下に本國より資本の夥しい流入（一九二二年はイギリス帝國領資本輸出の四七・八%で、新記録となつた）と、大戰中に於ける支配の社會的基礎の擴大の必要、並に戰爭が惹き起した所の世界資本主義の一般的危機の

2、イギリス資本家階級に取つて印度の齎す利益について、次の計數がある。——世界經濟年報（一九二七年下半年）による
 ヴアルガの計數（一九二四—五年）

善政に對して	三〇百萬磅	イギリスに於ける政治上の費用支出	五〇〇百萬ルビー
投資の利潤	一〇〇〇	外國事業家の利潤	五三二
商業上の利潤	一五	銀行手数料	一五〇
工業上の利潤	一二	外國海運會社の運賃	四一六
船般保險其他	一〇	外國資本の利潤	六〇〇
計	一六七		二一九八（一四六・五百萬磅）

3、例へば綿業は戰前平均供給のうち、七〇%、三〇億嗎が英國産、二八%、一二億嗎が印度産であつたが、戰後には三五%、一〇億嗎が英國産、六一%、一七億嗎が印度産となつた。鐵産價格は一九〇八年の八百萬磅から一九二〇年には三〇百萬磅に上り、工場規模は二〇人以上雇傭の統計で七、一一三（一九一一年）から一〇、六六九に増加し、印度で登録され活動する會社數は戰前の二、四九九、拂込資本七一六百萬ルビーから、戰後（一九二〇—一年）四、二八三會社、一、五八三百萬ルビーに増加した。

防衛、印度では國民解放運動に對する内部的擾亂の必要からの土着ブルジョアジーへの讓歩であつた。

然し之等の特殊な事情が消失するか、或は微弱になるや否や、帝國主義母國の植民地に於ける政策は、原則として其獨自的發展を阻止する方向に還る。従つて植民地の國民經濟の發展、殊に植民地に於ける資本主義工業の發展は、帝國主義の植民政策との鋭い對立の下にのみ進行するのである。

殊に、大戰に依つて齎されたイギリス資本主義の地位の決定的な變化——戰後恐慌と相對的安定の時期を通じての、合理化、市場獲得等の凡ゆる努力にも拘はらず——戰前の王座からの其の後退の事實は、彼が確保しつゝある市場、就中印度の重さを充分に確認せしめたのである。今やイギリスは、戰時に土着ブルジョアジーに許容した讓歩の約束を、峻厳に拒否せねばならなくなつた。再び新なる力を以て工業抑制の爲の諸方策——工業信用授與の爲の國立銀行設立要求の拒否、鐵道敷設計畫に於ける本國材料の使用、究局には金を本國に集中せしめ且つ輸入品價格引下となつた所の幣制の改革——が講ぜられた。然し乍ら、植民地印度の工業化は徐々に行はれてゐる。勿論それは、本國資本との鋭い對立の下に於てであり、一時はそれは革命的危機の招來、ボイコット運動、民族主義的暴動等にまで發展したものであつた。

他方に、戰後資本主義の一般的危機、對立の激化と共に、イギリスの資本は、軍略的意義ある印度人の所有する企業に對して、直接的吸收並にそれとの合同提携に努力してゐる。例へば印度第一流の鐵鋼工業タータ會社は、厚い保護——補助金の下附、關稅保護等——の下に置かれ、それは直接にイギリス資本下にあるベンガル鐵鋼會社と同盟し、益々密接にイギリス資本の利益に織り込まれてゐる。

今次の恐慌の要素をも加へて、現實の道行は極めて複雑である。土着工業の徹底的抑制を願望しつゝもイギリスは、

印度市場に對する日本商品並にアメリカ商品の侵入を防止する爲に、土着工業に對して若干の讓歩を示しつゝ之と提携せねばならなかつた（綿業關稅の發展を想起せよ）。他面に於て、それは、恐慌の深化と共に増大する労働者、農民の反抗に當面しての、土着ブルジョアジーとの妥協でもあつた。

かく土着工業資本家は、高利貸的商業的資本家と異つて、本國資本に對立し、植民地民族全體の鬭争に参加するが、それは一定の條件の下に於てである。民族鬭争の發展の過程に、帝國主義母國の資本と同じく土着工業資本の壓迫の下に非人間的な労働條件と低廉な労働賃銀の下で、赤裸々な搾取の下に置かれてゐる植民地労働者階級を必然に覺醒せしめるに至る。そして此階級は、等しく帝國主義母國の資本並に其買辦たる商業資本、高利貸資本並に地主を通じての壓迫の下に苦楚を嘗める農民勞苦大衆を自己の周圍に引寄せつゝ、植民地解放の爲に組織的な力を以て抗争する様になる。この時から、土着工業資本は、本國資本と對立しつゝも、根本的には、味方を其處に見出すのである。

第二部 農業に對する諸政策

第一章 序説、農業發展の概観

印度の農業が、廣汎に資本主義的諸關係の内に織り込まれるに至つたのは、十九世紀、殊にその後半に遡る。勿論十八世紀には、イギリスの商業資本が、十九世紀の前半期には、勃興しつゝある産業資本が、印度を、本源的蓄積の對象として、商品市場として、收奪、開拓を續けて來てゐる。それ等はいかの東印度會社及び其吏員の内外貿易の獨占による所の、租税を通じての、或は直接的牧歌的の印度民衆の飽なき收奪、地主と小作並に零細所有農等を確立した土地制度の變革、同時に普遍的に行はれた地租の金納化、是と結んで印度の古い經濟機構を破壊した所の資本家的商品の夥しい浸入、又農民を塗炭の苦に置くと共に資本主義的諸關係の一層の浸透を助長した累年の大小の饑饉等々の諸經過に物語られてゐる。

かくて十九世紀の前半期の終には、民衆の困憊は顯著となつた。イギリスは、今や其製造工業の輸出市場として長く此國を保持する爲に、國內産業の破壊に代る新しい生産力を作り、當時最底に達したと思はれた民衆の購買力を増大せしめねばならなくなつた。印度を原料生産國として本國の製造工業に緊密に従屬せしむる必要が日程に上された。偶々一八四六年合衆國に起つた棉花饑饉は、ランカシヤの眼を印度に向けるに役立ち、道路交通の整備、灌漑の普及が具體

的問題として考慮され初めたのである。

廣汎に且つ強度に印度の農業が資本主義的關係に入り込んだのは、將に此時期以後である。Lord Dalhousie による道路の開築、並に一八五三年に初りセポイの反亂を契機として急速に擴大された鐵道の建設（一八五九年、四三二哩）は、イギリス商品の爲に途を開き、同時に農産物の商品化を促進した。

だが、印度農業の世界經濟への連關を急速に押し進めた契機は、やがて一八六一—六五年に起つたアメリカ合衆國に於ける南北戦争に求められる。この内亂に基くランカシヤの原料不足は、必然に印度棉花の需要を喚起し、イギリスに對する原棉輸出は、其價格と共に飛躍的に増進を示した。²⁾

この好機に會して印度政府は、農産物輸出の爲の諸政策——例へばボンベイ、中部諸州に棉花事務官を任命し、又交通手段を整備する等——を押し進めた。かくて棉花作付面積は増大し「農民の地位には大なる決定的變化が生じた」（中部諸州事務官 Rivett-Carnac の報告一八六七—六八年）のである。³⁾ 同様にして好況はマドラス州の Bellary 縣では三ヶ年間に一〇五萬磅の所得を農民に齎らし、ボンベイ州では五年來の旱魃による不作にも拘らず豊年並の價格を得たと稱せられる。

この未曾有の棉花景氣は、一方に於て一般物價の高騰を齎らし、他方に於て道路、鐵道の發展を促し——鐵道は一八六九年には五、〇一五哩に達した——農産物の商品化と商品農産物生産への急速なる拍車をなして、「明瞭に且つ劇的に印度の經濟的孤立を破壊した」のである。

この事情は、更に一八六九年のスエズ運河の開通によつて倍加された。從來熱帯圏を廻航する爲に技術的に殆ど不可

能であつた小麥の輸出は、今や地中海を通じて旬日餘にして歐洲に輸送されうることとなつた。唯に小麥に止まらず、この歐亞兩大陸の接近は、南北戦争の終了に基く原棉輸出減退と阿片貿易の停頓を除けば、印度農産物の輸出——穀物類、原料黃麻、種子類、茶、皮革類——を急速に増大せしめ、同時に綿絲、綿布類、絹製品、機械類等製造工業品の著しい輸入を齎らした。

やがて來たこの好況に對する反動は、一八六五—六年のオリッサの大饑饉と伴つて激烈なものがあつた。好況に際しての膨脹した信用、好況時に基を置いた増大した地租、小作料、今や之等の一切は逆に農民の肩に擔ひ切れない重壓として降りかゝつて來た。破産の續出と農民の土地の喪失、加ふるに Ganjam, Rajputana 地方を初め各地の續發した

1、印棉のイギリスへの輸出は、一八三〇年代に初まるが、農業に廣汎に影響を及ぼすには、遙に遠いものであつた。
2、對英原棉輸出並に價格は左の如くである。(D. R. Gadgil, The Industrial Evolution of India, pp. 17-18)

對印輸出 棉花價格		對印輸出 棉花價格		
一八五九年	五〇九・七千依	二一七	一八六三年	一、二三〇・〇千依
一八六〇年	五六二・七	三一七	一八六四年	一、三九九・五
一八六一年	九八六・三	四一二	一八六五年	一、二六六・五
一八六二年	一、〇七一・八	六一四		七一

3、例へば中部諸州に於ける棉花作付け増加は左の如くである。(上掲書(チエーカー))

一八六一—二年	三七五・六	一八六三—四年	四八八・四	一八六五—六年	五八七・四
一八六二—三年	四二七・一	一八六四—五年	六九一・二	一八六六—七年	五九八・八

饑饉を經過して、高利貸地主の勢力は一段と強化された。されば一八七五年の Deccan 地方、ボンベイ州 Poona Ahmednagar の諸縣に於ては、農民の憤懣は高利貸襲撃の形を採つて爆發し、其大部分は借用證書返還の要求を掲げてたものであつた。農村負債對策は將に之等の暴動を機として行はれ初める。然し乍ら、今や商品農産物の生産は印度に普及した、農作物栽培は單一化され地方化された。それは輸出向作物に關するのみでなく、一般に農産物の國內流通を急速に引き起し、國內は相互に依存を深め、印度農村經濟の孤立はかくて完全に打破されたのである。

其後の發展は比較的順調である。然し順調と云ふのは、農業が資本主義的に順調に發展したことを指すのではない。イギリス資本主義が半封建的關係を維持し、印度農業を抑制しつゝ、この巨大なる植民地を經濟的に克服し、吸収した過程に於て順調なのである。印度農業に取つては、それは沈滞と停頓の、否衰退への道行ですらあつた。銀本位制から金本位制への諸外國の幣制の改革を他處に、印度はイギリスの利益の爲に依然として銀本位を維持せしめられ、ルビーの價値は著しく下落し、金貨を以て支拂ふ本國費は、其重壓を農民の背にかけた。農産物の輸出増進は、農民の貨幣經濟への連關を深くし、同時に高利貸の制覇を齎らした。打ち續く廣汎にして激烈なる饑饉は、夥しい人命の亡失、高利貸の跋扈、農民の土地の喪失に結果したのみでなく、經營を益々縮少せしめてゐる。殊に世紀の最後の五ケ年に勃發した二回の大饑饉の結果は、總耕地の減退(聯合諸州、ボンベイ)と二毛作地の縮少を見、更に肥料に對する出資を懸念し専ら不作の虞少き作物へとの農民の意圖は、彼等が依存する輸出向作物から——例へば聯合諸州、ボンベイに於ける印度藍、油種子栽培の減少——より下級な品種の栽培へと後退せしめてゐる。

この衰微の傾向に驚愕した印度政府は、一九〇一年の饑饉對策委員會以後、或は灌溉委員會を組織(一九〇三年)し、

或は Lord Curzon の努力の下に、農業調査機關の樹立、農事試験所の設立、農科大學の開設等、銳意農業の改善と教育の普及に盡しはした。だがそれ等も農村に於ける階級分化の進行を阻止すべくもなかつた。

かくて今世紀の初期には、一方の極には大土地所有者、搾取農、高利貸の一群があり、他の極には無土地の小作人、農業労働者並に極少所有の零細農の巨大なる群が存在し、それは都市に於ける工業阻止政策と相俟つて、土地に對する人口の壓迫を益々重からしめると云ふ状態にまで導いた。

かゝる環境の下では、世界大戰前の數年及び大戰中の一時的好況も、零細農の利得には至らなかつた事は當然であるのみならず、大戰への参加は印度民衆の血と富の參與であつたが、結果は戦後の不況、農業恐慌の深化によつて、農民

4、例へば、小麦及米の輸出の増加は次の如く見られる。(千ハンドレッド・ウェイト)

小麦	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年
米	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年
茶	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年
胡椒	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年
糖	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年
其他	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年
入 港	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年
出 港	一八七四—五年	一八八四—五年	一八九一—二年

茶はオデッサに送られ、絹糸、油種子はマルセニュに仕向けられた。又印度の外國貿易に従事せる船舶噸數は左の如く増加してゐる。(千トン)

未註参照。

第一章 序説、農業發展の概観

第二章 土地制度の改革

第一節 序言 土地所有の諸形態

英領印度の官廳統計は、土地所有の諸形態を専ら地租納入者と國家との觀點から取り扱つてゐる。従つて土地所有の根本的諸關係を、之によつて理解することは極めて困難である。此官廳統計によると次の三種が擧げられる。

- 一、永久的ゼミンダール (Zamindari, permanently settled) 此種の下では、地租額は永久的に設定され、支拂の全責任は地主が負つてゐる。其範圍はベンガル、ビハール・オリッサの大部分(各州の四分の三以上)、マドラス州の約十分の三、聯合諸州の十分の一及びアジュメール・メールワラ、アッサムの一部の地域に亘り、政府森林を除く全英領印度面積の約一九%に當る。
- 二、週期的ゼミンダール [Zamindari (individual proprietors or village communities), temporarily settled] 之に包括される地域は、パンジャープ、西北國境州の全部、聯合諸州の大半、中部諸州の四分の三、及び残りのベンガル、ビハール・オリッサ、アッサム、アジュメール、並にボンベイ州の一部、全體で一九八・八百萬エーカー、全面積の約三〇%に當る。税率は週期的に引上げられ、之等の諸州の自作農の協同體、又は地主の家族或は聯合體の間に普及し、納税の爲の相互的保證がある。この制度の下には、ウードの大土地所有者たるタルクダール (Tankdar)、中部諸州の

地主マルグザール (Maluzar) も包含されるが、この兩者の場合にはそれらの地主が納税の責を負うてゐる。

三、リョートワリ (Raiyatwari) マドラス、ボンベイ、ベラール、アッサム、ビルマの大半を含み英領印度の約五一%を占める。地租は凡て週期的に引上げられ、支拂の責任は事實上の(小土地)所有者が負ひ、納税遲滞の場合所有は自然的に廢棄される。この地税納入の下では、土地は農業の目的以外には使用することを許されてゐない。

明な如く、右によつては、土地所有の状態は極めて模糊としてゐる。今、以下の記述の理解の便宜の爲に、イギリスの改革の原型に基いて之を整理してみよう。

- 一、大地主の所有。ベンガル、北マドラス、ベナールスの永久的ゼミンダール。残りのベンガルの週期的ゼミンダール。ウードのタルクダール、ボンベイのコート。各州のイナムダール。
- 二、村落地主、共同の地主の所有。アグラ及び残りのウードの所有團體、中部諸州のマルグザール、パンジャープの所有團體。
- 三、農民的小所有。マドラス、ボンベイのリョート、ビルマ、アッサムの特別法下の農民。

農民層の激しい分解、高利貸、地主の土地の兼併によつて、其後之等の關係は勿論變化を加へてゐる。本章及次章はこれ等の土地所有關係が如何にして成生し、分解して行つたかを研究の對象とする。

第二節 イギリス支配以前に於ける土地私有の發生過程

既に述べた如く、イギリス支配以前の印度に於ては、原則的には、土地は國家的規模に於て所有され、國家は現物地代(租税)の形に於て農民の剩餘生産物を直接に擅有し、農民は相續的占有地を、唯一の生活の基礎として保持してゐたと云ふ事情が見出される。

然し乍ら、部分的地方的には、事實上の土地私所有が存在してゐた。殊にアウランゼブ帝(在位一六五八—一七〇七年)以後に於ては、商業資本の發達並に支配者層の内部抗争によつて王朝の衰微が加はるに従つて、事實上の土地私所有は、漸次に擴大され、顯著となり來つた。

既に十八世紀の初には、ベンガル、ウードには相當廣汎に、又北部マドラス、アグラ及び中部諸州にも、更に部分的には Gujarat 地方(ボンベイ)、アジメール、ベラール地方に於て事實上の土地私所有の存在が見出される。之等の土地私有者の成生の過程は略三様に辿ることが出来る。

第一は、徴税請負人より生じた所の私所有である。この最も典型的なベンガルのゼミンダールについて見よう。ゼミンダールは、其起源を概括的に言つて、征服された舊王族、官吏、並に徴税請負人に求めることが出来る。徴税請負人について云へば、此形態の發生の時期は現在明でないが、ベンガルでは、アウランゼブの死の直後(一七一三年)既に一般的制度となつてゐる。彼等は勿論最初は、如何なる意味からも土地所有ではなく、單に一定の報償によつて一定地域の徴税を司り、之を國庫に納付するものであり、其権限は彼の生涯のみの官許であるに過ぎなかつた。然し王朝の衰微と共に彼等は附近の荒地を自己の奴隸によつて開拓し、又買収、抵當、沒收の機會によつて彼の私所有地を擴大することが出来た。勿論各個のゼミンダールは免税地(Nankar)彼の報償として生計の爲に總納付額より控除される地域)をも

私有と考へた。アグラ地方では、舊王族又は地方官吏は、ウード王國(モグール帝國の崩破期に事實上獨立した所の)の下で徴税權を與へられてゐたが、同様に私的土地所有者に轉化した。既に商業資本の或程度の發達を見たウード王國の時代では、この政府によつてタルクダール(封建的稅區長)と認められたものは、必ずしも舊いヒンヅー王國より出發した王族のみでなく、或る場合には金融業者であり、又軍官であつた。ボンベイ州の北部沿岸地方の豪農(Local farmer) Khote も亦治下の村落の徴税事務に與つてゐたが、村落の自由小作(Dharekari Ryot)を使役して未開墾地を開拓し、同様に事實上の土地私有者となつてゐた。

第二は土地私有の起源を支配者に持つものである。之等のうちにはマドラスの Polygar を見出す。彼等はモグール朝の下では徴税人よりも寧ろ王朝に貢納する豪族(local chief)であつた。そこには Palegara 又は Polygar と稱する領主權を示す土地があり、彼等も等しく王朝の衰微と共に土地私有者として存在した。南印度の Vijayanagar 王朝の滅亡(一五六五年)に際して Nayaka と稱する直臣の一群の後裔及び Ramnad の豪族も亦之の例に加へられる。中部諸州の徴税人は Gond 王國の直臣か豪族であつたが、マラッタに征服されて以來、大部分は新政府領となつたが、尙外邊の山岳地方は收税額も少く放置されたまゝ豪族として程よき貢納をなして領地を保持してゐた。同様にしてボンベイの北方(主として Ahmedabad)には古ヒンヅー王國に於て外邊を領有したものが殘存し、アジメールでは彼等はモ

1. 2. B. H. Baden-Powell, Land Revenue and Tenure in British India, pp. 106-9

3. Roresh Dut, The Economic History of India, Vol. I, p. 355

4. Baden-Powell, ibid. p. 112

グール朝の下にタルクダールと稱せられてゐた。又グヂェラット地方では、アウランゼブ帝の南征の企圖以來全土は地方權力者の抗爭に委ねられ、邊境の豪族は新征服者に一定の稅收を納付して本領を許容され、タルクダールの名稱を與へられた。

第三は主として授與に起源するものである。授與はモグール王朝の下で二種に區分される。一は通常、聖僧、學校、寺院の保持を目的として與へられ、多く免稅され、これ等の土地は *Iran* (= reward, benefaction) 又は *Muafi* (= pardoned) と稱せられる。他は *Dehqan* と呼ばれるもので、或種の土地(例へば邊境地方)の軍事的乃至政治事務を司る者に與へられ、當該地域の收入を以て彼等の目的を遂行するものである。この授與は最初は單に生涯のみであつたが後に世襲と化した。ボンベイ、マドラスには此等の事例が見出される。

農民は村落共同体をなして生活してゐた。各々の家族は村落の田畑、草地及び菜園の一定の分け前に對する権利を持ち耕地は多くの場合小さく區分して各家族間に分配されてゐた。此處で農民は自己の勞働の實現及び自己の生活手段の爲に必要な物質的諸條件を持つ直接的生産者であつた。

村落には二の形態が見出される。

第一の形態の村落は、事實上の私的所有者の、或は共同的所有の村落である。此處では村落は一個人の所有か、共同の所有團體の所有となつてゐる。後者の起源は、之を共同の祖先よりの、征服種族の家族より等の、様々な血縁關係による派生と、單なる共同的植民群によるものに求める事が出来る。之等の共同所有は各家族が、多く自己割當の耕地を耕し、未耕地は共同體の共有で一般に開放し、其利益(果實、棕櫚草等の)は所有團體の間に分割される。村落の事務は

Panchayat と稱する共同團員の戸主より構成される委員會によつて行はれ、徵稅事務は之等のうちの主流家族乃至長老によつて、政府の許可の下に司られる。共同所有團體が非農業的身分の出身である場合には舊來の土地占有者の群が小作として用ひられてゐる。

村落が一個人の所有である場合、例へば王、貴族の血族者が村落を授與される如き場合。其場合、最初は、彼等は單に其地域の國家への納稅を讓與されたに止まり、又彼等も現存する土地の占有者の追放乃至權利の剝奪を意圖したものではなかつた。だが次第に荒地の開拓等によつて、舊占有者達よりも遙に大なる地域を獲得し、爾後更に近隣の買収、沒收を機會に遂に全村落の所有者に轉化するのである。

第二のものは *Ryotwari* 村落と稱せられ、村落に於て分配された土地を通常彼と彼の家族によつて耕作した。此種の村落には村名主と村役人がある。村名主は村落の開拓者、其子孫である場合が多く、彼等は村落に於ける租稅の徵收を委任され、この職務に對する報償として一定の土地——當初は單に免租地であつた——を有つてゐた。確に彼は村落の良土を占有してゐたが、村落全體の所有者ではなかつた。従つて村落の附近の荒地は村名主には屬さず、又可耕地は王に屬し彼は單に之を管理したに過ぎない。かゝる形態の村落はボンベイ、マドラスを主としベラール、中部諸州に見出され、ベンガルにも亦存在する。

5. Baden-Powell, *ibid.* pp. 53-5.

第三節 土地制度の改革

一、改革の意義

イギリスの支配の下に、印度に於ける土地制度の改革は、租税制度の確立と同時に、之と結合して行はれた。それは東印度會社によるベンガル、ビハール、オリッサ三州のデワーニ獲得から、パンジャープの併合に終る事實上の印度統一に至るまで、征服地に對し遂次施行されるのであるが、特に十八世紀の九〇年代から十九世紀の二〇年代に至る期間に其根源が樹立された。

東印度會社——それ自身資本蓄積の有力なる槓杆であるこの獨占會社は、印度の政治的、經濟的支配に於て遺憾なくその本来の使命を果した。會社自身の專横はもとより、虎威を借る會社吏員も意の儘に不幸なる印度人を劫掠し、又大資産は雨後の筍の如く一夜にして簇生し、本源的蓄積は預め一志を費すことなくして成熟し得たと云ふ状態であつた。だがそれは印度の荒廢と會社財政の逼迫と會社吏員の極度の腐敗と、更に印度民衆の反抗を喚起せずにはおかない。次第に搾取の組織化、體系化が必要となつた。かくて今や土地制度の改革——土地私有の法認、農民の共同耕地、共同林野の分割並に國家による領得等々——を、印度に對する組織的な本源的蓄積を確立させうる前提條件として遂行せねばならなくなつた。同時に之と結合して行はれた租税制の確立は、將にこの蓄積の好箇の手段を提供したのである。

この國に對する本源的蓄積の過程は、又當然に同時に商品市場としての印度の前提條件を完成さすものに他ならない。

ない、當時既に發芽したマニファクチュアは植民地によつて販路を與へられ、販路の獨占によつて増進する所の蓄積を保證されたのであるが、小農業と家内労働の結合の強力な基礎に立ち、分散し獨立的に存在した自足的な古い印度の經濟機構を破壊することなくして、此目的は達成することが出来ない。それはこの鞏固なる機構の意識的な破壊と同時に本國よりの廉價なる商品の浸入によつて敢行されねばならぬのであつたが、この土地制度の改革は市場成立の爲の前提條件をも確立せしめたものである。

イギリスの植民者は何よりも先づ實際政治家であつた。彼等は印度自體に現存する階級勢力の充分な考慮に基いて其目的を追求し、之等を其場合々々に應じた適宜の妥協によつて服従せしめた。かくて或る場合には既に事實上の土地私所有者であつた徵稅請負人が地主たる地位を法認され、他の場合には舊領主權者が同様の進化を遂げ、第三の場合には中間的介在を拒否して直接に、村落共同體を解體し、農民の家族の「持分」を私有地に變ぜしめ、彼等の共同の林野を國家の集中に收めたのである。

租税制の確立は舊來の租法の根本を繼承したものである。従つて定められた地租は封建的貢租の性質を依然として持續してゐる。此處で封建的搾取關係は最も極度に利用されてゐる。此の基礎の上に地租は金納制に改められた。生産諸力の發展による商品生産が一定の水準及び範圍に達した場合には、この改革は商品生産なる性質に相應するが、之無くして或はそれが極めて不充分である場合、古い經濟機構に押し付けられたこの改革は、生産行程に對する打撃を深刻にせずにはおかない。他方外からの資本家的商品が押寄せ、之に強制されて家内労働と農業の結合を斷切られた所の小農民は、今や否應なしに彼の生産物の一部を強制的に商品に轉化せざるを得なくなつた。

獨立的小農民として解放されたりオートワリ制下の農民の窮迫は一層深化した。他方、新地主下の農民は、彼等の小作人として法認されたが、それは將に放任であつた。一八五九年に彼等の地位に若干の保護が加へられるまでは、租制改革による負擔の轉化は勿論、彼等は地主の意の儘の搾取に放置され、これ等の地方では地主は自由なる小作料吸收の公權的確保を得たのである。地主は今やイギリスの支配の支柱として小作農民に對立するに至つた。

二、東印度會社の統治

農民の状態は、東印度會社が東部三州のデワーニを得て以來、一層の混亂と悪化を示した。「イギリスがデワーニを許與された時に、彼等の第一の考慮は本國の過重なる要求——年額四〇萬磅の上貢——と此地に於ける巨額の經費を賄ふ爲に出來うる限りの巨額を徴收することにあつた様に思はれた」と Durbar 駐在官 Richard Becher 氏は Fort William の知事 Verelst に書してゐる(一七六九年五月)。而も三州は王朝と會社の兩頭政治の下に「人民は双方に壓迫され、何れにも保護されざる」状態に置かれた。徴税はベンガルではナワーブ廳に於けるイギリス駐在官の監督の下に回教徒の官吏が、ビハールでは Patna に於ける會社代表者の下にヒンヅの舊官吏が、其他では會社との契約使用人が従事した。之に加へて混亂に乗ずる商人、高利貸の跋扈、會社吏員の極度の腐敗——例へば一七六九、七〇年間に、イギリス人は米を買占め、法外の價格で之を再販賣した等——は相重つて其必然の結果として一七六九、七〇年には未曾有の饑饉がベンガルの境を超えて北印度に廣汎に捲き起つた。實に「ベンガルの人口の三分の一は死し、ガンジス河は時に死屍を以て埋もれた」と稱せられる。而も一七七一年の徴税額は、六八年に比してすら増加を示してゐる。

かゝる激しい収奪にも拘らず、否征略とかゝる腐敗紊亂の故に、會社財政は漸く逼迫を告げ、事態は急迫しつゝあつた。ベンガル州知事 Warren Hasting 卿の任務は先づ之が整備に置かれる。彼は赴任以來銳意努力し行政機關を整備し、收税局を設立し、政府の直接收税と集税官を任命して之に處さんとした。

ヘースティング卿は、一七七二年には五ヶ年を限る入札による請負徴税を試み、從來のゼミンダールの權利を無視し落札に敗れたゼミンダールを彼等の世襲の土地から放逐し、或は納税成績不良のものゝ土地は強力を以つて沒收した。世襲的ゼミンダールは一七七七年以降優先權を附與されたが、徴税額は舊來の計算を基とする概算によりて定められた、彼等の權利が全く承認されたのは一七八四年の印度法案の通過以後である。

だが、かゝる入札請負の方法を通じて、古いゼミンダールの所領地は、カルカッタの金貸業者、投機業者の手に移行し、同時に又入札に際して之等の要素が直接に之を落札した。蓋し當時は土地への投資が唯一の利殖の手段であつたが故である。かくて舊い土地所有者のこの新しい要素による代置が相當廣範圍に行はれた。

5 a. D. N. Banerjee, The Post-Diwani Revenue System in Bengal. (Indian Journal of Economics, Jan. 1934.)

9 R. Dutt, The Economic History of India, Vol. I, p. 56

7 R. Dvijadas Datta, Landlordism in India, p. 59

8 R. Dutt, ibid. p. 53

6 R. Dutt, ibid. p. 57

10 R. Dutt, ibid. p. 61

此制度に於ては、ゼミンダールは様々な方便を以て、與ふる限り農民を搾取したことは明である。¹¹⁾「集税の基準は暴力と壓迫によつて維持され」¹²⁾「國土はこの經濟的壓政に悩み」、農民は逃亡を試みて軍兵の一團に追歸ひされ、山野に流亡し、不平は遂に一舉にまで發展した。之等の反亂は Dinaipur から Rungpur (ベンガル州北部)に及び、かくてベンガルの耕地の三分の一は叢林を以て蓋はれたと稱せられる。¹³⁾

ウッドも亦同様な慘話に滿されてゐる。住民は等しく逃亡せんとして軍兵に阻止せられ、或は父は其子を賣らねばならぬ状態に置かれ、遂に一揆に歸着した。一七八三年此地に再遊した Captain Edward はこの結果を述べて云ふ。土地は「放棄されて、人煙を見ず」と。¹⁴⁾

北部マドラスの Cigar 地方(一七六九年英領)には、オリッサ王國の王族の流を汲む獨立領主的なゼミンダール、平原地方の徵税請負人たるゼミンダールの所領地及び Haveli land (政府直轄領有地)が存在してゐたが、イギリスは、ゼミンダールの土地に對しては一七七八年迄毎年の徵税額設定、爾後は五ヶ年乃至三ヶ年の取極めを繰り返し、引續いて總徵税額の三分の二を國庫に收納してゐた。收奪の激しさに於ては、此地も他州に劣るものではなく、収入はモグール朝時代より七ヶ年にして五〇%を増加したと記されてゐる。¹⁵⁾そして「會社が其吏員の業績を判斷するのは將にかゝる結果による」のであつた。

三、ベンガル地主其他地主の法認、創設

此の如く印度は、會社統治の十ヶ年に反亂は相繼ぎ、會社財政は紊亂し(七四年以降國庫の補助をすら必要とした)、

事態は一段と悪化を示してゐた。この期間に、イギリス本國は、大陸ではナポレオン戦争(一七七八—一八三年)の爲に、勃興しつつある自國産業の生産物と中繼貿易の印度商品の市場を著しく縮狭され、他方新大陸にはアメリカ合衆國の完全な離脱(一七八三年、憲法制定)を見た。かくて今や印度は新なる眼を以て見直されねばならない。合理化された「統治」、王道がイギリス當面の急務となつた。

財政確立の願望はフランシス、フォックスの印度法案に、又一七七五年の印度監督局の勸告にも窺はれる。新なる租制の確立は、總督 Lord Cornwallis (一七八六年來印)と彼の良き助手 Sir John Shore によつて着手された。即ち八九年ベンガルに於て、ゼミンダールとの間に十ヶ年を限り定額の地租を納付せしむる方法(Ten years settlement)を試みた彼は、一七九三年法令を以て、總べてのゼミンダール、タルクダール並に事實上の土地所有者は、其子孫に至るまでこの定額地租納付を以て土地を所有することを許さるべしと規定し、此處に彼等の地主たる地位が確認された。所謂 Permanent Settlement 之である。この定額の地租——國家は新地主が當時耕作農民より徵收する地代の十分の九の額を金納する——は爾後永久的に引上げられず、新地主が土地の改良により増收したとしても何等變化を加へずと定めら

11、賦課は耕地以外に林野産物、市場、巡禮、結婚税等雜多であつた(Baden-Powell, ibid. p. 159)

12、R. Dutt, ibid. pp. 60—62

13、知事 Colonel Hanny は子女賣却禁止令を出した。一揆は彼が本國に召還された後初めて鎮靜した。(R. Dutt, ibid. p. 76)

14、例へば Puddapore の地租収入は、三萬七千磅から、英領となつては五萬六千磅に増加した。かゝる現象は「各地に共通」であつた。(R. Dutt, ibid. pp. 120—21, p. 127)

れた。¹⁵⁾ 他方にゼミングール下の農民は、かくて何等の代償も無しに彼の小作人に轉化された。

同様にして九五年にはベナールスに¹⁶⁾、更に一八〇二—五年には北マドラスの Northern Cidar を初め Jaagir, Salem 等のゼミングール、ボルガールを地主とし¹⁷⁾——此處では地租額は當時の地主取得の三分の二を定額とした——當時の英領全域に亘つた。

かくてベンガル外二州の稅收額(一七九〇—九一年)は二、八六〇千磅、世紀初の Jaffer Khan, Suja Khan 時代の約二倍に、又 Mir Jafar (一七六四—六五年) 並に會社統治の初年の Mahomet Reza Khan (六五—六) 年治下の額をも倍加してゐる。¹⁸⁾ 同様にマドラスの Ceded district は一八〇〇—七年の七ヶ年間に五〇%を増加した。

この租制並に土地制度の改革は、當時のイギリスに尙殘存勢力を持つ大土地所有者の一の戲畫に過ぎないものであるが、同時にイギリスは、尙印度に強く存在してゐた所の國家が眞實の土地所有者であると云ふ觀念を巧に自己の本源的蓄積の爲に利用したものであつた。

イギリスは、かくて尙鞏固ならざる自己の支配の基礎を、地主の公認によつて彼等を保護し、從來の搾取機構を極度に利用し自己の支配の支柱たらしむると同時に、彼を小作人に對立せしめる事によつて強化することに成功した。この新地主が既に從來のゼミングールより商人及び土着投機業者の一群に代置されつゝあつたことは上述したが、この代置によつて、一方には土着ブルジョアジーとして發展の可能を含む等の要素の富を土地に放下せしめ、同時に彼をイギリス支配の要素に轉化し、他方舊來の耕作農民を小作となすことによつて、舊來の經濟機構の殘滓の打破を敢行したのである。かくて農村には貨幣經濟は漸次持ち込まれ、イギリスの廉價な商品侵入の爲の充分なる準備工作はなし遂げら

れた。

地租の永久的設定の下に、地主の收得は國土の安定に伴つて政府の收入よりも遙に大なるものとなつたが、會社財政は依然窮況を脱し得なかつた。一八一三年には會社の印度貿易獨占は停止され、同年會社財政は商業勘定と統治財政に分化された。統治財政の收入は一八二八年までの十五ヶ年に年平均二〇七萬磅に及んだが、支出は「本國費」のみを以ても平均一六九萬磅で、財政勘定は年約一二三萬磅の缺損を示してゐる。従つて統治公債は一七九二年四月の九一四萬磅から、一八一四年同期には三、〇九二萬磅に、同じく一八二九年には四、七二六萬磅に達した。¹⁹⁾ かくて印度貿易獨占の終了と共に、稅收は財政上に益々重きを加へるに至つた。

新地主を自己の支配の要素に織り込むと同時に、彼等の手に巨大なる富の集積を防止すると云ふ相反する如き要望と財政收入増大の必要が、依然としてゼミングール地主ではあるが、同時に二〇年乃至三〇年の週期を以て納稅額を引上ぐべき新なる制度を採用せしめた(一八二二年)。其稅率は官吏による地主全所有地の小作料收納高の推算に基礎を置かれたが、比較的によくベンガルでは地主所得の七〇%程であつた。²⁰⁾

15、新地主は附加税を免除されたが同時に彼が治下に賦課した結婚、巡禮税は廢止され、又林野産物は地主の手に歸することゝなつた。(Baden-Powell, *ibid.* p. 189)

16、ベナールスではゼミングールはなく、村落共有者のうち長老乃至主流家族が地主とされた。(Baden-Powell, *ibid.* p. 162)

17、Haveli land は一七九四年以後、一〇〇〇—一五〇〇の地區に分割され、Permanent Zemindar 地域として競賣に付された。

18、R. Dutt, *ibid.* p. 93

19、R. Dutt, *ibid.* pp. 291—92.

此制度の下に、一七九三年以後に獲得された残りのベンガルのゼミンダール、ウードのタルクダール等が地主として確認された。ウードでは、タルクダールは、一部には今日に至るまで印度總督によつて封建的叙任式が行はれてゐる。タルクダールは治下の村落の徵税を司り、其性質は次に述べる Mahawari 制度の變形とも見られるが、然し彼の持つ権利はベンガル地主のそれと相似して、地租設定の方法並に小作人に對する權利に於て若干の差異あるに過ぎない。從來の耕作農民は、此場合も彼の小作人に轉化された。同様にしてボンベイ北方海岸の大庄屋コートも亦かゝる地主となつたが、其際彼等の權利を幾分制限した法律(コート法)が發布された。

印度各地に共通に見出される舊王朝の寄進地たるイナムも、イギリスの支配の下に其特權の持續が承認された。それ等は寺領、學校領であり、一般に地租は免除されるか或は低率を賦課されるのみである。

四、共同的地主、村落地主

北部印度、殊にアグラ、ウード及び中部諸州に於ける土地私有制の確立は、ベンガルとは異つた方向を取つて行はれた。此等の地方の最初の地租設定(一八〇二—五年)は、ベンガルの租制の影響下に、各村落は一個の請負人乃至長老との間に初めは十ヶ年、次に三ヶ年づゝ二期、最後に四ヶ年を期として行はれた。この期間の滿了に際してその成果討論の爲に著名なる Holt Mackenzie を含む調査委員會が組織され、此結果村落土地所有團體の存在と一般的永久的地租設定の不可能なることが明にされた。かくて一八二二年、此年の地方には新なる基礎に立つ租制²⁰⁾土地所有制が施行された。

新制度は地租の週期的引上の基礎に立ち、村落が唯一の占有者であつた場合には、團體的土地所有を法認し、地租を

共同的に、納入の相互的保證の上に賦課することとした。此の制度はそれ／＼の地方事情に應じて差異があるが、地租は所領地の實際に收納し、又收納さるべき地代を評價し——時に共有地よりの収益をも加へて——其推定地代(評價の二分の一)を基礎とし、之の八三%乃至九五%を附課したのである。²¹⁾

アグラは此制度の一の典型を示してゐる。アグラではタルクダールの土地に對する實權は、ウードのその如く強大ではなかつた。彼等は既にイギリス支配の最初の數ヶ年に徵税請負人や投機商人に實權を奪はれてゐた。新制度の下で彼等はイギリスによつて支配權者であつた地位を認められ、國庫からの一定額のマリカナ(封地的年金)を受け、ことゝなり、封建的位階組織の中間層が地主となつた。地租は従つて村落に於ける共有團體を對象とし、彼等の代表と政府との間に設定され、之等の代表は政府に徵税登録を持つことゝなつた。地租納付の相互的保證の制度の下で、之等の新地主は協同組合を組織してゐる。かゝる協同組合的地主所有は、部分的には舊印度の封建制度の身分的特質の結果であり、部分的には相互的保證に關するイギリス法律の直接的影響の下に形成されたものである。土地は一部分は之等の組合の

20. Baden-Powell, *ibid.* pp. 170—171

21. タルクダールが最終的に地主の地位を獲得したのは、一八六八年のウード地代法による。蓋し、特殊の土地占有の幾段梯の上位にあつた彼の地位は、ベンガルのゼミンダールと異つてゐるし、それ故に下層占有者との間に種々の紛争が生じてゐたからである。彼等は、ウード二三、五四三ヶ村の中、一三、六四〇村を占めてゐる。

22. 傳統的な印度の村落では、最良地を所有し、且つ通常の血族の羈絆と共通の身分への所屬とによつて結合する共同體の同權的成員と伴つて小作人としてのみ又は最劣等地の所有者として共同體の土地を耕すことを許される下級身分の集團、及び奴隸にも等しき除外された「不可觸」身分の成員を包含してゐた。

23. Baden-Powell, *ibid.* p. 178

共有で（通常未開墾地、放牧地等）、一部は事實上個人的所有となつてゐる。各の共有者に對する所得の部分は、この事實上の所有範圍を基とし、或は又共通の祖先から出づる等親に應じてなされる相續分割の複雑せる制度に從つて計算される。

中部諸州の制度は稍之と趣を異にしてゐる。此州では所謂ドラヴィダ型の村落共同体が支配的であり、それは寧ろリョートワリ型であつた。村のパーテル——彼等は決して村の「所有者」ではなかつた——は大なる世襲地を持ち、マラッタの治下では租税納入に對する責任を負つてゐたが、イギリスの新制度の下で全村の「所有者」たる地位を與へられ、村落の代表者として容認された。從つて土地制度の上からは村落を獨占した地主と見られるが、租税型からはアグラに類似して土地の調査の基礎に立つマハルワリ制を採つてゐる。彼等の地位は一八六三—七〇年に最終的に決定され、マルグザール (Margzar) の名を以て呼ばれる。此如くマルグザールは農民と村落を與へられ、農民は其持分の所有を主張しはしたが、事實上パーテルの世襲地は自家使用地となり、農民は彼の小作人と化した。從つて之等の新小作農民を特に保護するの必要上、此處では地租のみならず、小作料も亦地租に對する様々な割合で、官吏によつて決定されてゐる。²⁴⁾

パンジャブの租制及び土地所有制の根底を爲してゐるのは、第一にリョートワリの如く個々の農民の土地所有地ではなく、土地共有の承認——實際未開墾地、林野等が村落共同体に屬してゐた——、第二に地租登録に際しての相互的保證、第三に土地所有關係の裁判所の檢證に際して徴税請負人でなく、事實上の自作農に有利な一般的推定が行はれたことである。かゝる土地共有の容認は、然し理論上であつて、實際には地租支拂は個々の耕作者に分割され、土地所有形態からはリョートワリ地域に近似してゐる。パンジャブの地租は比較的に僅少であつて、共有地が尙保持されてゐた

所では、この共有地からの家族並に個人的支拂の除外を容易ならしめる法律を制定してゐる。又共同体の成員は土地賣却の場合に先買權を有つてゐた。イギリスが、此州でかくも寛大であり得たことは、パンジャブの領有は一八四八年で、既に印度はイギリスの完全な商品市場と化し、資本主義的諸關係は嵐の如く流入しつゝ、あつた當時を想起すれば直に理解しうる所である。

五、小農民の設定

南印度に於ける租制—土地制度の改革は、北印度の大土地所有の法認と對象をなしてゐる。小所有農を創り出した所謂リョートワリ制は、最初はマドラスに試みられ、ボンベイに施行され、更にアッサム、ビルマ等の新獲得地域に及んだ。之等の諸州の制度は必ずしも同一ではないが、地租は個々の農民に對して賦課せられ、相互的保證は存在しない。イギリス侵入以前には村落共同体が廣汎に存在し、事實上の私的大土地所有はさして存在しなかつた南印度では、フランス型の小農民を創定せんとする企が、先づマドラスに行はれた。如何なる土地制度を採用すべきかの様々な論争が一八〇七年——此年 Thomas Munro によつて永久的リョートワリ制度が初めて主張された——から十三ヶ年に亘り一八二〇年に歸着を見た。かくて此等の地方では個々の農民經營と會社の納税機關との間の仲介は拒否され、共同体の分割地（未開墾地、林野）は殖民國家の有に歸し、農民はそれを色々な條件の下に賃借することゝなつた。この制度の下

24. Baden-Powell, ibid. p. 94

では、土地の凡ゆる登録所有者は其所所有地を賃貸し、贈與し、抵當とし、賣却する権利を持つ土地所有者と看做されるが、此所有は地租滞納の場合には自然的に廢棄されるのであるから完全な所有と云ふことは出来ない。且つ土地は農業の目的にのみ使用を許され、他の目的の爲の利用には政府の許可と之に對する特別の支拂が必要とされる。税率は最初は總生産物價格の四五%—五五%の金納であつた。²⁵⁾ かくる高率なる貨幣で納入する租税が、自給經濟を破壊し、之等小農民の土地をして商人、高利貸出の地主の手中へ急速に集中せしむるの途を開いた事は蓋し不可避的であつた。

ボンベイでは此制度は一八四〇年代に確立された。デッカ地方は一八一七年ペシュワ (Peshwa) から英領となつたが、之等の地方は村落共同體を廣汎に残存してゐた。他州と同様にイギリスの支配は此地にも赤裸々な收奪を以て臨み例へば占有の年の課税額八〇萬磅は一ケ年にして一一五萬磅へと躍進した。²⁶⁾ かくる收奪の過程に於て官吏は村落の役人に次第に干渉し、個々の農民と契約し、英治數年にして共同體は事實上失はれて了つた。Bishop Heber の書信 (一八二六年) によれば、永久的地主のない所では『總生産物の半を政府に納付することが平均の率』であり、甚しきは『實際に總生産物を超えて賦課される例』すらありと述べられ、既に農民は『豐年に於ても素寒貧な状態にあり、少しでも不作となれば……餓死するを防止し得なかつた』と稱せられる。²⁷⁾

Pringle によつて施行された租制 (一八二四—二八年) は、耕地の測定に基いて純生産物の五五%の賦課を原則としたが、廣汎に官吏の行動を統制することは難く、収入増加の努力は合法的、非合法的に繰り返され、無数の住民は家族を失ひ藩王國に流亡し、作付地は耕地の三分の二に過ぎぬ状態に立到つた。²⁸⁾ 此處に於て一八三六年以後には政府は新制度の確立に努力せざるを得ず、かくして成つた一八四七年の調査聯合報告 (Goldsmith, Lieut. Wingate, Captain Davidson

による) の勸告に基き、地租は比較的精密なる調査による土地評價を基とし、三〇ケ年の期間を以て各個の農民に課し地租を支拂ふ限りに於て農民を土地所有者と認め、世襲、移讓、賣却の自由を許容する所の制度が確定するに至つた。

第四節 土地所有の推移

一、中間地主の發生

ベンガル地主の創設に始る土地所有と租制確立は、パンジャブの併合による事實上の印度統一に至つて、一應全印度的に完了された。其後地租は印度の經濟的發展と政治的工作から漸次低下されて來たが、この土地所有制の根本には何等の改革も行はれなかつた。

其後の進化は、ゼミンダール地域に於ては、既に十八世紀末に定着し、地主としての奢侈癖に慣れてゐた舊商業資本家の手から、土地を獲得しようとしてゐる現今の商業資本家の手へのその移行の道程に於て、又大土地所有の下に中

²⁵⁾ R. Dutt, *ibid.* pp. 153—59 參照。尙加へられた改良に對する課税の例として。「井水灌溉地又は菜園に對する附加税は、改良に對する課税として、集稅官によつて間違なく賦課された」(Coimbatore 縣)

²⁶⁾ R. Dutt, *ibid.* p. 57

²⁷⁾ Bishop Heber's *Memoirs and Correspondence*, 1830 (Dutt, pp. 369—71)

²⁸⁾ R. Dutt, *ibid.* pp. 375—75

間地主の發生の道程に於て、更に若干の小作立法が設定される道程に於て行はれ、他方リョートワリ地域の小所有農の間には、一般的に土地の喪失が見出されることにある。先づ、中間地主について。

中間地主は大土地所有が廣汎に普及してゐるベンガル、ウード、中部諸州の諸地方に見出される、地主が經營とでなく地代とのみ結ばれ、この地代が依然として物納である限り、イギリスの政策の下に創造された地主は、彼等の所領地に或る種の封建的官吏機構を造つて行つた。

ベンガルでは、之等の中間地主は、定額地代支拂による土地の世襲、移讓の事實上の權利を有つてゐる。然し彼等は獨立の所有者ではない。ベンガルのゼミンダールは、廣大な自己の土地の一部に、其地域についての地代を自己の政府に納附する地租額を越ゆる一定額に確定し、その土地の管理權——地代徴收・荒地開拓等——を永久的に或る個人に讓與することによつて中間地主 Patnidar を創設した。このパトニダールは又其土地を彼自身の創定に係る世襲的下級地主 Darpatnidar に分割し（荒地の開墾等の場合）、かくして其下に又 Sidhar Patnidar 及び Isadar の二階層が創り出される。彼等の収益としては下級層から收納する額の一〇%が保持される。勤勞する小作農民はこの所有のピラミッドの基底に存在してゐる。之等の中間地主が、かゝるもの (Tenure-holder) として一定の地位を法認されたのは一八八五年の改正小作法に於てであるが、法律の容認は彼等は少くも百ボハ (Tilgha = 1/3 acre) 以上の土地を有つを必要とする。

中部諸州では地主マルグサールの下に Malikgubza, Malikmagbuzza と稱せられる所の一定條件で土地を保有する中間地主が存在し、この呼稱は、パンジャープでも同様な場合に用ひられてゐる。オリッサでは Mukadam, Maurusi, Padhan Zemindar 等様々な名稱を持つ中間地主が存在し、更にウードのタルクダールの下では、村落體が中間地主的地位を占

めてゐる場合——彼等は一定の地代をタルクダールに納付することによつて、全村落の管理權を許與される——が見出される。

之等の中間地主は、發生的には、以前の土地を改良した徵稅委託人であり、従前の所有者であり、村庄屋であり、又所有家族團體の膨脹からも起源してゐる。³⁰⁾

吾々は此處で二三補遺を試みたい。先づかゝる大地所有は如何なる程度に土地を占有してゐるかである。此點に關する適確な資料は殆ど見出されない。バーデン・ホーヴェル氏によれば一八八八年頃の狀態は略次の如くである。(Baden-Powell, Land Systems of British India)

ウードに於けるタルクダールの所有(同書第二卷二二二頁)		地主數	治下の村落	アールで表した平均の大きさ
毎年地租五萬ルピー以上を支拂ふ地主	四〇	七、四四六・五	一一七、三〇〇	
同じく五萬ルピー以上の地主	一〇四	五、一六五・〇	一八、五九八	
同五千ルピー以下の地主	四八	二、二八・五	二、四九八	
一八六九年法による地主	一五九	三二一・五	九八四	
ホンベイではコートは平均一二・四八八ヘクタール、タルクダールは二、六七八、イナムは二・七一ヘクタールを有ち(一八八八)				
マドラスでは次の如くなつてゐる。(一八八八年)(前掲書一四二頁)				
大ゼミンダール地主(地租五萬ルピー以上)	所有地の數	一五	總面積	所有地平均の大きさ
(長男排他的相続權あるもの)			六、〇六八 千エーカー	四〇四、五二二

29 Baden-Powell, ibid. p. 131

30 Baden-Powell, ibid. pp. 131-32

第二部 農業に對する諸政策

大ゼミンダール地主(同 なきもの)	一	一一六	六四
中ゼミンダール地主(不可分的)	五三	八、一五八	一一六、一〇二
同 (可分的)	六七	九二七	四一、一七三
小ゼミンダール地主	六七八	二、五六三	一三、八三一
イナム(世襲的)	四〇四、六〇〇	七、九三二	三、七八一
同 (終身的)	一、七九五	三一	一九
共同所有團體	一、〇八一	二三	一七
リヨート(地租百ルピー以上)	四三、〇六七	二、九〇四	二一
同 (以下)	二、四九一、一三〇	一六、一八一	六七

又エル・ウリヤノフスキー氏は近作の論文に於て、ウードでは二〇人の地主が平均六萬五千エーカーを、ベンガルでは一二五人の地主が平均五〇萬エーカーを、マドラスでは三百人の地主の手許に平均一萬六千エーカーの土地が、同じくアッサムでは一九人で平均各二一萬エーカーの土地を獨占してゐる。之に對してウード三千四百萬、ベンガル三千七百萬の農民は各々二エーカー二分の一、マドラス三千萬農民は五エーカー、アッサムの農民七百萬は各三エーカーの土地を所有してゐると述べてゐる。(マジヤール編、帝國主義、國家封建主義と印度に於ける農業問題。一九三四年論文集——露文——所載)

又、地主富農の土地獨占状態については次の計數がある。Reysner 印度農業恐慌、華譯「中國農村」(一九三四、一〇)より算出。

	小 農		地 主	
	戸數で(%)	土地で(%)	戸數で(%)	土地で(%)
ボンベイ	八七・六	一三・八	一〇・三	一一・五
マドラス	九六・六	七五・七	三・一	一七・〇
バンジャープ	八五・〇	三八・八	一一・〇	三五・七
計	九〇・五	四二・五	七・八	二一・七

以て大土地所有の概略の状態を推知することが出来る。之等の大地主は、序に述べれば、不在地主である。『總て富裕な土地所有者は例外なく、毫も自己の經營に關心を持つてゐない。彼等は單に自分の收入を消費してゐるのみである』(西北國境州官吏セル、ウイリー述)『地主は富裕になると其時から彼は都會に移住し土地との連絡を失つて了ふ』(リヤルプール中央協同信用組合書記サンブランシハ述)のである(勅命農業委員會證據)。

- 上の諸節に述べた諸關係、徴稅權と其場合々々の土地所有に關する關係を同じくB・ポーウェル氏に従つて分類すれば次の如く示される。(Baden-Powell, Land Revenue and Tenure in British India, p. 129)
- 單純なる關係 政府土地所有
 - 二重關係 1 政府、2 リヨート(マドラス、ボンベイ等の小農民)
 - 三重關係 1 政府、2 地主(ゼミンダール、タルクダール又は共同所有體) 3 實耕者又は村落個々の成員
 - 四重關係 A 政府、2 地主、3 中間地主、4 實耕者
 - B 政府、2 領主權保有者、3 實際所有者又は地主(通常村落體) 4 實耕者又は村落個々の成員

二、小農民の没落

依然として原始的な生産方法に頼る所の小農が、かの十九世紀後半に捲き起つた農村に於ける急激なる資本主義諸關係の浸透の狀勢の下に、激しい分解の過程を辿り、或は土地を喪失し、或は其所有は極少となり、經營は益々小規模とならざるを得なかつたことは當然の成行であつた。商人、高利貸の手中にはかくて急速に私有地の集中が見出される。是等の小農民の平均所有の悪化は、Dr. Mann の Poona 縣(ボンベイ州)の調査によれば、一七七一年の四〇エーカーが、一八一八年には一七・五エーカーに減じ、更に一八二〇—一四〇年の一四エーカーから、一九一五年には實に七エーカーに下つたと稱せられる。博士は又同縣 Pimpia Soudagar 村の調査で(一九一七年)次の數字を示してゐる。

第二部 農業に對する諸政策

六六

所有者で	百分比で	所有者で	百分比で
一エーカー以下	二二	二〇—三〇エーカー	九
一—五エーカー	七一	四—五	五・八
五—一〇エーカー	三四	二〇—四〇エーカー	〇・六
一〇—二〇エーカー	一八	四〇エーカー以上	〇・六
		計	一五六
			一〇〇・〇

此村では、生活水準を維持するに要する耕地は二〇—一五エーカーであるから、全村の八一%がこの大きさ以下である事が判明する。³¹⁾ 同様に V. G. Ranade 氏の調査による Konkarn 村では五二人の所有者の内、一二人(二三%)が一エーカー以下であった。³²⁾ かゝる状態は多かれ少かれボンベイ全州の實情と見る事が出来る。全州については次の数字が見出される。(百分比)

	I (所有者で)		II	
	所有者で	百分比で	所有者で	エーカーで
五エーカー以下	一九〇四—五	一九二—二	四七・二	八・六
五—一—一五)	三〇・九	四七・八	二八・七	二一・〇
一五—二五)	四四・三	四〇・〇	一一・〇	一八・五
二五—一〇〇	二二・四	一一・一	一一・一	三七・七
一〇〇—五〇〇	二・三	一・一	一・〇	一一・八
五〇〇エーカー以上	〇・一	〇・〇	(〇・〇二)	二・四

I. Jathar & Beri, Indian Economics, Vol. I, p. 238 より算出
II. Report of the Land Revenue Administration of the Bombay Presidency 1921—2 より算出

事情は又マドラスでも同様である。マドラス大學教授 S. Subbarana Aiyar 氏によれば Malabar 村では調査の三四%が一エーカー以下の所有であつた³³⁾、又 Ganagikondan 村では、所有者の数は³⁴⁾

	乾地未開墾地、所有者数		水田地	
	所有者で	エーカーで	所有者で	エーカーで
一エーカー以下	一〇五	二〇〇	一一〇	二〇—三〇
一—五	二二〇	二一〇	四〇〇	三〇—四〇
五—一〇	二五〇	四〇	二五〇	四〇エーカー以上—一四〇
一〇—二〇	一〇〇	五	六〇	計
			九二五	四五九
				九八〇

となつてゐる。乾地では五—一〇エーカーの所有が優勢であるが、其處では生活の爲には水田地より多くの耕地を要すると云ふ事情によつて理解せねばならぬ。一般に南印度では農業のみで生計するには最少限五エーカー以上は所有せねばならぬと稱せられてゐるから、右によつて農民状態が如何に悲惨なるものであるかを推察するに難くない。尙此の州の階級分化の過程は次の如くなつてゐる。(人口百人に付き)

31. R. Mukerjee, The Rural Economy of India, p. 36, 及び Jathar and Beri, Indian Economics, p. 239

32. 此村に於ける五二人のうち、二四人は非農業者の所有地で一一三エーカー。二八人は農耕者で七八エーカーを所有し「殆ど過去五〇年内に非農業者が進出した」のである(Report of the Royal Commission on Agriculture in India, p. 132)

33. The Royal Commission's Report, pp. 133

34. Jathar and Beri, Indian Economics, Vol. I, p. 237

	一九〇一年	一九一一年
不勞地主	一九	二三
不勞小作農業者	〇・一	〇・四
自作農	四八・四	四二・六
勤勞小作人	一五・一	二〇・七
勞働者、僱婢	三四・五	三四・〇

ヴァルガ、世界經濟年報(一九二七年下半期)より引用。

即ち今世紀初頭二〇ヶ年に地代收得者は二%から七・七%に増加したのに反し、自作農は四八・四%から三八・一%に減じ、小作及び勞働者数は四九・六%から五四・二%に増加してゐる。

パンジャブでは一八九一年から一九〇〇年までに、自作農は全農民の五四%から四五%に減じ、或は一八九四年には既に全耕地の二〇%以上が賣却され、又は九二―九六年の間のみで、五萬エーカー以上の土地が非農民的所有者の手に移つたと稱せられ、一九〇一年には遂に非耕作者が農民の土地を買収するを禁ずる法律を出さざるを得なかつた。然し乍らこの法令は、それに依つて農民出身の新なる地主の手中への土地の集中を防止し得なかつたし、又之に基く農村金融の硬化の爲に一般に地價の低落を見、農民の没落防止には役立ち得なかつた。パンジャブに於ける所有の状態に關しては Calvert 氏の調査がある。即ち二、三九七ヶ村に於て(%)

耕地面積で	一エーカー以下	一―三	三―五	五―一〇	一〇―一五	一五―五〇	五〇エーカー以上
所有者で	一七・九	二五・五	一四・九	一八・〇	八・二	一一・八	三五・七

之によつて見れば五エーカー以下の所有は全農民の六〇%に近いことを知る。

ビルマでも上ビルマは農民の六二%が、又下ビルマは同じく五五%が、一エーカー以下の所有者である。

部分的にはあるが以上の數字によつて、今日の土地所有農の半數以上が極小所有である事が判明する。リョートワリ地域に於ける之等の事情は、その半面にリョートワリ地主と稱される「自由」賣買の結果生じた所の地主の存在を物語るものである。此處では小作人は地主との「自由」協定によつて小作契約に入り、且つ又土地から追放される事の自由をも持つてゐる。

35 N. Roy, India in Transition

36 R. Mukerjee, The Rural Economy of India, p. 46 及 75 Royal Commission's Report, p. 132

第三章 小作及び小作制度

第一節 小作法の制定

一、制定の一般的意義

イギリス支配の開始と永小作を制定した最初の法律の發布との間に、印度には土地所有が確立し、領域の半以上の地方で耕作農民は、彼の権利を廢棄せんとする如何なる努力をも惜まぬ地主の小作人として隷屬せしめられ、且つ之等の地主も、東印度會社と共に灌漑の爲の配慮から解放されてゐた。等しく此期間に於て生産物の商品的性質は著しく増大し、又資本家的商品の流入に伴つて農村の家内工業は没落し、村落共同體的自足體は崩壊してゐる。之等のことは既に述べた所によつて明である。

最初の小作法は一八五九年ベンガルに於て制定された。此州では、農業の荒廢を回復するに従つて勞働力の不足を來し、小作は比較的に好遇されたとはいへ、地主は法律上に何等彼の搾取に對する制限を受けてはゐなかつた。のみならず、益々加はる資本主義的諸關係の重壓の下にあつて小作農民の生活は苦惱の影を深くし、イギリス支配に對する憤懣は廣汎且つ深刻なものがあつた。されば一八五七—八年のセポイの反亂が、よし人種的宗教的外皮と端初とを採つたとはいへ、全印度を席捲しイギリス支配をゆり動かす——反亂の結果、東印度會社統治の終焉、モグール帝國の滅亡——

に至つたのは、かゝる經濟的背景を持つたが爲であつた。かくて先づ一八五九年のベンガル小作法の發布とはなつた。

小作法は永小作權を規定してゐる。それは後に述べる如く、一定期間地主の土地を耕作するか、或は幾多の歴史的背景を持つ者にのみ與へられ、ベンガルを初めとし各地に多かれ少かれ保護を加へられた永小作が制定された。だが尙多數の農民は耕作權未確立のまゝに放置されてゐる。

制定の目的は農民反抗の緩和にあつたが、小作法は、同時に小作農民を二つの階層に分割することによつて、イギリスの支配の強化——*divide and rule*——の爲に役立たせ、又この永小作權を賣買の對象となしうると規定することによつて、永小作農の中に於ける分解を充分に用意してゐることが明瞭に看取される。

だが兎も角も小作の保護は、地主の無制限の搾取を制限したことは事實である。されば經濟的發展——交通の發達、貨幣經濟の浸透等——に伴つて地主は其蓄積した富を、土地に對する投機よりも寧ろ農産物に對する投機に振り向けるに至る。かくてこの事はイギリスに取つては農産物を一層商品化することに役立ち、商人と商人化された地主は、益々イギリス資本の買辦たる性質を帯び、そのイギリス支配に依存する度を強めることとなる。此處で地主の可なりに廣大な自家使用地の小作は、之等の保護から除外されてゐることを指摘するのは興味がある。

二、各州の小作法

小作法は各州によつて異つてゐる。

ベンガルの一八五九年法は、一七九三年以降同額の地代を支拂つて來た者は地代は爾後永久的に確定され、又二十ヶ

年來同額地代を支拂ふ者も之に準じ、更に一般に小作が引續いて十二ヶ年地主の同一の土地を耕作する場合にも永小作権を獲得することを規定してゐる。然しこの法令の下では、地主は永小作権拒否の爲には、單に期限前に小作の耕地を彼の土地の他の部分に變更せしむるのみで充分であり、事實それは隨所に繰り返された。かゝる地主の抑壓に對する反抗は、例へば一八七二年の Pubna 地方に、又 Bogra 地方に於て爆發し、政府も之等の缺陷を補足せざるを得ない立場となつた。一八八五年の改正はかくして行はれ、本質的に今日に至るまで持續されてゐる。修正法は永小作権獲得の條件を十二ヶ年同一地主の土地を耕作することに改め、同時に中間地主、農民的小作、轉借農に農民を分類した。永小作権設定の對象は此處に云ふ農民的小作である。永小作権は世襲的で、通常、賣買、抵當の自由があるが、其場合地主の同意と取引高の二五%を地主に支拂ふことが必要とされる。其地代は十五ヶ年は引上げられず、引上の率は前地代の一ルビーに付き二アンナ以下(一二・五%以下)に限られ、引上は土地の生産性の改善乃至地價の騰貴が理由となり、裁判所の認可を必要とする。

アグラでは、初めにベナールス地方に、更に其後十二ヶ年の小作期間に立つベンガル五九年法と略同様の規定を一般に實施したが、一八八一年の改正法に於て、永小作を分類して特權的永小作と普通の永小作とした。特權的永小作は、永久的確定地租を支拂ふ地主の下に於て、永久的に確定された地代を支拂ふ以前の所有者、又は中間地主的地位より出た小作人と、週期的地租引上の土地の地主の下で地代は地租額によつて定められる所の小作人に關して與へられ、其權利は世襲的で、賣却、抵當の完全な自由を持ち、且つ普通の小作の地代より二五%低く賦課される權利を持つてゐる。普通の永小作権は一定の條件(十二ヶ年耕作)によつて獲得され、地代は十ヶ年は引上げられず、土地の賣却、抵當の自由

は一九二六年修正法以降附與された(賣却の場合には地主の同意と一定額の地主への上納を必要とする)。此處でも地主の自家使用地の小作と收獲の一部分に對し持分を有する分益小作には、永小作権は發生しない。

地主タルクダールの地位が一八六八年の地代法によつて最終的に確立された所のウードでは、同時に過去三十ヶ年以内に所有權を喪失した舊所有者が特權的小作たる地位を得た。彼等の地代は裁判所によつてのみ引上げられる。然し此種の小作は極めて小範圍で、耕地の約一〇%を占むるに過ぎない。

マドラスでは、土地法はゼミンダールの支配する地域に施行された。此州では一八七三年以降一八八〇年にかけて Moplah 地方に、地主による小作地の奪取を原因として暴動があり、其後も八三年より八五年には五回に亘り、更に九四年から九六年にかけて暴動が繰り返されてゐる。されば小作法は最初はベンガル小作法を模して一八八七年に發布され、次で一九〇〇年、一九〇八年に改正された。之等の法律は權利確定の爲の特別時効期間をも確定せず、凡ゆる事實上の小作に永小作権を容認した(小作は證明しうる權利は之を認められた)。永小作権は世襲的で、賣買抵當の自由が與へられ、地代は十ヶ年引上られず、引上の率は前地代の一二・五%を限度とし、價格の騰貴を理由とし裁判所によつて認可される。ボンベイの地主コートの下に於ては、一八八〇年に舊來の定住小作人は永小作と畧同様な保護を受ける事となつた

1 M. N. Roy, India in Transition, p. 78

2 The Cambridge History of India, Vol. VI, p. 249

3 Baden-Powell, ibid. p. 140

4 The Cambridge History of India, ibid. p. 268

パンジャブの村落體に於ては、イギリスの統治以前は、下級身分の集團は村落又は同種成員の小作人としてのみ又は精々最劣等地の所有者として村落の土地を耕作することが許され、「不可觸」身分よりなる最下級身分の集團は土地所有を許されず、奴隸と殆ど異らぬ僕婢、農業労働者であつた。然しシークの治下では、彼等は重い租稅政策に反抗して鬭争し、地主に對し地代を支拂はず單に政府への地租のみを支拂ふと云ふ状態を獲得した。従つて村落の諸集團は著しい程度に平等化されてゐたのである。だがイギリスの支配に移つては、上層集團のみが土地所有者とされ、一切の從來の下層集團は種々な權利を持つ小作人の部類に編入された。此土地制度の改革に際して下層身分の集團は、土地に對する所有權を得るであらうことを信じて、村落の共有地が政府に取り去られるのを黙過した。だがその期待は裏切られ、共有未開墾地に對する處分權は剝奪され、何等の所有權も與へられなかつた。其爲に起きた農民の反抗は、イギリスをして一八八七年には、一八六三—六八年の小作法を改正せしむるに至つた。八七年法による永小作權を獲得しうる者は舊所有者出の嘗て徵稅に關與した者より出て二代に亘り地代を支拂はず地租のみを支拂ふ所の小作人、或は Jajidar に對する貢納をなす小作人である。之等の舊い諸權利は裁判所によつて裁定され、其諸權利に従つて永小作は四種に分たれる。第一は地租を別として地代其他の支拂を免除される終身永小作、第二は地租一ルピーにつき二アンナ以下のマリカナ(Malikana)を支拂ふ義務あるもの、第三は地租一ルピーにつき六アンナ以下の、最後は同じく、十二アンナ以下の地代を支拂ふ義務ある永小作である。地代は地主の計算による土地改良の場合にのみ引上げられ、又凡ての永小作權は賣却、抵當の對象となり、土地の轉賃(七ヶ年限)をもなしうることとなつてゐる。

中部諸州では、地主マルグザールの地位の確定と共に、從來の村落の耕作農民の生活の緩和の手段が必要とされた。

かくて此州の小作法は一八八三年及び九八年の法律を以て施行され、一種の永小作權を規定してゐる。一つはウードの特權小作、パンジャブの永小作と同様に舊所有權(期間及び土地改良に投資せる支出に基いて認められる)を有する農民を包含する所の絶對的永小作で、地代は官吏によつて、又引上は地租(引上)設定期間によつて定められる。他は一八八四年以前に同一地主の土地を十二ヶ年小作したことによつて得られ、世襲的な普通の永小作で、地代は地租に對する一定の割合で決定されてゐる。賣却、抵當及び轉賃は地主の同意と之に對する一定の支拂をなす場合に許容される。

三、小作法と農民の保護

では、凡ての永小作は之等の諸立法によつて全く保護され得たであらうか、一應其成果に立到らう。

前世紀半より次第に加はる資本主義關係の進行は、之が行はれ、ば行はれる程、舊い生産方法と零細な耕地に依存する農民の、この經濟的進化に對する遅延の差は當然に増加せずにはおかない。印度政府は農業の生産性を増大し、饑饉をも防がが爲に、或は灌漑設備を整へ、或は改良資金貸付を以て臨みはしたが、可成りに高率な使用料を要する灌漑用水の利用、ぎごちない貸付資金は、地主、富農に役立ちこそすれ、救済を要する最下層の農民とは、およそ縁遠い存在であつた。而も政府又は地主による灌漑設備は、地價の騰貴と地代引上に結果するのである。貧小農はかくて依然として荆棘の途を辿らねばならない。

永小作權は多くの地方に於て永小作權者の自由な賣却、贈與、抵當の對象となり(マドラス、パンジャブの永小作マドラス、ウードの特權的小作、中部諸州の絶對的永小作)、其他に於ても取引高の一定率を地主に上納することによ

つて、賣却し、抵當する事が出来る。従つて、其後の進行に於いて、農民的小經營の彼等の耕作權の多くが、高利貸、商人の手に移り、農民は彼等の單なる小作人と化して了つた事は必然の成行であつた。一方に、高利貸、商人の一群は小作料の容赦なき取立の目的を以て、永小作權の買占めを行つてゐる。永小作權の規定は今やこの關係の假面として役立つに至つてゐる。

永小作權者の下の小作人としては、農民はも早や絶對に其處で永小作權を獲得することは出来ない。かゝる高利貸的永小作の自由なる小作に對する關係について、勅令委員會の「證據」は興味ある例を掲げてゐる。

問「貴下の職業は何ですか」——「私は小作人です」……「私は賃借した地面全體を今度は自分が他人に貸します。私 現物で小作料を徴収します、私自身は別に百エーカーの地面で經營してゐます。」 問「貴下は如何なる條件で土地を貸與されますか」——

「自由な小作人に。」 問「貴方は幾何の割前を取られますか」——「收穫の半分です。」 問「貴方は自分の小作人に種子を取つて

やりますか」——「私は彼等が希望するならば種子を購入する金を彼等に貸します。」 問「小作人達は誰から金を借りますか」——

「私から。」 問「小作人の負債額は小作料の支拂に影響しませんか」——「收穫が終るや否や私は小作人から收穫の半分を取り上

げます。それから彼の半分の中から彼の生存に必要な分だけを彼に残し、自餘は負債の銷却に充てる爲に私が取ります。」 問「貴

方は借地料として幾何支拂ひますか」——「一エーカー當り四乃至一四ルピーです。」(ハン・アブドゥル・マチン・ハンの陳述)

永小作權の賣買は、又賃銀労働者の助を藉りて其經營を行ふ所の資本主義的小作の爲に途を與へてゐる。印度では之等の要素は通常土地の一部分に於てのみ經營し爾餘の部分を轉借に出してゐるので、明瞭な姿で之等の關係を知る事は容易でない。かゝる經營がさして廣汎に及んでゐないとはいへ、永小作權は之に利便を與へてゐる事は明である。

永小作權の制定は、更に勞耕する農民の生活を完全に緩和してゐない。地主は到る所で制限された地代と併んで相續、

賣却、改良の場合や、或は賃借地に於ける別個の仕事を營む場合等々において附加的給付を取立てゝゐる。従つて未だ永小作權を賣却しない所の小經營の農民は、印度農村に於ける被抑壓階層の一部を構成する。

第二節 普通の無權利の小作

印度には尙以上の外に、夥しい普通の「自由」小作が存在してゐる。彼等は一般に無權利の儘に放置されるか、或は極めて僅ばかりしか保護されて居ない。のみならず屢々彼等は地主の高利貸的操作と結合して強制作付を餘儀なくされてゐる。

問「土地占有者は小作人に對して一定の輪作法又は一定の經營施行法を要求する權利を有つてゐますか」——「彼は強く主張することが出来ます。若しも小作人達がそれを拒否すれば、彼は小作地を失ふ危険を冒すこととなります。」(證據四七七二。西北國境州コハト縣、地主ビオ・カマル・チャロニイの陳述)

一般に地主の自家使用地とされてゐる區域の小作——ベンガル、マドラスのゼミンダール、ウードのタルクダール、中部諸州のマルグサール(此處では自家使用地は全所領地の四分の一以下に限られる)等の自家使用地の小作、及び永小作下の小作は、リョートワリ地域の小作と共に、「自由契約」によるものである。此場合、所有者乃至永小作權所持者は、「小作人の自由競争によつて決定される」地代を無制限に引上げる權利を持ち、法律は之に對して殆ど何等の制限を加へてゐない。

普通一般の小作はベンガルでは五ヶ年間は地代を引上げられない。其引上の率は貸與人が上級所有者に支拂ふ地代を越ゆること最高五〇%までとされ、其際裁判所の認可を要することゝなつてゐる。

ウードの一八八六年法は全小作人に對し七ヶ年間地代を引上げず、引上の場合の割合は以前の地代の六・五%が限度とされる。然し、官廳の證明によれば「特別附加金による地代の引上は、地代の二五%までの割合で實現」されてゐると稱せられる。中部諸州では、普通の小作は、地代は地租に對する様々な割合を以て官吏によつて決定され、略七ヶ年間は引上げられず、裁判所の認可による以外には彼の耕作地から放逐されないことゝなつてゐる。

アグラでは一九二六年法によつて、一般の小作は終身小作たる権利を得た。其権利は單に終身的で、地代は終身引上げられないが、賣却、抵當の自由はない。同じ法律は地主が地代の四倍を支拂ふことによつて終身小作、永小作人の一切の土地を買収しようと規定し、又地主が十ヶ年賃労働によつて自ら經營する場合、其一切の土地は彼の永久的自家使用地と認められ、何等の永小作権も終身小作権も發生しないことゝなつてゐる。

パンジャブでは、普通一切の小作並に地代は自由契約により、僅に小作人の爲した改良に對して地主は小作人への義務的賠償を支拂ふべきを規定してゐるのみである。

マドラス、ボンベイ等のリョートワリ地域に於ても、上述した如く、資本主義關係の進展と共に、リョートワリ地主が増大してゐる。例へばボンベイ Gujarat 地方では、非農業者の所有八九九・五千エーカーと大農（五〇エーカー以上）の轉賃を加へ約百萬エーカー、即ち全耕地の三分の一が小作地となつてゐる。之等の地域の小作は凡て自由契約で、通常契約は一ヶ年を以て結ばれ、地主は隨時其小作人を放逐することが出来る。マドラスでは一九〇一年から二〇ヶ年

の間に小作人及び労働者の數は、四九・六%から五四・二%に増加してゐる。

イナムダールの下では小作人の保護に關する一般的法律は及んでゐない。又マドラス、ボンベイに於ける Jamio 及び Taluqdar の名を以て呼ばれる印度教徒並に回教徒の封土の下の小作人は、多くの義務を負ひ、地主の結婚、其子女の誕生等々の場合に貢納を捧げることを強要されてゐる。

かくて印度農村に於ける下級の階層を構成する者は、極めて僅しか土地を所有して居らず、自身餘暇を他に労働するか、又は地主の土地を小作するかせねばならぬ農民、未だ永小作権を賣却せぬ所の小經營の農民、一般の無權利な小作人及び農業労働者、下僕である。そして之等は印度農村人口二億二千萬の大部分を占めてゐる。

第三節 現存する小作制度

現存してゐる小作制度は次の如く分けられる。

第一には生産物を以て支拂ふ賃労働で、通常個人的使用の爲に土地の一部を交付されること、契約期間の性質、又は労働者が屢々雇主の債務奴隸となること等に於て、單純な賃労働と異つてゐる。所有者は凡ての家畜、肥料、種子、道具を前貸し、一般に收穫の小部分しか彼のものとならない。明にこれには南部及び東南部に於ける下級の、又「不可觸」

5 J. M. Mehta, A Study of Rural Economy of Gujarat, p. 40

6 I. Reissner Grundbesitz und Pacht in Indien. (Agrar-Probleme, Band I, Heft 3-4, 1928 p. 745, 749-52)

身分の世襲的奴隷制の殘滓が蔽はれてゐる。法律によつて「作男」の地位と稱せられるが、債務的隸屬や身分的抑壓の様々な混合物で、マドラスの Padari、マハールの Casia、オリッサの Chajacan 等も之に屬してゐる。

第二は分益小作で、所有者は土地、建物及び資本の一部——種子又は家畜等——を供給し、收穫は地主と小作との間に一定の割合で分配される。其分配の率は、通常地主四小作六、又は五對五である。此種の小作はアッサム、聯合諸州（ウード、アグラ）中部諸州の一部に見受けられるのみで其普及範圍は狭少である。

第三は定量の生産物を以て支拂ふ小作で、地主は土地を貸與し、全資本は小作人によつて支出される。然し地主の前は收穫の一定量を以て確定され、收穫の高によつては變化しない。之等はマドラス、パンジャブ、聯合諸州、ボンベイ等に存在してゐるが、其範圍は特記する程廣汎でない。

第四は定額の貨幣を以て支拂ふもので、所有者は土地を貸與し、小作料は土地に對する一定の割合を以て確定されてゐる。殆ど全印度に亘つて、苘、阿片、野菜又は棉花等の現物で分けにくい様な作物の場合又現物で受取るより地主に取つて有利な様な場合に適用されてゐる。

問「貴下は小作地に對して如何なる小作料を取つてゐますか」——「小作料は總て金で徴収します。乾地一英加につき一ルビー——
○アンナ、菜園地は同じく四ルビー十二アンナ、灌漑地は同様六ルビー十二アンナです」（地主スバラヤンの陳述）（マドラス）

更に印度には勞働地代の殘滓が見出される。例へば聯合諸州では、之は通常あらゆる種類の現物給付の存在と關連し此場合小作人は地代の他に一年一日所有者の土地で野良仕事に従事したり、又薬や甘蔗糖汁、一定量の家畜や鳥類を地主に供する義務がある。（Bareilly 縣）

最後に印度で最も優勢なる小作制度、所謂バタイ (Batai) について述べよう。バタイは生産物に對する分前を以て支拂ふもので、單に土地のみを借り、其他の生産手段と勞働の支出は小作人の計算に掛る。其地代については、勅命農業委員會の「證據」に豊富なる事例が見出される。

地主、サブラマニ・エーヤールの陳述。 問「收穫に對する貴下の取分は幾何ですか」——「時に三分の二であり、時には二分の一です」。 問「租税は別として小作人は一切の生産費を負担するのですか」——「そうです」。 問「貴下は小作人に屬する三分の一から一切の生産費が支出され、更にこの三分の一から、貴下に對する負債を返還せんことを望むのですか、私は状態を正解した、でせうか」——「全く正當に」。 問「家畜を失つた場合誰が新しく購入しますか」——「小作人です」。 問「通常收穫の分配に當り、地主の分前はいくらですか」——「一般の状態では肥沃地では三分の二で、多くの場合等分されます、劣等地では二分の一以下です」。 問「地主の取分が二分の一以下の場合がありますか」——「ありません」。 問「では降雨少く旱魃の懼ある地方では」——「地主の取分は同様に二分の一を下りません」（一三八九三 一三九一九）

地主スバルマニヤ・ムダリヤルの陳述。 問「地主の取る、收穫の一部と云ふのはどの程度のものでですか」——「或る場合には三分の二、他の處では三分の一です」。 問「給水税の外に耕作費を小作人の分前から控除するものと解すべきですか」——「そうです」。 問「若し或る小作人が貴下の意に満足を與へない時は、貴下は其男との契約を解約しますか」——「私は私の希望次第で、そうすることが出来ます」。 問「小作人が土壤の豊度を高めた場合でも、貴下は彼の地區を取り上げることが出来ますか」——「そうです」。 問「施行された改良に對して何等の賠償を拂ふことなしにですか」——「そうです」。

事情はも早や明瞭となつた。小作人は僅かな取得から、家畜をも含めた一切の生産費はもとより、給水税、高利貸への返済をも果して而も次の收穫まで生命を維持せねばならないのである。

ベンガルでは所有者との分前は地主七對小作三、或は六對四、五對五であり、聯合諸州では五對五、良い地方で四對六である。ビハールも異同様五對五であるが、收穫の分配と結付く多くの奸策は屢々此率を遙に下廻ると稱せられる。中部諸州でも分前は通常五對五、時に七對三にすら達し、マドラスでは、此種の小作は灌漑地を包括してゐるが、上等地では生産費の分前を以て轉借され、其場合收穫の三分の一が小作人に残り、劣等地では貨幣地代を以て貸貸されてゐる。パンジャブでは所有者と小作人の分前を決定する前に、全收穫の八―九%が村の手工業者、農業労働者の爲に、又二―三%が村の役人の報酬として差引かれる。

かくて小作人は、若し土地から放逐され且つ餓死する事を欲しないならば、收穫が終了して間もなく所有者か、商人か、高利貸かに高利な現物又は貨幣を借入れねばならぬこととなり、不可避的に高利貸の繁榮と種々な桎梏を増加せしめるのである。

バタイ制と並んで Kanaut 制と云ふのがある。これは取入れ前の田野見積に基いて分前が決定されるもので、屢々それは露をおびた早朝に行はれ、實收穫より遙に樂觀の見積がもせられる。此場合村の長老は地主の利益の爲に役割を演じてゐる。此方法は地主により多くの不當利得の機会を提供する。彼は調査を故意に遅延せしめ收穫を遅らせることによつて、農民を自由に自己の意に従はしめる事が出来る。

だが、右の高率な地主の取分は、尙搾取の標準とはならない事は驚愕に價する。地主は通常多くの補足的賦課によつて取分を増加してゐる。例へば聯合諸州では、家屋の新築に際しての現物税、結婚税、特別な木綿の贈與、生産物を地主にのみ賣却することを保證する爲の多額な貨幣擔保が徴收される。ビハールでは又、分配の前に地主は各量目に

對する一掴みの穀物を取る等々。之等はそれ自身では極めて僅少であるが、かゝる補充的徴收は相重つて時に主要時代の二五%にも達することすらあると稱せられる。

第四節 若干の補遺

一、小規模經營の優勢

銀行業調査委員會 (Banking Enquiry Committee) 報告によれば、印度の『農民耕地の平均の大きさは比較的頗る大なるものでなく、且つ其箇々の部分が散在してゐる。一九二八―九年の播種面積は約二二〇百萬エーカーで、農村人口一人當り約一エーカー、或は五人より成る一家族當り約六エーカーを成してゐる』と。勿論、事情は個々の州によつて異つてゐる。各州に於ける一耕作者當りの、平均耕地面積の大きさは次の如くなつてゐる。(單位エーカー)

ボ	ン	ベ	イ	一・二・四	一・二・二	ベ	ン	ガ	ル	二・八	一	三・一	二
バ	ン	ジ	ヤ	九・〇	九・二	ビ	ハ	ール	オリ	ツ	三・七	三	一
中	部	諸	州	一三・二	八・五	ア	ツ	サ	ム	三・六	三	〇	
ビ	ル	マ		八・七	五・六	聯	合	諸	州	三・四	二	五	
マ	ド	ラ	ス	五・八	四・九								

備考、勅命印度農業委員會報告、IIは一九二二年國勢調査の數字にして「必ずしも精密でない」(一三三頁)、Iは一八二頁記掲のもの(一九二四―五年?)

この數字は、土地の瘦肥、市場との關係等々の現實に重要な諸關係を抽象し去つてゐるが、それに於てすら粗放的で且つ古い生産手段と生産方法に依存する此國の農業に鑑みて、良好でない状態を示してゐる。

ボンベイとパンジャブは、右の平均に於ては優位を占めてゐる。然し乍らより詳細に見る時は此等の州の状態も他州に劣らずに悪化してゐることが判明する。M. Keating 氏はボンベイ州の農民の持分は、大部分彼等の効果的耕作を不可能ならしむる状態にさせたと述べてゐるが、ボンベイ州に於て比較的到大經營の優れてゐる Gujarat 地方では

持分の數(%)	エーカーで(%)	平均の大小
五エーカー以下	六五・五	二・二エーカー
五——一五	二三・七	八・五
一五——二五	五・九	一七・九
二五——一〇〇	四・四	二六・七
一〇〇——五〇〇	〇・四	九・一
五〇〇エーカー以上	〇・〇	四・八
		一、二八三・〇

J. A. Mehta, A Study of Rural Economy of Gujarat p. 50

となり、同様にしてパンジャブの耕地は次の如くなつてゐる。(The Royal Commission's Report, p. 133)

一エーカー以下	二二・五%	五——一〇	二〇・五
一——二・五	一五・四	一〇エーカー以上	二三・七
二・五——五	一七・九		

之を先の平均耕地に比較し、勿論抽象的ではあるが五エーカー以下を過少經營と見れば、其率は農村の約六〇%前後

と見ることが出来、之に一〇エーカー乃至一五エーカー以下を小經營と假定すれば、この兩範疇に屬する者は農村の八〇%前後にある事を知る。彼等は地代關係から見ると、小作農であり、自小作農であり、極少乃至小所有者である。

更に事態を悪化せしむるものは、これ等の耕地が一ヶ所に集中せずして、村内の各地に散在してゐることである。従つてその各々の耕地の面積は極めて小さく、マン博士の Pimpal Soudagar 村の調査によれば一耕區の一エーカー以下のもの六二%を占め、Jategaon 村では同様三二%であつた。Bhalla 氏は Bairampur に於て、耕作者の三四・五%の各々の耕地が二五ヶ所以上に碎断されてゐることを記述してゐる。又他の村落の調査に於ても同様な證據を呈示してゐる。

されば之等の貧小農は、經營の改善を行ふ餘力なく、土地は益々痩せ、改良種子を植付けるとしても二、三年にして退化變種して了ひ、經營は益々悪化するのである。

かゝる極小經營、土地の細分散在、極少所有の廢棄の爲に若干の政策が行はれてゐる。パンジャブでは協同組合は小所有者の土地の分散整理に着手し、約三五一ヶ村(内三四ヶ村は小作村)に亘つて約一〇萬エーカーを整理し、一三三千箇の分散地から二五・三千の經營を形成した。中部諸州では一法律(The Central Province Consolidation of Holding Act, 1928)が制定され Chhattisgarh 郡に試行されてゐる。この法律によれば、村落の土地の三分の二を有つ村の經營體(permanent right-holder)の半數が整理に賛成する場合分散整理が強制的に實行されるのである。ここで農民がこの土地整理に反對してゐることは興味がある。蓋し彼等は收賄官吏が彼等を欺き、贈賄しうる富農が最良地を取得することを恐れるのと、種々な宗教的偏見によるのである。ボンベイでは、五エーカーとなる「合理的經營」の創定と關連して整理の法律案が作成された。この法律案が實施された場合

7 The Royal Commission's Report, p. 135

には三百萬以上の農民は工業に其仕事を見出すと云ふ假定の下に農業生産から排除されることとなるものであつた。従つて法律案は農民の反抗に遭ひ、撤回された。(The Royal Commission's Report, pp. 138—142)
 之等の諸政策の意義に關しては、吾々は後章にイギリスの印度農業政策の新方位に關して述べる場合に再びふれるであらう。

二、農業労働者、下僕

既に一八八〇年の饑饉對策委員會の報告は述べて云ふ「農業のみに關與し生活する者の數は、土地の耕作に要する實際員數を遙に超過してゐる」と。其時以來印度の人口は夥しく増加し、又其時以降農村の階級分化は著しく進展してゐる。農業労働者、下僕の數(家族を含む)は數次の國勢調査に於て次の如く示される。(百萬人)

年	成人數
一八九一年	一八・七
一九〇二年	三三・五
一九一一年	四一・二
一九二一年	三七・九
一九三一年	二一、六七六千人
	三一、四八〇

この數字は個々の調査の基準を異にしてゐる結果、嚴密なる比較にはならないし、又一九一八—一九一九年の大流行性感胃の死者はこれ等の數字を可成りに曲歪してはゐる。だが、二章に亘つて述べた事實のみからも、この農村プロレタリアの増加の必然性は理解する事が出来る。そして此國に於ける工業阻害政策の爲に、農村から排除される人口は都市に吸収されず、農村に於ける人口の重壓は益々増加してゐる。

農業労働者、下僕は又印度社會の傳統的身分的諸關係と結合してゐる。彼等は通常最下級のカストに屬し、村落外邊に荒廢した土壁の住居を營んでゐる。彼等のうちイギリス文明の二世紀を経た今日、尙も奴隸制度の遺物として存在す

るものがあることを指摘するのは興味がある。

其の一の典型は *Hails* と稱せられるもので、大地主の永久的農僕として世襲的に隸屬し、家屋と食料を給せられてゐる。彼等は辭職も轉職も許されない。法律上は自由人であるが事實は奴隸であり、其家族の全員が包含されてゐる。此制度についで *S. H. Coventon* 氏(ボンベイ州ブローチ縣集稅官)は述べて云ふ。

「約定労働者はハリスと稱せられ、通常 *Bhils*, *Talavias* か或る下級カストの者である。彼等は雇主からの前貸金を受け、口頭又は契約書によつて負債返却の年まで拘束される。彼等は食料と衣服を給與され、一日二—四アンナを支給される。通常彼等は前貸金を飲酒、結婚其他に費し、爾後の數年——恐らく生涯を、と云ふのは一勞務期間を終る以前に新なる前貸を課せられるから——事實上の奴隸として存在する」と。

かくて實際に彼等の勞務給付は利子の支拂の用はするが、元金支拂の振り當とはならない。彼等の妻も地主の家婢として労働し、僅少の勞賃を支給される。

ビハール・オリッサ では *Kamianti* と稱する制度が行はれてゐる。此處では、負債者は借受けた負債に對して、主人が利子代りに要求する一切の家の仕事を遂行する義務を負ひる。此種の労働者は債權者(地主)の爲に働く時分には現物で勞賃を貰ふ。但し地主が彼等の勞働を要しない時には他人の爲に勞働しうる權利を持つてゐる。「*カミア*は自己の勞賃について掛合をする事が出来ない。*カミア*は彼等が軀のすいた時間に時折り儲ける數パイ(パイは邦價約三厘八毛)を除けば、金錢を見ることが全くない。従つて何時までも自己の債務を償還することが出来ず、再び自由人になる事は出

來ない。地主は彼が不用の折にカミヤを養はぬのであるが、然し「彼等は村を離れることは出來ない。さもないと逃亡者と見做される危険があるから。……逃亡したカミヤはこの制度が支配する國內の地方では避難所を見出し得ない」。カミヤの賣買は普通の現象であり、その價格は「彼の負債額と同じである。」(Nazaribach 縣の調査)

農業労働者一般について、勞賃は、各州によつて、又農作物の種類、工業地附近又は奥地等様々な條件によつて異つてゐる。パンジャブでは——それは多かれ少かれ全印度に共通なものであるが——支拂方法は四種に分けられてゐる。即ち貨幣のみと貨幣と現物給付(日用品)との混合、穀物のみと穀物と生活必需品の給付との混合である。従つて一日當りの勞銀を算出することは困難であるが、United 地方(ボンベイ)の田舎地では一九二五年一〇アンナ四分の一であつたし、又パンジャブの一九二七年の調査では一般農業労働者は五・五アンナ乃至一六・五アンナで、最も普通なるは七・五—八・五アンナであつた。¹⁰⁾ 勅令農業委員會報告に散見する資料では一日最低一・五アンナ(約六錢八厘)で、四アンナの場合が多く、傭雇數年に亘る者は六アンナ乃至八アンナのものである。

最近の數字は資料を缺く爲に明にすることが出來なかつたが、恐慌の深刻さに従つてこの勞賃も甚しく低下せしめられてゐる事は明瞭である。比較的良好とされてゐるボンベイ州の正常の一日勞賃の指數に於ても、状態は次の如く悪化してゐるから。¹¹⁾

農場労働者賃銀指數、一九一三—一〇〇	
農村地方	一九二四年 一九二八年 一九二九年 一九三〇年 一九三一年 一九三二年
	一七六 一八六 一八〇 一七一 一三九 一三一
都會地方	一九五 一九一 一八八 一七四 一五三 一四四

9、エル・ウリヤノフスキー前掲書、八七頁

10、Indian Year Book, 1934

11、Indian Year Book, 1934

第四章 饑饉及び灌漑

第一節 饑饉と其對策

一、其諸原因と慘害

衆知の如く、印度はヒンドスタン半島とビルマを占め、北境にはヒマラヤ山脈が聳え、他の三方は海洋に包まれてゐる。ヒンドスタンの内部はデッカ高原を、此高原の果は海に添ふて山脈をなしてゐる。デッカ高原と北部の諸山岳との間には平原が位し、豊饒なベンガル平原はガンジス河の沖積土から成る。半島の殆ど中央を北回歸線が通過し、かくて南部は熱帯に、北部は亞熱帯に入る。降雨量はヒマラヤの麓、東部ベンガル、アッサム、下ビルマ及びアラビヤ海沿岸を除いて爾餘の地方は極めて少い。デッカ高原は海岸の山脈に防げられ、インダス河以東には有名なるタール大砂漠が横はる。

されば六月から九月に至る多量の雨を齎す南西のモンスーン(年雨量の約九〇%)は、印度農業の成否にとつての重要な條件である。五ヶ年のうち一年は雨水少く、十年に一年は旱魃に悩されねばならなかつた環境の爲に、古來より灌漑設備は農業に對し極めて重要性を持つてゐたのである。

イギリスの著者は多くこの自然的條件を強調し、農村の過剰人口と結付けて饑饉の原因を論じてゐる。過去數世紀に

屢々繰り返された地方的或は全國的の饑饉が、この自然的條件の悪化に起因することは論を待たないが、然し特にイギリスの支配以來の諸政策の爲に農民の抵抗力が著しく微弱にされることによつて、自然的條件の些少の悪化に對しても慘澹たる結果を齎してゐることを強調せねばならない。

過去のイギリスの諸政策についてはも早多言を要しないであらう。此處では只それは印度の自足的經濟機構を破壊し去り、一方には經營とでなく彼が收納する小作料のみに關心を持つ少數の大土地所有者と他方には彼等の壓迫の下に零細經營の、無土地の或は極小所有の農民が存在すると云ふ状態を馴致したものである事を指摘すれば足るであらう。次第に細り行く零細經營の農民は、生産方法の改善等は思ひもよらない。かくて一度饑饉に襲はれるや餓死者は萬を以て數へ、夥しい家畜の損亡を來し、高利貸、地主、商人の強化と共に小農民の土地の喪失と極少經營は擴大的に再生産され、結果は又新なる慘害の原因となるのである。I. Rai氏は、述べて云ふ。『近時の印度の饑饉は、食料の饑饉ではなく資金の饑饉である。國土には常に全人口を養ふに足る食料がある。だが民衆は、輸出商、小賣商人の要求する價格でそれを買ふ資金を何處に求めえらるであらう!?』

William Digby 氏の調査に係る次表は、雄辯にこの間の消息を物語つてゐる。

件數	摘 要	件數	摘 要
十一世紀	二 地方的	十四世紀	三 地方的
十三世紀	一 デーリ附近	十五世紀	二 地方的

— Lalpat Rai, England's Debt to India, p. 265 及 p. 269

第二部 農業に對する諸政策

九二

十六世紀	三	地方的	一八〇〇—二五	五	死者約一〇〇萬
十七世紀	三	地域不詳	一八二五—五〇	二	死者約五〇萬
十八世紀前半	四	地方的	一八五一—七五	六	死者約五〇〇萬
一七六九—一八〇〇	四	ベンガル、マドラス、ボンベイ、南部印度	一八七五—一九〇〇	一八	死者推定二六〇〇萬

實にイギリスの統治以後、饑饉は、資本主義關係の浸透に伴つて、其深さに於て、廣さに於て擴大してゐる事を知る。此處で簡単に各個の慘狀を見よう。

英治最初の廣汎な慘害は、ベンガルに勃發した。一七六九—七〇年の饑饉には州内人口の三分の一(約一千萬)は死せりと稱せられるが、其原因は東印度會社の飽くなき収奪に見出された。實に『租税は嘗てなき程嚴格に徴收され』(Warren Hastings) 而も此慘狀の中にあつて會社吏員は食料品を高價に販賣して巨利を得た。同様の例は一七八四年並に一八〇三—四年のボンベイ、北部印度の饑饉にも見出される。此後者の年はマラッタ戰役に當り、『苛酷な地租が會社吏員によつて賦課』されたのであつた。一八三三年マドラス Guntur のそれは『Ongohi より Masulipatan に至るまで、地方は人骨を以て蓋れた』と記されてゐる。一八五一年から七五年にかけて、先づ五八—六〇年のアグラ附近の饑饉に於て、四萬八千方哩の土地が荒廢し、地方を見棄つる者五〇萬人に達し、六〇—六一年の聯合諸州の一部及びパンジャール東南のそれは、五萬方哩、二百萬人に打撃を與へてゐる。

イギリス直接統治の最初の、而も深刻なることに於ても未曾有の一八六五—七〇年のオリッサの大饑饉は、カルカッタ市よりマドラス市に至る全沿岸地方及びビハールに及び、其面積十八萬方哩、四七五萬人を包含し、オリッサ一州のみの死者百萬と稱され、全地域の人口の四分の一は餓死したと推定される。同じく六八—七〇年の印度西北部及びパンジ

ヤール、ラジプタナ地方では、饑饉に續く惡疫の流行に禍され、メールワール地方の人口百五十萬の内百萬は流亡し、又七三—四年には北部ビハールの饑饉が記録されてゐる。

一八七六—七八年には、マドラス、ボンベイ、デッカ、マイソール、ハイデラバッド等の南部印度及びパンジャール、ウード等に大慘害を見、被害地域二十五萬七千方哩、人口五八・五百萬人に達し、死者大約四百萬を數へ、ボンベイ州のみにて七七一七八年の死亡數は半年を越ゆること八〇萬と推定された。

一八九六年に到る廿ヶ年は饑饉に關しては比較的平穩の裡に過ぎ、僅に地方的に繰り返されたに止まつてゐた。然し乍ら、この廿ヶ年に農産物の商品化、其輸出は急激に増大し、他面農村に於ける階級分化の進行も亦激みなく行はれてゐる。そしてこの結算は此の世紀の末年に展開された二回の大饑饉を『印度の歴史のうち最も怖ろしき』(Lord Curzon) ものとした。その最初のもの一八九六—七七年、西北國境州、ウード、ビハール、マドラス、中部諸州、ボンベイ、パンジャール、ベラールを襲つたそれである。實に三〇萬方哩の地域の六九・五百萬の住民が餓死に直面せねばならなかつたのである。第二回は一八九九—一九〇〇年に起り、中部諸州、パンジャール、ボンベイ、ベラール其他印度藩王國に及び、其被害は前回に増して四十七萬五千方哩、住民五九・五百萬人を包含し、惡疫の流行を加へ、英領印度のみにて七十五萬人の生命を奪ひ、更に家畜の夥し損失を齎した。

2. R. P. Hunt, Economic History of India, Vol. I. P. 51 及 29 p. 177

3. Indian Year Book

4. この前世紀末の約十ヶ年、即ち一八八九年一月から一九〇一年九月にかけての饑饉による死者は、毎分、二人を數へうると稱せられる。(Lalpat Rai, Ibid. p. 265)

今世紀に入つてからは、饑饉對策の進捗によつて、或程度之を防遏し、又被害を縮少せしめることが出来たが、尙一九〇二年の中部諸州其他部分的地方的の凶作乃至小饑饉が繰り返され、一九〇七—八年にはベンガル、ボンベイ、中部諸州、オリッサ、ビハールに相當激しいものが見出された。

二、饑饉救済の諸政策

では之等の惨害に對して如何なる救済案、防止策が講ぜられたであらうか。

最初の特別調査は一八六〇年の聯合諸州の饑饉に際して行はれた。もとよりこの以前の各地の被害に對し、イギリスは放置したものはあるまい。然し部分的、一時的便法は講ぜられたにせよ統一的救済策は何等設けられなかつた如くである。續いて一八六五年のオリッサ大饑饉には、Sir G. Champbell 氏を首班とする委員會が組織された。此時には九・五百萬(延人員)の救済が記録されるが、尙四千數百萬の人口の約四分の一の死を結果した。救済に際して之等の地方は交通の不備——主として船航に依存し、而も其港さへ風浪によつて役立たぬ事がある——が明にされ、初めて交通灌漑の發展の必要が痛感された。

然し乍ら、それ等の對策が稍具體化したのは、一八七六—七八年南印度に襲來した惨害に際しての對策委員會 (Sir Richard Strachey) の勸告に基くものである。即ち、これによつて饑饉保險補助基金 (Famine Insurance Grant——一般會計より年一千五百萬ルピー、約百萬磅の積立) が設けられ、又、後に一八八三年の州饑饉法典の骨子をなす所の對策が決定された。それは被害地の勞働可能者を救済事業に使役し、村落及び貧困者への無料救済、食料の供給は私的代

理者に委ね、又土地所有者の救済には低利資金を以てすと云ふにある。この饑饉では救済は進捗し、延人員七千萬、三・四百萬ルピーの費用が支出された。一八九六—七年には Sir James Lyall 氏の對策委員會が構成され、七二・五百萬ルピーの救済費と二二・五百萬ルピーの災害地免稅、更に一七・五百萬ルピーの低資融通によつて切り抜け得たが續く一八九九—一九〇〇年には一五〇百萬ルピーの費用並に三五百萬ルピーの王國への低資の支出を見ねばならなかつた。(此時には Sir Antony MacDonell 委員會が組織された) 之等の委員會に於て樹立された根本的對策は次の諸點に集約される。

- 一、食料の急速なる輸送によつて災害を豫防すべき鐵道網の擴張。
- 二、直接に自然的原因に對抗すべき灌漑運河の構築。
- 三、饑饉は單なる食料の缺乏より寧ろ購買すべき資金の缺乏にあり、印度の農民大衆は多かれ少かれ地主、高利貸、商人の桎梏の下に收穫の大半を取り去られ凶年への抵抗は一層弱められてゐる状態に鑑みての農業銀行の開設。
- 四、農業特別法——例へばバンジャープの土地移讓法の如き——の設定。
- 五、過剰人口の處理。

之等の諸對策は、其後次第に實現されてゐる。然し、よし凶年に於ける激烈なる惨害を或る程度防止し得たりとするも、印度農民はこれによつて其困難を除去され得ないであらう。例へば鐵道の擴張は商品の一層の流通に結果し、交通の發達による食料品價格の均一化は、一地方の饑饉によつても一般的高騰を齎すが、之に際して利得する者は食料品を貯藏しうる所の富農、地主、商人の一群である。Sir B. Fuller 氏は其著 "Indian Empire" に書してゐる「鐵道は饑饉の鋭鋒を鈍らしはするが、價格を平均せしめることによつて一般の窮迫を引き起す」と。又例へば、バンジャープ

の土地移讓法は、農村の階級分化を促進したことに結果したことは、前に述べた所である。第二、第三については本章次節並に後章が詳細に其成果を検討するであらう。

いづれにせよ、樹立された對策は、饑餓の據つて來る本源をつくものではない。今や饑饉に代つて尙一層廣汎に亘る窮乏、慢性的飢餓の連續が農民大衆の上に蓋ひ被さつてゐる。それは本書が全般に亘つて示す如く、此國の犠牲に於て繁榮するイギリス支配に基くものであり、農業に關しては特に土地問題並に強く殘存する封建的搾取關係に起因するものである。

第二節 灌漑の發展

一、灌漑施設の發展

農業が主要なる産業であり、様々な形體に於てあるが、農民の餘剰生産物を現物地代の形で直接に擅有してゐた限に於て、又一方風土及び耕種の技術的條件によつて水利が決定的に重要であつた限りに於て、排水、灌漑は、イギリス治以前の印度の支配者達によつて重要な國務の一をなしてゐた。

事實、溝渠、貯水池は十八世紀の初、南印度の經濟狀態を詳細に調査した Dr. Buchanan は其報告に於て、之等の地方の古いヒンヅー時代の灌漑事業、例へばマドラスの Jaipur 地方では三十二ヶ村を早魃の十八ヶ月間支へ得る所の大貯水池、又カルナティック地方の Kaveri Pak と稱せられる長さ十八哩、幅三哩に達する大溝渠等の大規模のものか

ら小は二、三エーカーの小貯水池に到るまでの豊富な殘存を記述し、同様に同氏の北印度踏査にもモハメダン治下の溢水溝、大灌漑設備の存在を示してゐる。

然るにモゴール朝の衰微並にイギリスの侵入と共に國土は劫掠の戰場と化し、灌漑は放置され、官吏の腐敗と混亂を極めた課税は民衆の生活を困苦の底につき陥し、かくて『土地は強制による以外は殆ど耕作されず、一人として自ら水を運ぶ爲に溝渠或は運河を修理せむとする者も、又修理しうる者はなく、それ故に全土は荒れ、大部分は灌漑水の不足から荒廢してゐる』と云ふ状態となつた。

東印度會社の初期の統治は、灌漑に關してはかゝる事態の延長に過ぎない。而も更に悪いことには、それは會社官吏の專横と嚴格なる課税に裏付けられ、土地制度、租税制度の改革は資本家的商品の流入と共に次第に古い印度の自足的機構を破壊し去り、村落は明瞭に地主、小作人に分たれ、灌漑に對する地主の責任は完全に解除されるに至つた。之等の過程が極めて激烈なる數度の饑饉に結果した事は既に繰り返し述べた所である。

5° I. Rai, *ibid.*, p. 280

5^a, 此處で民間の救済施設について簡単に記さう。民間には一九〇〇年に Maharaja of Jaipur による所の寄附一・五百萬ルピーを基金とする財團が設けられ、今日 Indian People's Famine Trust と稱せられてゐる。其貸付能力(利子の貸出能力)は七八四萬ルピー(一九三三年)である。(Indian Year Book)

又一九一九年の政治的改革後は、州政廳は一定の豫防、救済の爲の支出を行つてゐるが、一九二一年以降十ヶ年の州(主として)並に中央政府の之等の支出は、二六、五一六千ルピーとなつてゐる(英領印度統計要覽)より算出)

6° R. Dutt, *ibid.*, pp. 197—255

東印度會社統治の五十年を経て、Lord Minto の治下に初めて灌漑委員會が組織された(一八一〇年)。然し、該委員會は内部抗争の爲に何等の具體的結果を齎さず、超えて、Lord Hasting の治下に初めて West Jumna Canal の修理に着手し一八二三年に至つて完成し(主流四四五哩)、續して East Jumna Canal の建設(同一五八哩)が行はれた。又シンドでは舊運河の維持の爲に年額二萬五千磅が支出され、マドラスでは徵稅官が古い貯水池を修理した。然し之等の事業は公衆の生活改善よりも「主として彼の管下の地方に重稅を賦課せんが爲め」であつたのである。

灌漑事業が、漸く眞剣に考慮され初めたのは、會社統治の末年、印度民衆の疲弊に當面してからである。即ち一八五六年に Ganges Canal 四四九哩(支流も含む)が、續して Baree Doab Canal (五九年、パンジャープ四五〇哩)が構築された。だが尙其目的は是によつて生ずる直接の收益の上にあつた。

かくして灌漑事業がイギリス印度政府の主要なる農業政策として強調されるに至つたのは、一八六五—六六年のオリッサ大饑饉を經過して後のことである。其後に繰り返された大饑饉は益々この必要を判明させ、かくて灌漑事業への投資は一八七〇年三月の二、六九五、五千磅から一八八〇年同期には一、八五一千磅に達した。

十九世紀末から今世紀にかけては、パンジャープ、シンド地方に於て灌漑による内地植民が盛に行はれ、一九二二年迄は政府は生産的灌漑は公債により、保護的灌漑(十ヶ年間利益率一%以下のもの)並に小灌漑には國庫よりの支出によつて賄つて來たが、爾來一切を公債に財源を求め、更に中央灌漑局を設立した。かくて政府事業の灌漑面積は、一八七八—九年一〇・五百萬エーカー、十九世紀初當の十九・二五百萬エーカーとなり、更に一九一九—二〇年には二七・五百萬エーカーに發展してゐる。

次に現在の政府事業による灌漑——主として運河——の概要を示さう。

全灌漑面積	政府事業主要運河並に支流		同灌漑實面積	同作付面積	同投下資本
	百萬エーカー	千哩			
一九二一—二二年	四七・七九	一七・六	二〇・六四	二七・二〇	八一・二一
一九二五—二六年	四七・五七	二一・三	二二・一八	二七・三四	九九八・四
一九二九—三〇年	五一・〇一	二三・〇	二七・三六	三一・六一	一、三〇二・七
一九三〇—三一年	四九・七〇	二二・九	二六・六二	三〇・九六	一、三六四・四
内生産的	—	一四・八	二二・四五	—	九二〇・四

備考 Statistical Abstract for British India, 1933、投資額一九〇〇—一年、四二四百萬ルピー、一九一五—六年、六九〇百萬ルピー。尙途中のもの左の如し。

投資額	灌漑面積	純收豫定率
Sukkur Barrage (Sind)	二〇〇 百萬ルピー	一〇・五%
Sutlej Valley Works (Punjab)	一四六	五・一
Cauvery Reservoir (Madras)	六五	〇・三

7. R. Dutt, Vol. II, p. 171

8. 例へば、一八五三年のクリシユナ河は經費十五萬五千磅、之に基く地租増收年額六萬磅、即ち約三九%の回收率が豫定され、又 Arthur Cotton 氏の手に完全した Godavari work は二十六萬四千磅の支出に對し、年地租増收三〇萬磅、一〇〇%以上に期待され、『東印度會社は之を有利なる投機事業として』見たのであつた。(R. Dutt, Vol. II, p. 172-73)

9. 但し政府鐵道投資は同期間七四三・九千磅から、二四、六四四・七千磅に達してゐる。(R. Dutt, ibid. p. 362)

運河溝渠による灌漑は政府事業が殆ど全部を占めてゐるが、貯水池、井水によるものは民間に設備されてゐる。井水灌漑に對して政府は Tagavi Loan と云ふ改良資金の貸付によつて（利子は五・六・五%で、一般に六・二五%が多い）、或は灌漑地の地租を過重せしめない手段によつて、更にかゝる改良による地代の高騰に對する保證によつて奨勵してゐる。灌水の方法は勞力によるもの、牛馬によるもの、或はベルシャ水車によるものも多く、一部には發動機を使用するものもあり、水の得られる難易によつて異なる。井水灌漑の範圍は、パンジャブ、聯合諸州、マドラス、ボンベイ等に多く、其他菜園には廣く用ひられる。

貯水池は、小は數エーカーより大は二百億立方呎の水を湛へるまでの大規模なものが存し、主として降雨に依存する地方、殊にマドラス、マイソール、ハイデラバッド等の南印度に盛であり、其他に冬期乾燥期に際して貯水する一時的設備も存在してゐる。

かゝる方法により灌水は、地主の手に成り且つ企業的に經營されてゐる場合が多く、ゼミンダール地域では大規模のもののみが政府によつて施設されてゐる。例へばパンジャブでは地主によつて所有される運河があり、灌水を他の耕作者にも使用せしめ、通常生産物の四分の一を使用料として取受ける。或は地主又は地主の組合は、この給水料徴收を目的として運河を設けてゐると云ふ事實——多數ではないが——がある。中部諸州のデッカ運河協會はこの種のもので其資本家的企業による利益は三七%に達してゐる。¹¹⁾

今灌漑事業の分布を表示すれば左の如くである。(Indian Year Book 並に Statistical Abstract for B. I.)

全灌漑面積 (千エーカー)	内運河 (政府事業)		同 (民間事業)		貯水池		井		戸	
	一九二〇—二一年	一九三〇—三一年	一九二〇—二一年	一九三〇—三一年	一九二〇—二一年	一九三〇—三一年	一九二〇—二一年	一九三〇—三一年	一九二〇—二一年	一九三〇—三一年
一九二〇—二一年	四八、九五七	二〇、〇七八	二、五六五	七、二三六	一四、二四二					
一九三〇—三一年	四九、六九七	二二、一六〇	三、七一六	六、七六五	一一、七四五					
一九三一—三二年	四八、八六五	二一、六一七	三、六〇〇	六、二四五	一一、六五三					
(II) 全播種面積										
灌漑播種面積										
一九二〇—二一年	二二、三九、二〇二	五二、五一九	一八、二二九	一〇、二四八	三、一四三	二、六六五				
一九三〇—三一年	二六、九一三	五三、七六三	一九、五二八	一〇、一一一	二、五四九	二、九五三				
一九三一—三二年	二六、九〇一	五二、四五二	一八、五八三	九、九六七	二、三六二	二、九一二				
(III) マドラス										
全播種面積	六、三三三	六、六八八	六、六八八	六、六八八	六、六八八	六、六八八	六、六八八	六、六八八	六、六八八	六、六八八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
ボンベイ										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
ベンガル										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
聯合州										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
ジャバ										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
ビルマ										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
ピハール										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
オリッサ										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
中部州										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
西北國										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三
其他										
全播種面積	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八	三、六六八
灌漑播種面積	二、一八四	五、六七五	一、九〇〇	一〇、七〇三	一四、四四六	一、四四七	五、三三三	九、七三	九、七三	八、三三

二、灌漑に於ける社會的諸問題

人工的灌漑が「進歩的」と云ふ其誇稱にも拘らず、英治百七十年を経た今日、尙全耕地の二二%にしか過ぎず、他は「專

10 The Royal Commission's Report, p. 425

11 エル・ウリヤノフスキー、前掲書四四頁

ら降水量に依存してゐる」と云ふ建設のテンポの根柢は暫く置いて、此處ではこの灌漑自體に内存する諸問題について若干立入つて考察を加へよう。

先づ井水灌漑について。此の方法による灌漑面積は全灌漑地面積の二四%弱に當り、全耕地の五%餘に當つてゐる。施設の經費は、河邊水上に設備される Picottach 或は Katchcha と稱せられる水位地下三呎位の容易に水を得られる地域の一時的設備は、僅々數ルピーで足りるが、かゝる條件に恵まれぬ地方に於ては普通の煉瓦積井戸は三〇〇—六〇〇ルピーを要し、永久的な深鑿井戸では一十ルビトを要すとされてゐる。¹²⁾ 更に聯合諸州、マドラス及び中部諸州では政府の援助の下に機械モーター設備のある井戸 (tube well) を部分的に見出すが、此種の井戸に要する經費は約一萬四千ルピー(十五吋管、一時間揚水三萬五千ガロン)とされてゐる。¹³⁾

かゝる巨大なる費用を要すべき設備は、明かに大地主又は富農の協同組合だけしか之に適應することは出来ない。聯合諸州では灌漑施設獎勵を目的とする政府貸付金が、機械設備ある井戸の開掘の爲に主として地主に分配されてゐると云ふ興味ある事實がある。¹⁴⁾ 單純な井戸による灌漑は勅命農業委員會の報告によれば一エーカー當り二ルピーを要するものであるが『土地所有制、耕地の分散、協同所有者間の紛議、投資に對する利益の不確定、水の引上に必要な動力等の諸困難と建設の經費は、個々に或は相互に結合して井戸の廣汎な普通を防げてゐる』¹⁵⁾。多くの地方、例へばボンベイでは、地下水が深くなつた結果汲上井戸は最早や簡單に利益を生まなくなつた。又土地の分割は隣人間に種々な軋轢を惹起することによつて水の分配を困難にしてゐる。

されば井水灌漑の普及を獎勵しつつも、印度政府は、自己が創設した所の小作關係並に土地所有關係による障害に突

當きるのである。零細所有者、小作人の小經營が大部分を占める此國に於て、地主によつて何時なりと土地から放逐されうる小作人は、井戸の設備より寧ろ他の事を考へるであらうし、小土地所有者はよし巨額でないにせよ支出すべき資金を持つてゐないのである。かくて水源は土地の獨占者の獨占する結果となる。

この水の獨占と合併する土地の獨占——水代と併合する地代——は、一面一群の寄生的搾取者層の致富の源であり、他面この兩者は農民の生産物の餘剩部分並に必要部分の著しい割合を吞噬するが爲に、幾百萬の小農民の搾取及び貧窮の直接の原因をなし彼等に饑饉と死滅の運命を背負はせるのである。¹⁶⁾

翻つて政府による灌漑設備について述べよう。この施設は素より民衆の負擔に於て行はれるものであるが、この水源の獨占の爲に農民の賦課される水利税は、一九二九—三〇年では、投下資本に對し活動資金を控除して五・四%を、又三〇—三一年は四・七%の利益を擧げてゐる。三〇年の數字は、投資十三億ルピーのうちに所謂不生産的設備四億四千萬ルピー並に建設中のものを包含するのであるから、生産的施設に對する利潤率は遙に高率となる。實際パンジャブでは生産的灌漑は一三・六一%の利潤をすら擧げ、又三一年のそれは一、三六四萬ルピーの内九二〇百萬ルピーを占め、

12. Vera Anstey, The Economic Development of India, p. 160

13. The Royal Commission's Report, p. 340

14. 農業勅命委員會は之が續行の中止を勧告してゐる。

15. The Royal Commission's Report p. 340—44, p. 364

16. 『一切の支拂の後農民の家族内に残る収入の部分は、或は家族維持の爲には不充分であるか、或は零となる』(Banking Enquiry Committee's Report, § 62)

其純益六二・七百萬ルピー、平均して六・八一%の利益を齎らしパンジャブでは一二・六四%に達し、個々の設備では六〇・一五%(Siddhni Canal, Punjab) 五三・六三%(Ghar Canal, Bombay) すら利潤を得てゐる。¹⁷⁾

水利税は各州によつて異つてゐる。例へばシンドでは土地課税の中に包括され、其賦課額の十分の九はこれと推定され、ボンベイ、マドラスの一部は、地域を灌漑地、非灌漑地に分ち、前者は土地課税に内包される。通常降雨量の多いベンガルでは水を利用すると否とに拘らず低率の賦課があり、旱魃の折には何人もこの設備を使用しうることゝなつてゐる。然し印度全體としては獨立した水利税が課され、地域及び播種の異なるに従つて異り、其課税方法も年收穫よりの定量を賦課するもの、或は使用水量によるもの等様々である。従つて詳細な圖表を得ることは出来ないが、例をパンジャブに取つて其様相を推知することとする。(「エーカー當り」(ルピー・アンナ・パイ))

作物	水利税	作物	水利税
甘蔗	七・八〇……一二・〇〇	棉花	三・〇〇……四・四〇
米	四・〇〇……七・八〇	稷、豆類	二・〇〇……三・四〇
小麦	三・四〇……五・四〇		

之等は不作の場合には減額せらる。

Indian Year Book 1924

又、政府事業の資金運用の状態を示せば次の如くである。^{18) 19)} (單位百萬ルピー)

年次	投下資本	純収益	利益率	エーカー當總收入
一九二一—二二年	八一・二一	五八・三	七・一八%	四・三四
一九二五—二六年	九九八・四	七四・〇	七・一四	五・〇四

一九二九—三〇年	一、三〇二・七	七〇・八	五・四四	四・七四
一九三〇—三一年	一、三六四・四	六四・〇	四・六九	四・四六
内生産的	九二〇・四	六二・七	六・八一	

Statistical Abstract. pp. 720—2

三、灌漑地植民

新なる灌漑施設の多くは、例へばパンジャブ、シンドに於ては、住民の無い土地に作られ、従つて可成に大なる植民の基礎を作つてゐる。さればかゝる植民に際しての新なる土地分配の問題について述べねばならない。

先づ之等の地方の土地は、最初の間は、後章に見るイギリスの印度農業改革の計畫に基いて、往々大規模な資本家的經營を行ふ目的を以て土地に定住する都市資本家に賣下げられる。だが彼等は後に土地を分割して緊縛的條件で小作人に賃貸に出すのである。元印度棉花委員會議長代理デェンキス氏は之について述べてゐる。「眞の土地耕作者達が充分な耕地を持つことが出来ないにも拘らず、一〇〇〇エーカーと云ふ纏つた土地が資本家に賣り渡されて行くが……之等

17. Statistical Abstract for British India, p. 721

18. 尙、州、中央政府の土地課税の中灌漑に基くものは以下の如くである。即ち一九三〇—一一年度三五九百萬ルピーの内、五六・二百萬ルピー、一九三一—二二年度三九三・八百萬ルピーのうち五九・一百万ルピー。(同右)

19. 個々の農家支出のうち水利税の部分は素より一様に示されず且つ明でないが、パンジャブ Lyallpur 縣の經營(二七・二五エーカー)では一七%に當つてゐる。(India Analyseb Vol. III, p. 123)

の資本家は眞の農民でないので、之を小區に分割し、其後賣却するか或は小作に貸與して自らは徒食の生活に安んずるのである。かくて「土地は最も屢々農民と云ふよりは寧ろ地代を收得して生活する者の掌中にある」²⁰⁾。

この從來の経過に關連して勅命委員會のシンド灌漑地に關する勸告も興味がある。委員會は第一に小土地所有者、小作人及び農業労働者が、其附近の地域に於て所有地を分與さるべきであり、パンジャブ植民地域の如く不在地主たることは許さるべきでないとしてゐる。然し乍ら委員會は——或はこれが主たる要點であるが——「それにも拘らず吾々は、何處でも灌漑能力ある家族を含む進歩的農業者の或程度の移住は、耕作水準に有益な効果を收むるであらう」とし「進歩的農業經營を行ひ得る如き個人からの……廣域の土地拂下申請がある場合、かゝる經營を當該地の住民中に相當數介在せしむることによつて、經濟的、社會的狀態の改善に貢献しうると考へ、二千乃至四千エーカーの土地を個人又は個人の集團に一定期間委譲すべきである」との意見を表明してゐる。それと同時に移輸出の利益の保護をも考慮に入れ、且つ農業者に對する土地委譲を特定作物、例へば此地方では棉花栽培の義務と結びつけて考へてゐる²¹⁾。

要するに大規模灌漑地に對する植民に際して、當局の意圖は大農並に地主經營の創定によつて附近の小農民を指導せんとするにある。然し乍ら、現實には個人又は個人の集團に拂下げられた大土地では大規模經營は殆ど行はれず、人口過剰と封建的搾取關係の強く殘存する此國にあつては、小區域に分割し小作人に貸與する方法が採られることは明であり、又小農民指導の爲に介在する大農、地主經營は却つて之等小經營を壓迫するであらう事は疑ふ餘地がない。

灌漑と關連して人工灌漑地に於ける排水、洪水豫防の問題等が生ずる。勅命委員會の報告は、灌漑に關しては水量に應じての水利稅の確定、小灌漑設備の爲の協同組合の組織、井戸開掘の奨励、舊貯水池の修理復舊、私的企業による機

械ポンプの採用及び之等を指導する所の新なる技術局の樹立等にあつた。然し、既に見た所によつて、又以下述べる所によつて明なる如く、之等凡ての方策は、比較的富有な經營のみを考慮に入れてゐるのである。零細經營の大多數の農民は此處でも保護の埒外に置かれてゐる。

20、エル・ウリヤノフスキー、前掲書四三頁

21、The Royal Commission's Report, pp. 356—57

第五章 高利貸・商人・地主による緊縛

第一節 負債の重壓

一、老なる農民の債務

印度農民の窮乏と饑餓の状態は、印度經濟に關與する人々の口に筆に例外なく上せられてゐる。既に早く一八七五年の The Deccan Riots Commission はアーメドナガール縣(ボンベイ)十二ヶ村の調査に於て、農民の三分の一は債務に緊縛され、其總額は課税額の十八倍に當り、其三分の二は土地を抵當としたものである事を報告し、又、一八八〇年の饑饉對策委員會は、全印度の土地所有者層の三分の一は借財の重荷を背負ひ、三分の一は辛うじて自力によつて恢復しうる状態にあると述べ、更に一九〇一年の饑饉對策委員會も亦、ボンベイ州の耕作者の五分の四は、負債の泥濘に陥り、其持地を喪失してゐる者四分の一に達すると結論してゐる。

Sir Frederick Nicholson は、マドラス政廳の委嘱によつて州内農村を調査し、其負債四五〇百萬ルピーに及ぶと報告し(一八九五年)、Sir Edward Maclagan は右の報告を基礎として英領印度の農民の債務を三〇億ルピーと推定してゐる(一九一一年)。更に M. L. Darling 氏はパンジャープの土地所有者の八三%は負債に悩み、州内農民債務の總額九億ルピーを基とし、英領印度全體のそれを六〇億ルピーを下らずと主張してゐる。

其時以來印度農業の慢性的恐慌状態は次第に深化してゐる。吾々は一九三〇年の Banking Enquiry Committee の報告に債務の深化を見ることが出来る。

州	農業債務 百萬元ルピー	全人口(百萬) (一九三〇)	農産物價值 百萬元ルピー	土地課税に對する關係(倍數)
ビハール・オリッサ	一、五五〇	三七・五	一、二〇〇	—
マドラス	一、五〇〇	四六・五	一、六五〇	一九・〇
パンジャープ	一、三五〇	二三・五	九一五 (一九三〇年)	二五・五
聯合諸州	一、二四〇	四八・五	一七・〇	—
ベンガル	一、〇〇〇	五〇・〇	二、四四〇	一八・〇

、今世紀に入つてからの農民債務状態は左の數字によつて略判明するであらう。

年	負債なき農民の率	平均負債額 (ルピー)
一九〇一年	バロダ王國 四〇% (全土地所有者の中)	一一一 (負債耕作者當)
一九〇七年	Faridpur 縣 (ヒンガル) 五五% (全耕作者中)	四五〇 (負債土地所有者當)
一九一三年	バロダ王國	二七三 (負債組合員當)
一九一九年	マイソール王國 三七% (協同組合員二四、三五〇人中)	四六三 (負債土地所有者當)
一九一九年	パンジャープ州 一七% (同右、四三、七三三人中)	三二四 (一般農民一家族當)
一九三〇年	ボンベイ州	—
一九三〇年	パンジャープ州 一三% (同右、一一二、三五八人中)	五七〇 (土地所有者家族當)
一九三〇年	シンド	—

(Darling, The Punjab Peasant in Prosperity and Debt, pp. 4-9, 及び Jathar & Beri, The Indian Economics, p. 309)

第二部 農業に對する諸政策

一一〇

ボンベイ及びシンド	八一〇	二二〇	一五二〇	一五〇〇
ビール	五五〇	一四・五	一四・五	(シンド) 一六〇〇
中部諸州、ベラール	三六五	一五・五	七九〇	一一・五
アッサム	二二〇	九〇	二二〇	二二〇
西北國境州	一一〇	二・五	六五(一部不詳)	二
デリーその他	四五	一・二	二	二
計	八、七四〇			

Darling, ibid. p. 18

この九〇億或は一〇〇億(ダリング推定)の負債は、益々深化して行く恐慌状態にあつては、實生活上に更に遙に巨大なる重壓を加へずにはおかない。銀行業調査委員會の報告は次の如く述べてゐる。

『バンジャール州委員會は、州内農業債務總額は一九二一年の九億ルピーから、一九二九年の二三億五千萬ルピーに増加したと算定した。この負債の重荷は、若し農産物價格が略五〇%だけ下落した事實を考慮に入れるならば、實際に於てルピーで測定した負債の増加總額によつて判斷しうるよりは一層重い筈である……従つて一九二九年の一三億五千萬ルピーまでの増加は、とりも直さず一九三〇年の實際の債務が二七億ルピーであることを意味すると斷定しうるのである』

負債なき農民の率は一九三〇年の同一資料によれば次の如くである。

バンジャール(協同組員一一二、四千人)

一三%

ビール

マ

一四%

聯合諸州
ビール・オリッサ
中部諸州(小作人)

四六%

三五・五〇%

四六%

アッサム

グヂェラット(ボンベイ)

一五%

シンド

二二%

ド

一三%

此處で聯合諸州、ビール・オリッサ、中部諸州の負債者率が低いのは之等の州に於ては、小作人は土地所有者よりも遙に多く、彼等は其資産並に収入の極めて乏しい事から信用を得ることが出来ないで、止むなく債務の外にある、と云ふ事情から説明される。この理由は又一人當りの負債額が、自由小作は永小作よりも、永小作は小土地所有者よりも少いと云ふ事にも見出される。

それは兎に角、一九三〇年以降植民地原料品及び食料品の價格は、更に平均四〇%だけ下落した。之は負債の事實上の重の過増並に高利貸への利子として農民が徴收される生産物の量が、物價の低落と恐慌の深化に直接左右されて増加して行くことを意味するものである。負債の曲線の上昇に反比例して、農民の賣却する生産物に對する手取金の曲線は下降して行く。この手取金の破局的下降はそれだけ一層負債の重壓を増すこととなるのは自然の法則である。

二、負債の原因

イギリス及び印度の經濟學者は、農民負債の原因を殆ど恒に印度人の怠惰性、浪費性、冠婚葬祭に、又印度人の無智蒙昧に歸着せしめて、克己と教育の普及について喋々する。だが、明瞭に、この論據は故意からずんばナンセンスで

2. Darlig, ibid. p. 5

眞因は次の點に見出される。即ち土地と水源の獨占、封建的搾取關係の殘存、大地主による零細經營の壓迫、帝國主義の課税の重壓、舊債務辨濟の必要、大多數の農民が役畜及び農具を缺くこと等々、之を要するに零細經營の異常な經濟的微弱と貧窮が、長きに亘る封建的・帝國主義的搾取の結果として印度農民を負債の泥沼に追うてゐることである。マドラス州に於て、各地方の小作契約更新の際に特に調査した負債原因に關する資料は、如上の事實を明確に裏書してゐる。(各百件の内)

縣名	非生産的負債			生産的負債		
	土地購入小作料納税	裁判訴訟	前貸に對する支拂	水利灌溉	役畜、農具購入	家屋新築
Bellary 縣	二三	三	一〇	七	二二	三
Anantpur 縣	一六	二	一〇	一三	一七	三
Kistna 及 Godavari 河下流	二八	一	三	四〇	二	三二
同兩河上流高地	一八	二	一	二四	二九	六
備考、エル・ウリヤノフスキー氏前掲書、六五頁による。右の外の殘餘が家庭用支出の爲の債務である。						
尙聯合諸州では生産的債務三〇%「直接に決定的に窮乏に基くもの」三四%を占め、中部諸州では舊債支拂二六%を除いて、三四%が非生産的(non-productive)のものと云ふ。(Darling, ibid. pp. 19-20)						

事情は全く明である。身分制度と混淆する様な慣習、制規等々の「負債の原因」は、封建的遺物の支配から生じたものであり、支配階級によつて意識的に緊縛されてゐる農民の意識及び生活内に於ける封建的遺物の反映である。

かくの如き廣汎な、巨額の負債を農民は何處に負うてゐるであらうか。再び例をマドラス各縣下の村落にとれば、次の如くである(各百件の内)

縣名	帝國銀行	政府	職業的金貨	農民的金貨	信用組合
East Godavari 縣下	一	二	四八	七	四五
Bellary 縣上	二	一〇	三六	一二	三〇
Madura 縣下	三	八	五三	二五	二二
Colimatore 縣下	一	一	二六	六四	一
平均	二	三	三六	三二	二二

Dr. B. V. N. Naidu, The Co-operative Movement in the Madras P. (Indian Journal of Economics, Jan. 1934)

即ち、債務の約八〇%が職業的及び非職業的高利貸に出づることが明である。

この負債状態は如何に歸着するであらうか。銀行業調査委員會は之に答へてゐる。「負債は不可避的に土地を非農業者たる金貸業者に移らしめる結果に導き、この事は經濟状態の一層の低下、農村プロレタリアートの發生に導く。土地

が金貸業者の掌中に移つて以後の結果は、農業的収入性の喪失である。何となれば金貸業者が土地を小作に貸貸するに當り、其賃貸料たるや小作農をして佳良の收穫を獲ることを得しめない程のものがあるからである』(§八二)

この長引く破産行程は、結局、零細農を驅つて債務奴隸(之については既に述べた)とするか、或は外見上一身の獨立を保持しつゝも事實上は高利貸の凡ゆる要求、指示に服従せねばならぬ状態に置く。彼等は、一切の生産物を高利貸の手を通じてのみ販賣することを強要され、又、金貸に取つて有利な商品的單一作物の作付を強制されるに至るのである。この種の強制作付は、よし土地が兼併されぬ場合でも、小農民は、組織的饑饉の環境に於て、負債と高利による所の強力な槓杆によつて行はれる。

高利貸は、かくて、土地を兼併して地主となる。印度南部地方の地主の多數は高利貸か高利貸的商人から發生してゐる。彼等は地主に轉化して後も、普通、蓄積した資本を農業生産に投下せず、依然として高利貸に従事し、土地は小作地として農民に貸貸してゐる。

吾々は次に、この高利貸について解剖の筆を進めよう。

第二節 高利貸の活動

一、高利貸の種類

印度の農民を緊縛し其骨髓までを嘗味する所の高利貸大衆、地主と共に直接生産者を經濟外的強制を以て收奪し、又

イギリスが植民地として印度を保持する一連の手段の中に、最も重要な役割の一を果してゐる所の高利貸大衆、この高利貸の各種のグループを、今銀行業調査委員會に従つて分類する。

大分して、それは二群に區分される。職業的高利貸と非職業的高利貸とに。

職業的高利貸は、更に二の亞種に分けられる。第一は農村の職業的高利貸で、普通定住して商業を営むでゐる。彼等の貸出は相互信頼に基いて『證書を作成せず、又保證人さへ設けない』が、實際手渡高よりも大なる額高を債權してゐる。日常當面の經營費——短期の貸付には、彼等は『收穫が、彼或は彼の仲介を経て賣却さるべき條件』を附し、又は收穫を擔保とするが、長期の又は巨額の融通には土地の抵當を要求する。利子は普通に復利法によつてゐる。

第二は行商的(巡回的)高利貸である。『殆ど凡て彼等は商品、特に衣服を貸賣し、次の冬に其代金を受け取』つてゐる。此種の高利貸は對象を、貧農、農業労働者、下僕、都市労働者に置き、五ルピー乃至五〇ルピーを、普通證書によつて融通する。貸付は負債分納支拂の條件でなされ、『この際、或る場合には第一回の分納は融通金手渡の時に控除される』のである。『債務を支拂はぬ場合には、債權者は強制手段を適用する。又稀には裁判所に訴へる。彼等が適用する強制手段とは、債務者を常時不斷に、常に投獄さるべしと云ふ恐怖状態に置くことを主眼として』ゐる。民衆の無智蒙昧なる此國では、それだけで充分なる脅威である。(以上§一〇八)

非職業的高利貸は、職業的高利貸に對する制肘の諸立法(後述)によつて著しく増大し、勢力を増してゐる。此處地主主、搾取農、高利貸は、土地所有者として、同時に高利貸として小作人と農民を二重に壓迫してゐる。彼等は自作に對しては土地を擔保に金錢を——『時としては唯一の目的は債務者の土地を收奪することにある』——小作人に對しては

將來の收穫を擔保に現物を貸付ける。『地主』高利貸は最も悪意ある債權者である。彼等は此場合、小作人に對して二重の權利を取得することとなる。小作人が小作料を納付しても負債の利子を支拂ぬ場合、地主は民事裁判所に訴訟する。逆の場合は、地主は所得裁判所を経て小作人を迫害する。……地主は、希望によつては小作人から受取るべき支拂額全部を負擔に加算し、かくて自己の小作人を、小作料未拂者の状態に保持して置くことが出来る……この事は小作人を土地から放逐する權利を地主に與へることを意味する……小作人は時として負債償還の爲に、地主に自己を奴隸として賣ることがある』(§一〇九)。この場合、又地主の高利貸的操作は農民の大多數をして、彼(地主)に取つて最も有利なる作物を強制的に栽培せしめる爲の有力なる槓杆の役割を演ずるのである。

中部諸州の地主ラオ・アハドウル・テシュバントは勅命農業委員に答へてゐる。『私は先に種子を貸し、其代りに棉花を貰ひます。例は私が七八〇フントを與へれば、其代りに三九〇フントの棉花を受けます』(證據三〇四九八)之は貨幣に換算すると、一二二ルビーの種子を貸し、二三〇ルビーを受ることとなる。『それならば私が、貴下が一一二ルビー與へて、其代りに二三〇ルビーを受取る譯ですと云うて間違ひありませんね』『それは普通、貸付作用の場合には、まづこんなものなのです』(三〇六七)而も此種子貸付期間は四ヶ月乃至六ヶ月である。又例へば、同州アマラオテイのマルグサール、ハバルダは、彼自身が指定した彼に取つて有利な作物——棉——の收穫を擔保に前貸金として小作人に金銭を貸付けてゐる。

州農務局長クライメン氏は其報告書に於て述べて云ふ。『地主の目的は、小作人を出來うる限り負債に深入りさせ、其後彼等から收穫を取り上げ、僅に生存必要部分のみを小作人に残さうとするにある。……此種の地主は、農民にとつて眞の呪咀であり、農業及び經濟發達に對する主な障害の一である。この種の地主は、小麦及び米作地方の多くに優位を占めてゐる』と。(エル・ウー)商人『高利貸は恒に收穫を擔保とし、或は收穫を彼を通じて、又は仲介として賣却すべきことを條件とする。この種

のものゝ商人的活動に關しては後に詳述するが、買占諸會社又は加工工場と直接に、或は仲買商を通じて連絡を持つてゐる。かくて此處で商業『高利貸を營むことによつて、彼は農民から二重の收取を可能とする事が出来るのである。貸付の利子は、回教徒^{モハメダン}と印度教徒^{ヒンズ}との間では様々に異つてゐるが、普通に二四—三〇〇%であり、其上に利子を引上げようとする様な工夫が凝されてゐる。

アッサムでは平均して年利一二%から七五%の間にあり、現物(米)貸付は屢々二四—三七・五%に達してゐる。行商的高利貸の普及するボンベイでは、彼等の年利は七五—三六〇%で、一般に普通なるは一二—二八%(無擔保)、シンドでは年利三六—五〇%、比較的搾取農の發達してゐるグデラット地方では九—一五%の間である。ベンガルの利率は、無擔保が、低い地方では一八・七五—三七・五%であり、高い地方では三七・五—三〇〇%に達し、現物を以てする利拂の條件の下では、現金利拂に比して高いのを恒とする。ビハール・オリッサでは種子貸付は、八ヶ月五〇—一〇〇%を、現金貸付は二五—五〇%である。ビルマは一ヶ月一・五—二%を普通とし、時に五%に及ぶ。中部諸州は土地擔保の場合には九—一五%、無擔保の場合永小作は二四%、自由小作人は年利三七・五%を最も普通に支拂つてゐる。『殆ど常則として負債未拂の場合には、一層高率の、又は懲罰的の利子を徴すると云ふ條件を設けてゐる』。種子貸付は二五—五〇%、時として一〇〇%に達する。

マドラスは土地の第一抵當の條件では一二%であるが、保證に準じて四八%までに變り、食料、種子の貸付には一季

節(五、六ヶ月)二五—五〇%を計上する。パンジャブは高利貸の優勢な地方で、最も普通の利率は三五%位であるが、Patanの取る利子は七五%は低率の部に屬し、擔保物件の薄弱な場合は「利子は勝手法題な高さにまで高めることが出来る」。聯合諸州は、普通の高利貸は一八—三七%を要求し、行商の高利貸は四四—一〇〇%を、又家畜貸賣は二ヶ年期限を以て年利一五〇%である。

右に述べた様な利子は、然し當然に擔保物件の厚薄によつて上下されるのであるから、土地の配分、生産手段、貨幣資本に基く階級的分化の状態が、徴收される利子の性質及び大きさに影響を與へてゐる。換言すれば、小貧農、農業労働者程、最も借受を要望する者程高率を課せられることとなつてゐる。

二、高利貸と背後の資本

印度では、高利貸業者は通常大量的な豫金を取扱はない。従つて資金の需要期に際して彼等は他の上級金融機關に依存せねばならない。「農村の金貨は、都市の金貨より融通を受けて自己の資金を補充し、又進んで之に豫金する」(§一三)、實際に農村高利貸の資金は或程度都市の土着銀行業者(ボンベイでは、Shroff、ビルマでは Chettiar と稱呼される)から融通されてゐる。

土着銀行業者は、彼自身都市の小市民等の豫金を擁し、又或る場合には土着株式銀行に融通を求め、かゝる土着銀行業者は、農村の商業・高利貸資本の膨脹と、それ等を工業資本に轉化しうる途が殆ど閉鎖されてゐること、共に、工業が極めて微弱である此國の特徴的な經濟事情に根柢を持つてゐる。

土着銀行業者は、下方では農村高利貸と聯絡してゐるが、上方では土着株式銀行と結ばれてゐる。その二三の例證。ボンベイでは「大都會では二名の信用確實なシュロフの裏書した手形を擔保に、株式銀行並に印度帝國銀行から或る程度(融通金を)受取ることが出来る」(§一二五)、ビハール・オリッサのシュロフは「銀行又は他のシュロフから現金信用貸により、或は手形擔保によつて貸付を受ける」。更に西北諸州では大シュロフは「豫金受理を避け……印度帝國銀行から貸付を受ける」。ビルマのチエティアルについても亦同様で、彼等が受ける此種の融通は、繁忙期には三千萬ルピーに達すると云はれ、マドラスの土着銀行業者もこの例外をなすものでない。

他方に、之等の土着銀行業者は、農民と直接的關連を設けることは稀である。「ビルマに於ては、チエティアルは貸付の大部分を農業方面の需要に對し提供する。この種の金融の特徴をなすものは、チエティアルが其使用人の一人を農村に派遣し、地方の債務者との間に契約、取引を行はしめる事である。ビハール・オリッサでは、彼等は大商人及び高利貸に金融をするが、直接に貸付するのは都會へ出京しうる所の農民及び地主に限られる」(§一二八、一二九)

土着銀行業者の貸付利子は六一—一三%である。從來彼等は抵當として收穫を望んだが、恐慌によつて本國の印度に於ける金政策並に銀相場の變動と關連して、又農民の恐慌の重壓の下に最後の退藏金・銀、裝飾品を手放す事情と關連して、この金銀の買占に多大の關心を示してゐる。

かくて今や農村高利貸の資金の背景を辿る事が出来る。即ち高利貸業者は土着金融業者に統制され、後者は又、株式銀行を通じて、印度帝國銀行乃至イギリス銀行に結びつけられてゐる。「印度の貨幣貸付資本は、生産の半封建的基礎によりつゝ、イギリス金融資本の公吏として働く。この資本は、この點に於ては、資本の一般的回轉流通に於けるモメン

トの一の役割を果す』のである。

帝國銀行が最近、イギリスの印度農業の資本家的經營の奨励と關連して直接的に之を促進せしむべき方策を探つてゐることは興味がある。『印度帝國銀行は先以ボンベイ州に於て保證人を定めたる對人的保證の下に、若くは商品擔保で大地主に貸付をなす事を初めた』(§二五〇)又ビルマでは『大所有者に對して巨額の貸付金が與へられてゐる。而て彼等大地主の或者は製粉工場を有ち、又は大規模の米穀賣買を行つてゐる』(§二五一)

此處で參考として、印度民間の『四大銀行』の發展狀態を知ること、興味のないことでない。(單位百萬ルピー)

銀行名	預金	投資	貸付	利益	現金
印度中央銀行	132.6	29.1	75.3	0.65	20.7
1927年	208.2	11.8	73.8	1.1	16.7
1933年	222.3	129.7	67.6	1.47	40.2
印度銀行	100.1	21.2	73.1	0.43	18.6
1927年	103.1	31.3	72.9	1.25	17.5
1933年	145.0	82.6	58.0	1.35	24.5
アラハバッド銀行	105.3	12.1	62.1	0.41	20.6
1927年	101.9	31.7	53.3	0.69	16.1
1933年	102.5	45.8	45.2	0.59	13.9
バンジャープ國民銀行	37.9	4.4	27.7	0.23	9.2
1927年	77.8	25.1	50.2	0.32	5.7

1933年 45.6 17.4 29.1 0.33 2.9
 印度銀行は最も古い歐洲人經營の株式銀行であり、アラハバッド銀行は、實權は爲替銀行の手にあり、バンジャープ銀行のみが純粹に印度人資本の下にある。(“Capital” Supplement, Dec. 1934)

第三節 商業資本による緊縛

農民の生産物の購入に關して商人に高利貸は重要な役割を演じてゐる。

經營は零細で、常時不斷に高利貸の緊縛の下にある所の貧小農は、都市市場との間に如何なる通路をも持ち得ないと云ふことは當然である。この事は道路の劣悪な状態及び販賣關係の混亂と相重つて、多くの無益な仲買人を生ぜしめてゐる。普通に、仲買人は高利貸であり、又或る場合には農村の小商人(高利貸)であり、他の處では地主、搾取農でもある。

この場合高利貸付業の役割は極めて大きい。マドラスでは『普通貸主が小店主或は商人である場合には、收穫は豫め定められた價格で、だが極めて屢々市價より5%だけ低い價格で貸主に賣り渡すと云ふ條件が設けられる。これが零細農の場合には、かゝる條件は彼等の利益に多大な損害を齎らす。と云ふのは實際上彼は、商人の提議する條件は如何なるものにせよ承諾せねばならぬやうになるからである』(マドラス §二七三)。ベンガルでは負債する小農民が貸主に對し

4、エル・ウリヤノフスキー氏前掲書、七三頁

て賣却せねばならぬ價格は「屢々市價に比して二五—二〇%も低」く、又青田賣賣は勿論、ボンベイでは甘蔗作付の農民は、甘蔗糖汁を高利貸を通じて、又マンゴの果樹は收穫以前に賣却され、ビハール・オリッサにも同様な事例が見出される。此處では黄麻取引に於て「安い相場が立つてゐる時、農民が内金の形で小額を借受けると、之に對して貸主は最初に黄麻を買ふ權利を獲」てゐる。かくて「直接生産者は、自分の生産物に對して、假に彼が債務に拘束されず自由市場に販賣しうる場合に比して、より少額を手にする」(§二七三)のである。

販賣の経路は極めて雑多であるが、零細農は、彼が地主、高利貸に直接に生産物を賣渡すことを餘儀なくされる以外は、生産物を市場に搬出して實際の消費者又は小商人に賣却するか、普通同一地方に居住する農村小賣店主の所に持参して賣拂ひ、或は又買占商の到着を待つて、買占商にとつて頗る有利な價格で賣却するのである。

高利貸、小店主、搾取農及び地主の要素を包含する仲買人は、商業中心地の卸商と連絡を持つか、或は屢々都市買占商の代理店となつてゐる。

買付の方法は極めて多くの詐欺手段を含んでゐる。「仲買人は棉花を積んだ荷車數十臺を集めて生産者と掛合ふ。最後に價格の折合がつくと彼等は棉花の衡量を提議する。看貫の際彼等は勿論胡魔化をやる。既に半分も取卸し終つた看貫の最中に、仲買人は突然品質の粗悪を口實として、新な事實上最後通牒的な價格を指定する。農民は詮方なく之を承諾することゝなる」(勅命農業委員報告三八五—六頁及び「證據」三〇三八三)

以上は Khandesh の棉花取引の事例であるが、ベンガルの黄麻取引にも亦例外に立つものでない。此州では仲買人の群は *faria*, *behari*, *aradar*, *mahajan* 等の諸段階をなしてゐる。直接の買付は多く *faria* (小商人) 又は *behari* (仲買人)

によつて行はれるが、金融的背景には後二者が控へてゐる。彼等の手数料のみでも、黄麻一マウンド當りで *faria* の二—六アンナ、*Behari* の四アンナ乃至一ルビー、*aradar* の四アンナで、之に運賃、保険を見積つた所の購買者——黄麻工場、輸出商——の購入價格と、生産者の販賣價格との開きは、「二ルビー乃至二・五ルビー、即ち總價の二〇%に當ると推定されてゐる」のである。(同上三八六—七頁)。

勅命委員の報告は述べて云ふ「總ての州から我々の所に、農民が其生産物を現在の市場に賣るに當つての條件が悪いと云ふ不平を訴へて來てゐる。衡器其他測量器の不正使用が行はれてゐること、この不正手段は標準の度量衡單位が制定されてゐず、又何等かの正規な監査制度を缺く爲に一層容易にされてゐると述べてある。種々の市場に於て宗教、慈善其他の目的の寄附が募集される。生産物が賣られなかつた時でも、莫大な「見本」が取上げられる。仲買人の間に秘密な契約が結ばれてゐるが、農民はかゝる契約の存在を夢にも疑つたこともない」(同上三八八—九頁)

直接生産者の蒙る販賣に際しての被害は唯に以上につきるものではない。「小作料及び租税、其他季節の支拂に要する現金の缺如、債權者側の壓迫、これ等が生産者をして既に商品が滞貨してゐる市場に於て、價格の如何に拘らず、自己の生産物を賣るの已むなきに至らしめる主要原因の一であることは疑を挾む能はざる所である」(§二七〇)。負債を

5. この取上げられる見本は例へば棉は一車當り五—八シールに及んでゐる(同上三八五) 尙衡器の不正についてはハンジャ
ー銀行業調査委員會は、「一、四〇七の衡器と五、九〇七の錘を検査した結果、前者の六九%、後者の二九%は不正確なもの
であつた」と報告してゐる(§二六六)

負ふ農民は收穫直後に債權者側の壓迫を蒙るのが常である。「債權者よりのこの壓迫は、債務者がなるべく速に自己の生産物を賣拂はねばならぬ程に強大である。若し凡ての農民が一齊に賣拂ふとなると相場は自然に下落することとなる」(§二七四)。この外に既に農民の全生産物を管制しうる所の高利貸、仲買人の諸群は、相場を「統制する爲に聯盟を作る。彼等は彼等が定めた價格以上に購入しないと云ふ約束をする。様々な商館を代表して活動する買占代理店は、季節が来ると地方を巡回して巧に商人の聯盟を締結する」。「多くの地方に於て買値は買占代理店及び地方商人によりて秘密に定められる。……或地方に於て彼等は相互間の協定によつて順番に買入を行ふ。彼等を自分達の適めた價格で買入れる」(少數派報告より§八四)。而も「輸出商會は有利な價格で買占をなす爲に、相場引下の目的を以て、時に農産物のダンピングを行ふ」(§二六六)ことすらあるのである。

之等の仲買人の諸群は、それ／＼の上級機構の張る仲買網の結び目を構成してゐる。この上級機構を構成する土着買占商、大商人、或は土着銀行等は、又、イギリスの獨占的商會の管制網の一線をなしてゐる。各州の概況を述べよう。

アッサム。小商人＝仲買人(Bepari)は買占の最初の基本網を形成してゐる。彼等是一部は自己の資本によつて活動するが、大半は更に上級の仲買商(Artdar)から金融を受ける。農村の商人、小店主は自己の資本と Marvari 其他都市の商人からの資金によつて仕入をする。之等の Marvari 及び他の都市商人は土着銀行業者から、更に彼等を介してイギリス銀行資本と連繫してゐる。

ボンベイ。此處では巡回商人による買占の制度が發達してゐる。數多くの巡回商人並に農村商人大衆の活動資金は、

又土着銀行業者(Shroff)から貸付られてゐる。

ベンガル。買占商人 Bepari, Aratdri, Atiya 等は輸出農産物の手形擔保で都市商人並に土着銀行業者から金融を受ける。都市の大商會は、主として國內遠隔の各地から海港へ出る輸出農産物の運輸に金融する。これ等の大商會は、通則として、全州に散在する相當廣大なる買付代理店及び支店を備へ、彼等は彼等として、土着大銀行並にイギリス輸出商會から金融を受ける。

ビルマ。農村商人は普通、農産生産物を擔保に、土着銀行業者、更にイギリス銀行並に印度帝國銀行から融資されてゐる。

ビハール・オリッサ。農村買占商は、輸出商會の買占代理店から資金を受けてゐる。之等の輸出商會は或は自己の銀行を持ち、或はカルカッタ金融市場に其供給源泉を求める。大穀物商は、時として、土着株式銀行、又は印度帝國銀行から融資される。

中部諸州。農村商人は主として仲買商から融通を受け、之等の仲買商は又自身、農産物擔保に土着銀行業者から資金を借りて活動する。

マドラス。印度帝國銀行又は土着株式銀行からの短期貸付を受けて活動する仲買商は、其下層に農村商人を擁してゐる。印度帝國銀行は「手形の割引をなし又農産物擔保に金融し」而して其後者の大部分は印度帝國銀行の貸出によつてゐる。

パンジャープ。印度帝國銀行は此處でも農産物擔保に、穀物原價の七五%、棉花原價の七〇%を融資する。土着株式銀行も亦此に従ふものである。

高利貸資本の場合と同様、印度の商業資本が、完全にイギリス金融資本の統管下に置かれてゐると云ふ事情は全く明白である。一切の市場過程は、各種の段階の高利貸、商人を媒介として、歸する所イギリス金融資本の掌中にある。只興味があり、且つ特徴的な事は、農村では、農民に直接對立するものが高利貸、各種の下級商業機關であり、本尊は雲上に隠れてゐる點である。

次にかゝる機構のうちにあつて、高利貸抑制の方策が如何に結果してゐるか、次節に之を概説する。

第四節 高利貸の抑制並に負債防止政策

農民に對する債務の過重は、商品市場を狭めるのみでなく、政治的不安を増大せしめるものである。既に早く一八七五年にはデッカに於て暴動は高利貸の襲撃に爆發した。農民債務の防止乃至輕減が考慮されるに至つたのは此時に初まる。

デッカ農夫救済法 (Deccan Agriculturist's Relief Bill 1878) は、直接にこの暴動の結果生れた。法律は殺人的高利率を引下げる事を目的とし、裁判所による契約の探究と農民の利益の擁護、土地賣却の防止等を規定してゐる。然し其目的にも拘らず、他に金融設備を缺く農村に於ては、この高利貸の抑制は、農村金融をきこちなくさせたばかりでな

く、却つて一層高利貸の嚴格さと戒心を招來する結果となり「財産の賣却と抵當は、法律發布以後一層甚しくなつた」(一九〇一年饑饉委員報告)のである。後に民法契約法の一部改正並に一九一八年に至つて高利貸付法 (Usurious Loan Act) が發布され、合法的且つ最高の利子率を制定して高利貸の掣肘を試みた。この法律は二九年に至つて改正されたが、然し反高利貸的立法は、何處にても常に失敗し、高利貸の跋扈を抑制することは決して出来ないと Wolff 氏の述べてゐる如き結果となつてゐる。

土地移轉防止が立法されたのは、一九〇一年のパンジャープ土地讓渡法 (Punjab Land Alienation Act) を最初とする。パンジャープでは、自作的農民の性質を與へる土地制度が施行されて來たのであるが、自作農は一九〇〇年には一八九〇年の五四%から四五%に減少し、高利貸も印度に於てすら優勢な地方である (ダーリング氏は所得納稅者の四分の一以上は高利貸業を營むと算定してゐる)。この法律の發布にはイギリスの印度傭兵供給の源泉地の農民状態を鞏化すると云ふ政治的目的もあつたが、それはとに角、法令は土地が高利貸其他の非農業的身分のものに移行することを禁じ、又廿ヶ年以上抵當とする事を禁じてゐる。ボンベイ及びウィードに於てはこの法令の模倣が試みられた。確にこの法律によつて高利貸の誅求が或程度抑制されたことは事實である。だがそれは一方に於て農村金融の圓滑を失はしめ、かくして地價を下落せしめ、中小農の没落を促進し、他方に高利貸を業とする富農の一群を生ずると云ふ結果を齎らした

7 Jathar & Beri, The Indian Economics, p. 321

8 H. W. Wolff, Co-operation in India, pp. 1-3

のである。

かゝる高利貸掣肘の立法と併んで、イギリスの印度政府は農業に對する資金及び信用授與の方策を實施してゐる。この國家による資金貸與は必ずしもイギリスの新に實施したものでなく、嘗てイギリス統治以前にも行はれたが、一八七一年、七六年、七九年に Tagavi Act として復活したのである。顯著なるものは一八八〇年の饑饉對策委員會の報告に基く土地改良貸付法 (Land Improvement Loan Act 1883) と農業者貸付法 (Agriculturists Loan Act 1884) である。前者は井戸、堤防、用水路等の農業永久的改良に對する長期貸付を規定し、後者は種子、家畜、肥料、器具等の經常的費目に對する短期貸付を定めてゐる。

だが、之等の法律も見るべき効果を擧げることには出来なかつた。最初にそれは貸付資金の用途に目的が付され、其用途は下級官吏によつて監督される爲に、より多く必要とされる舊債の辨濟其他の支拂に流用する事が出来なかつたし、貸付申請に對する嚴重な調査に基く下附の遅延、利子徴收の嚴格さ——返還は次の收穫後か、遅くも其次の收穫には要求された——によつて、農民は寧ろ自由に使用しうる所の民間の高利の金を依然として利用した。更に政府の貸付資金の限定と、何より悪いことには、「最も救済を要すべき者が尙救済されなかつた。何故ならば、彼等は抵當とすべき物を有たなかつたから」と云ふことにある。従つて、此法律の普及は極めて小部分で、一九〇一—〇三年の灌漑委員會までには僅に六千萬ルピー、眞に「大海の一滴」に過ぬものであつた。農務局の報告——一九一七年。貸付方法、條件の緩和——にも拘らず、ビハール・オリッサ銀行業調査委員會(一九三〇年)は、年貸付僅々〇・九百萬ルピーに對し、此州の農民の債務は三三五百萬ルピーの巨額に達してゐることに注意を喚起してゐる。¹¹⁾

かゝる農業立法の失敗を、又勅命農業委員會は次の如く論斷してゐる。「吾々がビルマから受取つた證據によると、農夫の家畜、農具及び作物の賣却を禁止せる民事訴訟法は、裁判所に知られてゐないのであつた。ビパール、オリッサの Kamiauti Agreements Act は効果なきことを證明された。デッカ農夫救済法は脱法され、高利貸付業法は事實上、印度の凡ゆる地方に於て死文であつた」(報告、四三六頁)と。

バンジャープに於ける立法の失敗は「證據」に示されてゐる。問「立法手段によつて新しい高利貸——農業者の形を創造するのは、全く何等の意味もないことではないのですか」——「どんな立法上の方策でも、この方面では何等の成功を齎しません、既に利子調節法を考究したことであつたが、私はこの法案が通過しなかつたのは頗る成功的なことと見做してゐます」(四五九六一—二) 銀行業調査委員會も亦同様に、「高利貸の権利がより多く制限されてゐればゐる程、債務者の状態は愈々みじめである」ことを餘儀なく認めてゐる (§ 一一九)。

されば高利貸を國家的に制限せんとする立法は、事實上、單に生産者の状態の悪化、高利貸の巧妙な回避手段と脱法を助長せしめ、結局、貸付條件の逐年の悪化と云ふ結果に歸着してゐることを知るのである。

9. E. M. Hough, The Co-operative Movement in India, pp. 53—4

10. Vera Anstey, The Economic Development of India, p. 183

11. この貸付金が地主によつて小作人の搾取の目的に利用されてゐることを指摘することは必要である。例へば中部諸州 Talpore の地主ハンドラパール・ベガリ・ラルは州政府より支給せる資金によつて蒸氣犁を購入し、自己の畑に使用せずして附近の小作人に一エーカー當十七ルピーの使用料を以て貸與し、又バンジャープの地主、ウヂヤラ・シンハも同様、一九二六年に蒸氣犁を購入し、處女地を開拓し、之を小作人に貸付け、小作人の蒸氣犁耕耘に對して一エーカーにつき三ルピーの使用料を徴収してゐる。(エル・ウリヤノフスキー、上掲書、五二頁及び五五頁)

第六章 協同信用組合運動

第一節 信用組合運動の歴史的概観

法令發布まで。農民債務救済の諸政策が、何等の成功をもち得なかつたと云ふ事情は、印度政府をして従来の政策を放棄せず、而も農民の更生を計らしめる方法として、最も適當なる手段は協同信用組合運動にありと想到せしむるに至つた。

印度に於ける協同信用組合の發展は、Sir Frederick Nicholson に負ふ所大である。"Report on the Possibility of Introducing Land Banks into India" は、マドラス政廳からヨーロッパに派遣された彼の、一八九五—八八年に成つた報告であるが、之より先自然發生的な運動としては、マドラスには Nidhis の如き固有な金融組合——現在、印度會社法の下に尙強固に在續する——があつた。

ニコルソンは、右の事實と印度農村に於ける各種の社會的連帶の存在に鑑み、農村負債對策として、「純粹なライファアイゼン型」の信用組合の組織を強調したのであるが、マドラス政府は當時何等之を具體化することなく、報告は不問に附されてゐた。偶々一九〇〇年には聯合諸州の Duprenex 氏による "People's Banks in Northern India" の公刊が、信用組合の樹立の急務と之に對する政府の保護を勸告し、ニコルソンの思考に續くに至つて、問題は漸く世人の注意に上り

かくてパンジャープ、聯合諸州及びベンガルに於て、二三の協同信用組合が地方官吏の創意の下に試験的に設立された。續いて一九〇一年の饑饉對策委員會も亦ライファアイゼン型の農村金融機關の設立を重ねて勸告し、同年ニコルソン報告に對する再調査の爲に Lord Curzon は Sir Edward Law を主班とする委員會（一九〇一—三年）を命じ、其報告の提出に基づいて一九〇三年 Sir D. Ibbotson により立法院への提案となり、かくて一九〇四年の協同信用組合法が發布されたのである。

一九〇四年法。協同信用組合法の大要は次の如くである。組合の組織は十人以上の團體に許可さるべく、組合員の構成並に擴張は村落、種族、階級を同じくする者に限られる。組合は其構成員の五分の四が農業者なるか否かによつて、農村組合と都市組合に分類され、組織と統制は信用組合登録官の管下に置れる。農村組合は利益金の配付によつて都市組合と異なる。前者は通常政府の許可による以外は、其利益の凡てを積立金とするに反し、後者は四分の一のみを積立れば足りるとされてゐる。

組合の活動資金は、入會金、株式、組合員貯金と外部よりの借入金とによつて充される。株式資本は其量と大きさに制限があり、一個人は全株の五分の一以上を持つこと且つ總額千ルピーを越える事は許されない。

政府の權限は、強制的監督、官吏により州政廳に提案された場合の強制的解散、廣汎なる規約作成にあり、政府の與ふる援助は、所得税、印紙税、登録税の免除と、借入金二千ルピーを限度とし三年利子を免除する事にある。

この運動は「相互に相手の事情と信用を熟知する者」の間に可成り急速に發達した。一九〇五年から十一年の間に組合數は四一から八、一七七となり、其人員は四〇萬を越え、活動資金總額は三三、六百萬ルピーに達するに至つた。かゝ

る組合運動の發展に伴つて事實は屢々法令の規定を超えた。即ち組合は、或は其金融上の必要から聯合組織等の上級機關を設け、或はこの信用組合の發達に刺戟されて信用以外の協同組合が各所に設立されるに至り、又農村の無限責任組合に於ける利益分配の禁止は、パンジャープ、マドラス等の如く株式資金を主要なる源泉とする組合に取つては極めて不便でもあつた。

之等の事情は、一九二二年に新なる協同組合法の發布を必要としたのである。

一九二二年法。新組合法は、單に信用組合に限らず協同組合一般に關する規定、下級組合の相互的統制監督の爲の聯合組織、組合及び個人の出資より成る中央組合銀行、州組合銀行の容認等を包括する。パンジャープ、マドラス、ビルマ等に於ては、株式資本の重要性に鑑みて、州政廳の特別の許可によつて利益金の分配が可能とされ、組合の責任に關しては其目的が組合員に對する信用の授與にして且つ成員の大半が農耕者なる場合は無限責任で、然らざるものは有限責任と規定された。

之等の改正は、組合の實際發達に則して爲されたのであるから、それ故に培はれた運動を成長せしむるに與つて力があり、運動は正に「印度農民の最大の希望」となつたのである。

一九一四年には MacLagan Committee を組織して其成果を調査せしめ、その報告(一九一五年)を基礎として運動を各州の實情に適應さすべく、組合運動の監督、獎勵を州政府に委管(一九一九年)することとなり、各州に於てそれ／＼の組合法——例へばボンベイ組合法一九二五年、ビルマ法二七年等——が發布された。

第二節 信用組合の活動

協同組合は、一九二二年法によつて初級組合と其上層機關(中央聯合、中央組合銀行、州組合銀行)に分れ、初級組合は更に信用組合と非信用組合に、又此兩者はそれ／＼農業組合と非農業組合に分れてゐる。以下述ぶる所は農業組合、特に農業信用組合についてである。

一、初級農業信用組合

組合の組織は、十八歳以上のもの十人以上、原則として同一町村又は種族、階級、身分を同じくする者により、農業信用組合は無限責任を通則とする。其の理由は組合員の教育的効果と外部的信用授與者をして組合に對する信用を増さしめると云ふ點にある。組合が如何なる階層に最も發達してゐるかについては、各州の事情によつて異なるが、ボンベイでは小土地所有者の間に普及し、シンドでは小作人は組合員の二〇%以下であると云ふ。組合の通常の業務は、總會に於て選出される五—九人より成る理事會によつて行はれ、理事は無給である。

活動資金の源泉は、内部的、外部的のものに分れる。内部的源泉としては、組合員入會金、組合員貯金、又はマドラス、聯合諸州、パンジャープ、ビルマ等に見る如き株式資金、積立金の餘剩部分から成る。株式は普通に額面一〇ルビ

1. Hough, Co-operative Movement in India, pp. 61-2

1乃至50ルピーで、個人所有總高は、總株式の五分の一又は千ルピーを越ゆることを許されない。外部的源泉は、政府、州並に中央組合銀行よりの借入乃至預金より成り、この州、中央銀行の援助が極めて重要な地位を占めてゐる。然し外部よりの借入には組合の資力によつて一定の限度が置かれてゐる。²⁾
 之等の關係は、最近の全印度農村組合——信用組合八三、一六四、非信用組合一〇、一八五——の活動資金の構成によつて窺ふことが出来る。(千ルピー)

株 式 (拂 込)	一九三一年	一九三二年	一九三三年
	積立金 其他	三、六六〇 三%	四、八八六 二%
組合員 預金	六、五三三 一八	七、〇〇八 二〇	二、三九八 九
組合員外より預金、借入	一八、三七四 五	一七、六九二 五	一九、一五五 六
Indian Year Book, 1934	一四、五七 四	一四、五九〇 四	計
			三、五九、三三三 100
			三、五〇、九二五 100

組合員の預金が全體の五%に過ぎないことは、印度農業状態が悪化してゐること並に依然として商人、高利貸が農民を束縛し、其貯蓄を妨げてゐる事情を反映するものと思はれる。

貸付の對象は組合員に限られ、其目的は略三種に區分する事が出来る。第一は、生産的貸付である。これは土地の永久的改良を目的とする長期貸付と、納税、小作料支拂を含む當面の經營の爲の短期貸付を包含する。第二は不生産的貸付即ち主として冠婚葬祭其他に用ひられるものである。原則的にはかゝる貸付は行はない主旨であるが、高利貸の拘束から農民を保護する必要上止むなしと認められ、通常最少必要額だけが支出される。第三は過去の負債の償却に用ひら

れるものである。全組合について、之等の貸付の詳細なる分類は明でないが、マドラス(一九二九—三〇年)では、農業組合については生産的貸付六九・九%、舊債支辨の爲の貸付二七・五%と稱せられ、中部諸州及びベラル(一九二八—二九年)では、六一・四%の生産的貸付、一三・六%の不生産的貸付と二五%の舊債支辨となつてゐる。又一九二九年に終る五ヶ年のパンジャブに於ける貸付の分類は次の如くである。³⁾

舊 債	支 拂	商 業	用 費
耕作費(地租及改良費を含む)	三〇%	土 地	購 入
家 庭	入 費	其 他	八%

農業組合の個人貸付高は一九三二年六月現在二八九・九百萬ルピー(前年同三〇六・九百萬)。一ヶ年貸付は四七・七百萬ルピー(同八〇・九百萬)、内支拂延滞額は一一六・三百萬ルピー(同九九・一百万ルピー)を占めてゐる。

貸付保証は組合運動の精神上課さるべきでないが、危険ある債務に對しては動産、不動産を通じて課され、高利貸への擔保たることを防止する爲めと理由付けられてゐる。州によつては慣習に基いて常備穀を擔保とし、或は又信用超過貸付の場合其額面に對し常備穀の四〇%以上、又は收穫穀の七五%以上を擔保とする(マドラス)。此の穀物擔保はボン

2. Maclagan 委員會は借入金に一定の制限を置くべき旨を勧告してゐるが、ボンベイ法では有限責任の初級組合は、株式資金と積立金の八倍、又ビルマ法(一九三一年)では初級農業組合の外部よりの借入額は、自己の資金及組合員預金の三倍とされ
 p. 20. (Hough, ibid. p. 70)

3. Punjab, Banking Committee Report, Vol. I p. 106 Hough, ibid. pp. 76—77,

ペイでは成功を傳へられてゐる。

貸付の利子は、各州、各地方に於ける高利貸の利子との比較に於て異つてゐる。例へば一九二五—六年にはマドラスは九 $\frac{3}{4}$ —一〇%、ベンガルは六—一八 $\frac{3}{4}$ %、パンジャブ一二・五%、ボンベイの七 $\frac{1}{2}$ —一二・五%及びビハール・オリッサの一二・五—二五%となり、全體を通じて六—二五%の間にある。一般に初級組合の借入と貸出との利率の差は、ヨーロッパの組合よりも大であり、其差は聯合諸州では五—六%、ベンガルは六%で借入れ一〇%の利率で貸付をなすと稱せられる。⁵⁾

返済期間は貸付の目的に依つて異なる。役畜、農具其他家庭用入費の場合は二年乃至三年賦とされ、土地改良、機械購入は五ケ年又は十ケ年に達する。マックラーガン委員会は、生産的貸付の期間は二ケ年を限度となすべきを勧告してゐる。期日は、一般に收穫期により、延滞は原則として許されない。相當期間中に返済せざる場合は新なる貸付を拒否され、又假にする返済—借換は、組合の利益を損ふ爲に許されない。マドラス農業組合に於ける分類は、此項目の概況を窺ふに足るであらう。(%) (Madras, Report of the Committee on Co-operation, p. 39)

一ケ年以下	三二・九	二年—五年	三七・七
一—二年	七・九	五年以上	二一・五

利益の分配は、株式資本を包含せぬ組合は行はず、凡て積立金に編入するを常とし、又例外として利益の一部を株式並に教育、慈善の目的に分配する所もある。分配はマドラスの有限責任組合は九%までと定められ、ボンベイでは餘剰利益から拂戻又は特別配當として貯金高又は負債高に應じて分配する。⁶⁾

二、組合上級組織

一、組合聯合。

初級組合は其活動の必要上聯合を組織しうる。聯合は事務所々在地を中心とする半径五哩乃至八哩の地域内にある五ヶ以上の組合によつて組織され、相互の監査の爲の聯合と保證の爲の聯合に分類される。管理は加盟組合代表により、其下に小委員會を設置して常時初級組合を指導し監督する。保證聯合は加盟組合の凡ての外的借入を決定し、中央金融機關との間を斡旋し、又一定條件の下に銀行より初級組合への融資に對して保證をなす。聯合組織は、かくの如く兩者の仲介者として活動するがそれ自身金融を行ふのではない。

保證聯合は、初めボンベイに發達し、漸次各州に及んだが、それ自身活動資金の極めて不十分なことによつて實際的

4. マドラスの例(一九二九—三〇年)では貸付擔保は次の如くなつてゐる。(%)

貯蓄	〇・一	共同保證	四七・七
動産質入	三・一	借用證書	〇・六
不動産抵當	四八・五(長期巨額の場合)	計	一〇〇・〇

(Hough, ibid. p. 72)

5. V. Anstey, ibid. p. 196 及び Hough, ibid. p. 81

6. U. L. Mehta, Origin and Growth of Co-operation in India, p. 11

活動を狭少され、現在は監督聯合が普及してゐる。然し、此種のものも自ら融資を行ふのではなく、従つて「中央組合銀行が、組合の監督を其手に納める傾向の増大」(マドラス組合年報)しつゝあることは、否めない事實である。

組合聯合は更に、ビハール・オリッサ州聯合、パンジャープ州同盟、ビルマ州組合評議會、聯合諸州同盟等の如く、監督、連絡、指導、宣傳を目的として、各州に中央機關を持ち、更に之等は相互に連絡と意見の統一の爲に全印度組合機關協會(一九二九年設立)を組織してゐる。

二、中央組合銀行

初級信用組合の活動源泉は、中央組合銀行に結ばれてゐる。中央組合銀行は現在(一九三二年)五九七行に達し、初級組合に對する資金の供給、組合間の融資の援護並に指導を其職能とする。

中央銀行は三種に分類される。第一は個人の株式出資より成るもので、組合は加入しても個人と全く同様の資格に於て待遇される。此種のものには株主配當に對する何等の制限はない。第二は、純粹に組合出資に限られ、一般の管理並に統制は彼等自身の手で行はれ、運動の精神には最も適合するものである。第三は、前二者の混合の形體で、加入組合は一定率の株式を持ち、又適當に管理に參與する。此混合形體の銀行は、現在最も普及し、殊にカラチ、カルカッタを結ぶ以南の地に盛であり、第二の形體は、最近ベンガル、パンジャープ等に、又小規模には聯合諸州、ビハール・オリッサに見出される。第一のもので現存するものは少數である。

中央銀行の資金の源泉は、株式資本、積立金、預金、借入金より成り、株式は全印度を通じて二九・二百万ルピー。活動資金(三〇六・二百万ルピー)の約一〇%、積立金は二二・八百万ルピー、七%に當り、此兩者が銀行自身の資金を構

成する。従つて活動資金の大部は借入金により、自己の資金と借入金との率は多くは一対八に當る。借入金の大半は加盟員及び加盟員外の貯金並に定期預金よりなり一八四・五百万ルピー。州組合銀行よりの借受は三七・四百万ルピー、一・二%餘に當る。

貸付は通常、初級組合の約束手形を保證とするが、窮極には組合員の資産を保證とする。ボンベイでは加入組合の擁する債務なき資産總額の三分の一が、其與へられる信用の絶對的限界として考慮されてゐる。貸付の利子は、マドラスボンベイは一般に八%、パンジャープは九%、ビルマ、中部諸州は一〇%、ベンガル九%—一〇%、アッサム一〇・五%、聯合諸州、ビハール、オリッサは各々一二%、一二・五%である。貸付期間は略初級組合のそれと同様であり、利益分配はビルマ、ボンベイは一〇%を、マドラスは九%を限度とされてゐるが、ビハール・オリッサの如く稀に一二・五%—通常個人には九・¾%、組合六・¼%——に達する所もある。

三、州組合銀行

州組合銀行は、現在既に七州二王國に設立され、州内中央組合銀行の調整並にそれ等の金融の圓滑を目的とする。其構成、活動状態は各州によつて異なる。マイソール、ハイデラバッドの二王國のそれは、協同組合のみより成り、マドラスは中央組合銀行のみによつて組織され、或はパンジャープ、ベンガルの如く個人的株主の参加を拒否するものもあるが、他は主として個人、初級組合及び中央組合銀行の出資より成つてゐる。其活動は中央組合銀行に對する資金の融通

に集中されるが、中央組合銀行の不活潑なる地方乃至組織を缺く地方では、彼等自身初級組合の指導監督に當る。最近に於ける活動資金の状況は次の如である。

株	千ルピー		%
	積立金	其他	
積立金	六、六九九	六・八	州、中央銀行預金、借入
其他	四、七九四	四・八	
個人よりの貯金、借入	四八、一九七	四八・七	州、中央銀行預金、借入
合計			組合よりの預金、借入
			政府よりの借入
			合計
			千ルピー
			三二、四三〇
			四、九二二
			一、八六〇
			九八、九〇二
			一〇〇・〇

Indian Year Book. 1934

ボンベイ、パンジャブの州組合銀行は、州政府が利子保証をする債券を發行して長期に亘る土地抵當事務を處置してゐるが、一般には國立銀行との關係は特に密接ではない。貸付は、一般に加盟員に對して行はれ、マイソール、アッサムのみが組合に限定してゐる。期間は一ケ年を慣習とするが、ボンベイでは特に初級組合を通じて、特定の人には一〇ケ年の信用を與へてゐる。利率は五・五%から九%まで各州によつて異なるが、通常六%—八%の間である。積立金及配當金の分配については略中央組合銀行のそれと同様である。

更に州銀行を統轄すべき全印度組合總銀行の計畫が屢々提議されてゐるが、未だ具體的な進行を見ない。

組合金融に對する政府の援助は、監督指導並に行政的事項を除いては、一般に積極的ではない。僅にボンベイに於て二百萬ルピーを限度とする債券に對し四%の利子保証が州政府によつて與へられてゐるのであるが、近年は土地永久的改良資金 (Togavi loans) を組合機關を通じて貸與する方針を採つてゐる。

全印度組合發達概要

組合数	一九二六—二七		一九二七—二八		一九二八—二九		一九二九—三〇	
	人員	千	人員	千	人員	千	人員	千
中央州銀行	二	二	二	二	二	二	二	二
組合聯合	一七三	一〇八	一七三	一〇八	一七三	一〇八	一七三	一〇八
農業組合	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
非農業組合	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六
初級組合計	一、二九	一、二九	一、二九	一、二九	一、二九	一、二九	一、二九	一、二九

同資金の狀態。(單位百萬ルピー)

拂込株式資金	一九二六—二七平均		一九二七—二八平均		一九二八—二九平均		一九二九—三〇平均	
	組合数	人員	組合数	人員	組合数	人員	組合数	人員
組合員よりの預金借入(年末)	一・三	二五・二	一・三	二五・二	一・三	二五・二	一・三	二五・二
組合よりの預金借入(同)	一・四	九・六	一・四	九・六	一・四	九・六	一・四	九・六
州、中央銀行より借入金(同)	一・四	四・八	一・四	四・八	一・四	四・八	一・四	四・八
政府よりの預金(同)	〇・六	五〇・三	〇・六	五〇・三	〇・六	五〇・三	〇・六	五〇・三
非組合員よりの預金(同)	二・〇	四七・〇	二・〇	四七・〇	二・〇	四七・〇	二・〇	四七・〇
積立金其他基金	〇・一	一・二	〇・一	一・二	〇・一	一・二	〇・一	一・二
計	六・八	一五・九	六・八	一五・九	六・八	一五・九	六・八	一五・九

Indian Year Book

三、土地抵當銀行

信用組合は、其資金の或程度の限界の故に、長期信用授與に對しては適確なる處置を講じ得ない。蓋しその爲には長期の預金又は借入を必要とするが、之等の供給に對しては勢ひ利率は高まり、貸付利率も、従つて之に應じて比較的に高利となり、組合本來の使命に離返するが故である。且つ組合は、其性質上、一個人の長期貸出に共同の責を取ること、は、各々の組合員が既に債務を負うてゐる事情から、不可能とされる。にも拘らず農民の負ふ傳來の債務、高利貸の束縛からの脱却は、低利借款、或は生産設備改良による利潤の増加による以外は不可能であり、従つて長期低利資金の必要は益々大となる。

この目的に適應すべき土地抵當銀行の設立の意見は、先にはマクラーガン委員會の勧告に現れ、又各州の銀行業調査委員會の報告に見出される。かくて此種の銀行は、一九二〇年のパンジャブを初めとして、現在次の如くなつてゐる

銀行數	開始年	貸付期間(年)	政府援助	利子(%)	備考
パンジャブ	一九二四年	一〇—二〇	資金供給、利子保証	九	中央抵當銀行設立
マドラス	一九二五年	二〇	債券買上、利子保証	八—九	中央抵當銀行設立
ボンベイ	一九二九年	一〇—二〇	債券買上	七	同計畫
ベンガル	一九二七年	七—二〇	—	—	—
アッサム	一九二七年	二〇	—	—	—
マイソール	一九二九年	二五—三〇	資金供給、債券買上、利子保証	八	中央抵當銀行設立

India Analysed, Vol. III, p. 78 及 75 Indian Year Book

確に此等の銀行は「土地所有者の經濟的地位改善の爲の最も有効なる機關」ではあるが、然し此運動の發展の爲の主要なる問題は、かゝる長期且つ低利の資金の供給源泉にある。現在貸付期間は二十ヶ年を要望されてゐるにも拘らず、實際には三ヶ年乃至五ヶ年である。ボンベイ、マドラス、パンジャブでは債券發行を以て財源とし、ボンベイは州政府が、五〇萬ルピーを限度として土地抵當銀行支拂の爲の州組合銀行の發行を引受け、且つ利子を保証する。マドラスでは中央抵當銀行の設立(一九二九年)以前は、發行に對し州政府が之を引受け、爾後最初の五ヶ年間中央機關の發行する債券について二〇ヶ年六%までの利子を保証せんとしてゐる。

貸付は個人財産を保證として直接に行ふもの、並に初級組合と關連し之を通じて行ふものとに分れる。貸付額は、債務なき土地價格の五〇%以下(ボンベイ)、二〇〇〇ルピーを限度とする場合(マドラス)、或は最高五千ルピー又は抵當所有地の地租の三〇倍を限度とする(パンジャブ)もあり、各州により六七四ルピーから二、七五八ルピーまでであるが一般には二千ルピー以下である。

この種の銀行は、當然に小土地所有、又は賣買質入の對象となりうる永小作の比較的多い地方に發達する。従つて聯合諸州の如き永小作權の移讓し得ない州では實際化してゐない。この運動の實際的效果は、未だ疑問視されてゐる。パ

89. Hough, *ibid.* p. 148

90. The Royal Commission's Abridged Report, p. 47

ンジャープの例をとれば、現恐慌の初の年に(一九二九—一九三〇年)此州では借受金の三九%は支拂を遅滞し、訴訟された者三〇〇人に達し、投獄者三十六人を數へたと稱されてゐる。¹⁰⁾

第三節 若干の批判

協同信用組合運動は、其發生の由來によつて、高利貸に一撃を加へ、彼等の利子を或程度低下せざるを得ざらしめ、その誅求を或程度制限したことは事實である。各州の組合に關する報告は、或は相當數負債から解放され、或は組合員は高利貸の羈絆から脱したと云ふ事實を掲げてゐる。運動は又、農村に貯蓄の風習を傳へ、農業經營の改良を直接に援助し、刺戟した事も事實である。これ等の成功を收めた部面をのみ強調すれば、協同組合運動は、確に、印度「農村の最良の希望」である。

然し乍ら先づ指摘せねばならぬことは、運動は全印度の農業人口に比して、其活動範圍は極めて小部分に過ぎない點である。それは農業労働人口の三%餘、通常耕作者——地代生活者、労働者を除き——の四・三%に過ぎ、又假りに印度の全農村家族を四五・八百萬とすれば、其七%を包含するのみである。¹¹⁾従つて信用組合の貸付も、農村の全債務に比すれば九牛の一毛である。例へば、ビハール・オリッサの銀行業調査委員會は、組合の貸付は州年需要額の二%以上は供給してゐない(報告、一卷二九頁)と云ひ、聯合諸州の同じ委員會も組合に對する債務は、州全債務の五・三%に過ぎぬ(一卷、一四四頁)と述べてゐる。

貸付の用途が舊債支拂と不生産的目的に尙多額を占めてゐると云ふ事實は、組合運動が、原始的生産様式と零細耕作の條件にあつて農業が「廣汎な程度に利潤を生む産業たることを中止してゐる」印度に於ては、高利貸を幾分排除するとしても、農民の負債を積極的に軽減しうるまでには到らない事を示してゐる。ビハール・オリッサ銀行業調査委員會は云ふ。「現存する債務の償却は、當座必要の借入金利率の實質的引下が、先立つて行はれるか、或は少くとも之に伴つて行はれるかでないければ、甚だ疑問である。ビハールに普遍的な一八・七五%と云ふ相對的な低利率を以てするも、年々必要額を借用する限り、農民は數年にして殆ど以前と同様な債務状態に逆もどりするであらう」(第一卷・五七頁)と同じ報告は又、事實は「負債が組合員の中でさへ減じた」と云ふ何の徴候もなかつたことを明』とするであらう(同上二四

10. Hough, *ibid.*, p. 152

11. 農業組合加盟員の農村地方に於ける家族數に對する比率は次の如くである。(%)

	對全組合	對信用組合	對全組合	對信用組合
ベンガル	四・四	三・八	西北國境州	〇・二
ビハール・オリッサ	三・二	三・一	アツサム	二・九
ボンベイ	一〇・〇	八・七	ビールマ	三・九
中部州及ベラル	二・四	二・三	デリ	一一・五
マドラス	八・三	七・九	アジュメール・メールワラ	一五・四
聯合州	一・八	一・八	コダグ	三六・二
パンジャブ	一〇・九	一〇・二		

B. V. N. Naidu, *The Co-operative Movement in the Madras P.* (Indian Journal of Economics Jan. 1934.)

五頁)としてゐると嘆じてゐる。

支拂の延滞は、従つて必然の現象である。延滞額は初級農業組合について、一一六・三百万ルピー(一九三一—二二年)(前年同九百九十万)に達し、個人貸付額の四〇%(前年三二%)、全活動資金の三三%(前年二八%)を占めてゐる。¹²⁾而も之は單に帳簿記入より得た所の統計上の數字であり、實際上、或は日付變更により、或は組合への支辨の爲に高利貸に依頼する等の手段が屢々講ぜられるのであるから、延滞の實額は更に高まらねばならない。

初級組合に於ける支拂延滞は、當然に上級金融機關への打撃である。聯合諸州では、中央銀行の組合より支拂はるべき延滞は一九三〇年には二九%から三八%に増加したと云ふ。

かくて協同組合は其本來の性質を喪失せざるを得なくなる。ボンベイ組合再組委員會は、運動は「大なる程度、協同的であることを止めてゐる」(Indian Year Book)と云ひ、又ビハール・オリッサの協同組合に關する委員會も同様に嘆じてゐる。

現恐慌の進行に伴ふ農産物價格下落の條件にあつては、事態は一段と悪化を示してゐることは當然である。聯合諸州組合登録官は云ふ。かくては「數年にして延滞はトン／＼拍子に増加し、組合の大半は破産し、解散の止むなきに至るであらう」¹³⁾と(聯合諸州、組今年報一九三〇年)

更に運動に於ける缺陷は次の點に見出される。即ちパンジャブ其他の地方に於ては、高利貸が信用組合の實權を握り、之を自己の目的の爲に利用せんとするを防止する爲に苦い經驗を味はつたと報告され、ビハール・オリッサ銀行業委員會も亦、「職業的金貸が、積極的な組合員となり、巨額の持金を中央銀行に預金したと云ふ數個の例があつた」(第

一卷、一三六頁)と述べてゐる。

運動の何より大なる缺陷は、だが、先づ其救済を最も必要とする貧窮なる地方、階層の間に浸透しない點にある。¹⁴⁾法令はもとより直接にかゝる貧窮者の救済を拒否してゐるのではない。然し實際問題として、信用組合は、其分前又は出資が自己の信用の必要を充すに足る所の成員から構成されてゐる。組合員の信用授受に對する一定の保證、或は一〇ルピー乃至五〇ルピーの株式出資等は、よしそれが極めて僅少なるにせよ「印度の如き貧しい所では……最も救済を渴望する者を除外する」¹⁵⁾のである。¹⁶⁾

12. Indian Year Book, 1933 p. 371

13. マドラスでは組合の登録並に解散の數字は次の如くなつてゐる。

	登録數	解散數	登録數	解散數
一九二六—二七年	一、四五五	七一	一九二九—三〇年	五三五
一九二七—二八年	一、二六〇	一〇七	一九三〇—三一年	三二〇
一九二八—二九年	七二六	一五〇	一九三一—三二年	一二九
			一九三二—三三年	六二九

この最後の年の農業組合は、登録一〇〇に對し解散五〇四となつてゐる。ついでに云へば、此州の年需要高に對する支拂延滞の率は二八—九年の四〇・九%から、三一—二二年には六三・一%に増加してゐる。(Naidu 氏、前掲書)

14. Vera Ansley, *ibid.* p. 202 及び E. M. Hough, *ibid.* p. 240

15. Calvert, "Prevailing Types" in *Indian Co-operation Studies*, p. 43

16. 之に關連して地主の勢力が強い所では、信用組合は彼の高利貸的操作用の爲に壓殺されることを注意せねばならない。例へば中部州に於ける所有地二千エーカーの嘗つて中央組合銀行書記であつた一地主は、勅命委員會委員に次の如く答へてゐる「此種の信用組合がないのは、吾々は銀行が行ふと同様な利息で(?)一筆者)農民に金を貸付けるからです」(證據、三〇四八九)

要するに協同組合に参加する者は農民の比較的富裕な部分に止まつてゐる事は明瞭である。故に大部分の農民は、尙依然として高利貸の桎梏の下にある。勅命農業委員会は「高利貸が印度農民を經濟的に奴隷化し」「土地は高利貸の手に移行し」又「高利貸は無統制的權力を得てゐる」ことを認め、他方に「印度農業者が利潤の爲め、又は單に資本の再生産の爲でなく、其飢餓的生存を維持する爲にのみ勞働してゐる」ことを認めてゐるが、而も「印度の高利貸は、現在の所、必然的現象である」と表明してゐる。(報告、四三二—四四二頁)

理由は極めて明である。高利貸資本は商人資本と並び結んで、印度では巨大なる權力であり、イギリス金融資本の吸疣であり、イギリスの印度支配の支柱である。地主、高利貸、商人の三位一體を體現する農村支配階級は、イギリス帝國主義とは切つても切れぬ植民地搾取機構に織り込まれ、封建的搾取關係の維持と、工業發展の阻害に役立つてゐる。高利貸はイギリスの政策のうちに今や恐慌の進行と共に益々強化される。アッサム銀行業調査委員会は云ふ。「吾々の見る限では、村落のマハジャン、金貸等による耕作者の搾取は増加してゐる」(報告、第一卷四八頁)と、同様にビルマ協同組合委員会も「金貸の數と富は、協同組合運動發生以來急速に増加した」(報告、一〇頁)と述べてゐる。

かゝる關係の下では、協同組合が成功してゐる處でも、單に農村の上層の分離を促進するに過ぎなく、一般の貧、小農は、益々緊縛する高利貸の桎梏の下に放置されてゐるといふことは、何等あやしむに足りない。

第七章 農業政策に於ける新方位

第一節 地主の資本家的經營

一、地主の資本家的經營の獎勵

多くの地方に於て、地主、高利貸は、土地使用權と交換して農民的所有地を買收し、或は又高利貸、商人によつて小作權が買取られ、農民は彼等の單なる小作人に轉化する、と云ふ現象は、恒に繰り返し見出される。

かゝる新地主は、舊來の地主と同様に、通常土地の購入を以て満足し「排他的に只其の地代收入のみを心掛ける」のである。この印度の地主について、西北國境州移民局官吏セル・ウィリイは次の如く述べてゐる。「總ての富裕な土地占有者は例外なく毫も自己の經營に關心を有たない。彼等は簡單に自己の收入を消盡してゐるのみである」(「證據」四七六〇七)と、同様に、パンジャブ州リヤルプール縣中央組合銀行書記セルダル・サンブラン・シンハは自己の報告に記載して云ふ。「今日迄地主の努力は、總て、集約的な土地利用法に向けられず、自己の所領の擴張にのみ歸着した。彼等が富裕となるや、其時から彼等は都會に移住し、土地との連絡を失つて了ふ」と。

1、エル・ウリヤノフスキー前掲書三九頁による。以下特記なきもの同じ。

かゝる地主の消極性は、都市にそれを排出する條件を缺く此國の農村の人口過重、封建的搾取關係の強い殘存、地主の高利貸兼業及び一般に小作は殆ど何等の法的保護を持たないと云ふ諸要素の結合に基礎を置いてゐる。この同じ基礎に立つて、それ故に農民大衆の經營の一層の狭少、農業の退化が見られ、植民地地域に於ける戦後の一般的恐慌の特殊な現れに他ならぬこの退化の根柢に據つて、繼續し深化する經濟恐慌が猛威を逞うし、農民の購買力は、みじめに減退してゐる。

今や、印度の農業經營をこの漫性的恐慌状態より引き出し、イギリス商品に對する國內市場の收容力を擴張せんとする方策が講ぜられねばならない。だが如何にして、又如何なる農村の階層を對象としてそれは可能であらうか。イギリスが議題とする所は次の點にある。即ち上部から、耕作農民大衆の犠牲に於てこの問題を解決すること、それは地主の資本家的經營を奨励し、この基礎に立つて農業關係の構成を改革し、印度の農業經濟を本國工業の利害と新しく結び付けることである。此事は同時に又、イギリス支配の、印度農村に於ける社會的根柢を擴大強化することをも意味してゐる。

ベンジャール灌漑地帯三〇ヶ村の調査に基いて、西北國境州農務局のロバートソン・ブラウン氏は、之について、かう述べてゐる。「寧ろ破産者は其成行に放任しておき、他方伶俐にして資本を持ち、且つ漸次に經驗を築き上げて行くを希望する人々を奨励する方が勝つてゐよう。殆ど總ての小規模經營が破産してゐる處で、他の者に損害を及ぼさずして、一方の者を助成する如きは、考へ得られることであらうか。ダリング氏も亦主張して云ふ「大土地所有者をして彼等の所領地に於て農業の改良方法を施行すべき當然の義務を遂行せしむる爲に、一連の努力をなす必要がある。この方面

に於て、たとへ幾分なりとも改良方法を企てる如き土地所有者は極めて寥々たるものである」。

勅命農業委員報告は云ふ。「吾々は小作人乃至小所有者のなし得ざる如き改良の實行は、只大土地所有者にのみ期待しうる。井戸特に機械揚水井戸の鑿掘、小運河及び灌漑設備の構築、洪水豫防乃至排水設備、動力による製糖用打穀細破機械所等は、有利なる事業であらう。大地主は、自己の所領地並に近隣の利益の爲に、その金融力によつて自己の農場を設定し、經營を近代的科學的基礎の上に樹て、小作人に分配すべき改良種子栽培場を設け、純粹なる家畜の飼育を營みうるであらう」かくして大土地所有者が利益あるものとしてかゝる經營に向はんとする時には「それに對する法律的障害を除去し、これに代ふるに法律的保護を以てせねばならない」と。又述べて曰ふ。「吾々は現在の土地所有或は小作法が、土地の改良に喜んで投資をなしうるやうな地主を思ひ止まらせる如き實施振りであることを指摘せねばならない」『大地主に對して、印度の株式銀行は恒に彼等に抵當信用を與へんことを希ひ、又屢々投資すべき企業を求めてゐる。大地主に對して政府の貸付金は役立ち、土地抵當銀行は此方面に於て或る程度の役割を演ずる事が出来る』と。(報告、四二六頁)

この政策の傾向は、近年アグラに於て見出される。即ち、一九二六年の改正小作法の下で、地主は收稅官に、近代的經營をなす爲に「終身小作人」及び永小作人の一切の土地引渡を請求することが出来、地代の四倍を支拂ふことによつて、之等の権利を買取ることが出来る。其の際官廳は、地主が「土地を集中し小作人を他の土地に移轉せしむること」を援助する義務がある。又地主が十ヶ年間賃労働の助をかりて經營する一切の土地は、彼の「自家使用地」として、永小作權は生ぜぬこととなる。更に地主は、農場の耕作に關連する他の目的の爲にも、終身小作人の耕作地引渡の請求權を附

與されてゐる。

等しくこの傾向は、ボンベイに於て、小規模土地占有に關する一九二八年の法律案に見出される。それは結局は巨大なる農民大衆の反抗によつて撤回されたものであつたが、該法律案は結果として、ボンベイ州の搾取農及び地主を鼓舞獎勵し、大規模經營の施行に着手せしむる目的を以て、彼等の爲に三百萬以上の零細農民經營が、彼等が工業に仕事を見出すとの假定の下に排除される筈であつたものである。中部諸州には又、「所有地整理法」(The Central Province Consolidation of Holding Act, 1928) が發布されてゐる。目下それは、單に實驗室の試みとして Chhatisgarh に實施されてゐるに過ぎないが、この法律は農村の全地域の三分の二以上を占めてゐる經營體 (Permanent right holder) の半數以上が整理に賛成する場合、整理計畫を作成する權利を與へてゐる。この計畫は認定後總ての者に取つて服従の義務がある。其處には何等の上訴權も許容されてゐないのである。

明に之等の政策の立案は、土地所有者が、現在の零細經營のの小作農にして將來耕作労働者の地位に移り行く者を收容して職を與へ、又土地所有者が改良耕作を實施し且つ小規模農耕者に確實な勞賃を制定するであらう、と豫測してのことである。明にそれは、又當然に直接生産者の幾十萬を土地から強制的に驅逐せんとするものである。従つて必然に農民大衆の巨大なる反抗を惹き起さずには居ない。かゝる事例は既にボンベイの一九二八年の法律案の撤回に於て明瞭にされた。

新計畫によつて Radhakamal Mukerjee 氏は勅命委員會の質問に答へてゐる。「貴方達は追ひ出された住民の部分を何處に收容されやうとするのですか……かやうな提案は、土地が廣大で耕作に従事する人民の少ない新しい國には適合

するでせう。……印度の工業發達は、國內に於ける浮游労働力の全部を工業に引き入れる事が出来る程十分に高度ではありません。同様にマドラス州税務局代表者も、かゝる政策は印度では「常に危険、而も二重の危険を呈する結果を有つに過ぎない」と辨じてゐる。

土着資本の代辨者等は、この政策遂行の條件として、又將來の擴大された土着資本蓄積の源泉として、先づ比較的急速なる工業の發達を力説してゐる。此處でもイギリスの政策は自ら作り出した所の矛盾に遭遇せねばならないのである。然し彼等は、根本的にかゝる政策に對するのではない。

かゝる計畫に對して、漸次深化して行く恐慌及び農村の不滿の高まり行く狀況の下にあつては、寄生的な、安逸に馴れた地主は、比較的に冷淡たらざるを得ない。西北國境州の農民運動の中心地を通過して來たハン・バハダール、サドヌーラ・ハンは次の如く言明してゐる。「この地方に於ては、資本家階級は農業に對して大した誘惑を感じてゐない。蓋しこの階級は都會、の境域以外の地では……自己を安全と感ずることが出来ないが故である。」(傍點筆者) 此處に、この新しい政策の方向に對して封建的地主の氣乗薄の原因が潜在してゐる。

この計畫に關連して、勅命農業委員會の次の記述は、極めて深い興味を提示してゐる。即ち云ふ。「吾々は、強制の要素を適用することが時に不可避であらうと云ふことを認める。然しこの強制を以て人民の希望に對して慎重なる注意を要せぬものであると考へてはならない。……吾々は現在の情勢の裡に行はれんとする斯る改良の新奇なることに鑑みて

強制的要素は最後の段階まで保留すべきものであると思惟する。……説得、力説及び常識の凡ゆる手段が最早や盡くされて了つた時、始めて強制を、其時までは頑強の少數のみが享有してゐた利益を多數(?)——筆者)に確保する爲に適用することが出来ると思考する」(報告、一四一頁)。これは撤回されたボンベイ法についての記述であるが、言葉の綾の間にイギリスの意圖を汲み取ることが出来る。

二、地主の資本家經營の特徴

最初に、既に發端してゐる地主資本家經營の諸例を勅命農業委員會の資料によつて見よう。

第一例 地主ラオ・サヒブ・コルデーの經營——中部諸州 Alola 縣——州立法議會議員、國民會議議員、リョートワリに立つ地主で、所有地、六〇〇エーカー。内自家使用地、四〇〇エーカー。

彼は二〇エーカーの土地に、二五千ルピーを以て四本の井戸を鑿掘し、特殊な農事試験場を設置してゐる。殘餘の五八〇エーカーは小作に貸與し、大部分はバタイ制である。小作料は大部分現物であるが、地租が一エーカー當り二乃至三ルピーであるのに對し、約二〇ルピーに當つてゐる。

第二例 地主アマト・アリの經營——中部諸州——所有地八〇〇エーカーと一五〇エーカーの他に、更に三〇〇エーカーの未墾地を租借する。

彼はこの未墾地開拓にトラクターを使用してゐる(當時、起耕八〇エーカー)。八〇〇エーカーの農場では、二人の監督の下に労働者、下僕を雇用し、労働者には貨幣賃銀を、下僕には現物勞賃を支拂つてゐる。經營は當時既に五年に及

び、主要作物は棉花、小麥(販賣用)と、グラム(稷——勞賃用)で、小部分の機械設備の井水灌漑地には、甘蔗、野菜、灌水小麥を栽培する。牧畜場には、役牛六〇、牝牛八〇頭を飼育し、牝牛からは主として肥料を採取してゐる。五〇哩を距る市場への運搬及び卸商への販賣は、自ら之を行ひ、市場に持つ自己の倉庫を利用して市況の變化に應じ、其結果「棉花三マウンドに對し、普通の農業者より、少くも三ルピー高く賣る」(證據、三一六六八)ことが出来るのである。彼も亦これ以外の所有地を小作に貸與してゐる。

第三例 地主ハンドラバル・ベガリ・ラルの經營——中部諸州 Jubbulpore 縣——スワラジスト黨員、州立法議會議員
所有地六〇ヶ村に亘る六萬エーカーのマルグザール。

大規模經營は、一九一三年九〇エーカーの農業試作場より始まり、現に散存するが五、〇〇〇エーカーに達し、勞賃は主として現物で支拂はれる。主要作物は小麥で、最近灌漑地に甘蔗を作り、更に勞賃支拂用に米作を營んでゐる。雇傭労働者は繁忙期には四〇〇名に達してゐる。彼は四〇〇對の役牛と六〇頭の牝牛を持ち、酪乳場を設け、この製造場經營に關する試験に六萬ルピーを投資した。州政府の貸與する低利資金によつて、トラクターを購入したが、之は主として小作人に貸し、使用料を徴収してゐる。又彼も、小麥實捌の爲に鐵道附近に自家用倉庫を設け、自家農場の生産物と共に五五千エーカーに達する小作地の生産物販賣の爲の大規模な商會を組織してゐる。更に高利貸を營み、現金(年利一二——一五%)並に種子(同二五%)の貸付をも行つてゐるが、彼の治下の村では協同信用組合は悉く閉鎖されたこと、及び嘗て彼は此縣の中央組合銀行の書記を勤めたことを指摘する必要がある。

第四例 地主ドクラスの經營——中部諸州 Amraoti 縣——マルグザールにして所有地二〇〇エーカー、リョートワ

地二〇〇エーカー。自由主義者で、辨護士。

大規模經營は、一九一六年以降營まれ、機械犁を使用してゐる。主要作物は棉(販賣用)と稷(勞賃用)で、勞賃支拂高は、貨幣に換算して年約一五〇ルピーである。

第五例。地主コールの經營——パンジャブ州——マルグザールにして所有地、七、五〇〇エーカー。

彼は一〇〇〇エーカーの地に大經營を六臺のトラクターを以て施行し、農具修理場を有ち、又馬匹飼育場を組織してゐる。六、五〇〇エーカーは小作に貸與し、バタイ制により、強制的農作を貸出の條件としてゐる。オカラには、この農場及び小作地域の小麦を販賣する爲に倉庫を設け、卸賣手續によつて、其處から海港カラチへ發送する。

第六例。地主ウヂヤラ・シンハの經營——パンジャブ州——州立法會議員、所有地一、七〇〇エーカー。

所有地はバリ・ドアブ運河の側に位してゐる。彼は四〇對の役牛と木製犁によつて耕耘し、施肥の目的を以て當時二〇〇對の羊を飼育してゐた。この灌漑地で、最初の四ヶ年を地租免稅特典により、第五年から第八年まで稅率の二分の一乃至四分の一の地租を支拂ひ、第五年の終りに一エーカーにつき二十五ルピーを政府に納付して、土地所有權を獲得したものである。主要作物は小麦、棉である。一九二六年以降機械犁を購入し、處女地の開墾に用ひ、一方に高利貸付及び商業操作を以て搾り上げた(農具までも)小作人に、この開墾地をバタイ制を以て貸付け、この機械犁をも使用料を徴收して貸付けてゐる。

第七例。地主ラオ・サヒブ・ダダフハイの經營——ボンベイ州——印度中央棉花委員會委員、所有地六〇〇エーカー。

この六〇〇エーカーを賃労働によつて經營し、主として棉花を栽培する。農具はトラクター、紗肥機及び特殊な犁を

用ひ、養豚場並に家畜用牧草を作る。

第八例。地主カムブガイの經營——ボンベイ州——マルグザールにして所有地は非灌漑地八〇〇エーカー、灌漑地一五エーカー。

比較的近頃の一部の小作地を除いて大經營に移行したものである。特徴的なことは、彼の収入の主要源泉は、自家の大經營と並んで、農産物の加工、精製の工場——精綿、壓搾、乳酪製造、獸骨洗滌及び色料塗料製造工場——であり、更に二の農具、肥料會社の代理店をつとめてゐる點である。

第九例。地主ライチランダの經營——ボンベイ州 Nasik 縣——所有地一、八〇〇エーカー(内灌漑地七〇〇エーカー)のマルグザール。元全印度商業會議所會頭。

大經營は一九二二年に初まり、比較的純粹に施行されてゐる。農具には五臺のトラクターがあり、又機械を用ひる甘蔗破碎をも行つてゐる。棉、甘蔗、牧草を主要作物とし、他に一〇エーカーの果樹園(マンゴー、さくら)と苜、バナナを栽培し、レモン植付の準備をしてゐた。經營への投資は三萬五千ルピーを算する。勞働者は多く常僱で、季節労働者の雇傭は果樹採取期に見出される。従來の彼の地位からも明なる如く、イギリスの卸商會と直接の聯絡を持つてゐる。

第一〇例。地主ジャガナート・バクシ・シンハの經營——聯合諸州 Rae Bareli 縣——所有地二〇ヶ村に亘るウー・タルクダール。州立法會議員。

一九一七年以降、彼は自家使用地九〇〇エーカーに、二〇對の役牛と鐵製犁を以て大經營を施行し、機械揚水の二〇本の井戸から七〇ビガの土地に灌水してゐる。作付は純良種の小麦を主とし、堆肥並に金肥(窒素肥料カリー)によつて

普通農民經營の約二倍を收穫し、生産物は農務省に賣却される。労働者は、自己所有の村落から募り、勞賃は現物と貨幣を混淆し、現物は労働者の小麦刈取高(脱穗)の十七分の一を基準とし、現金は一日一・五アンナ乃至四アンナである。之等の結果彼は年収入の約七五%を所得してゐる。

第一一例 地主セルダラ・キル・バラ・シンハの經營——聯合諸州 Gorakhpur——所有地一〇、〇〇〇エーカー。

大經營は所有地の六〇〇エーカーの地域に、役畜、鐵製犁によつて行はれ、甘蔗、小麦を主作するが、近頃トラクタ―をも購入し、又機械揚水井戸五本を開鑿した。勞賃は一日四アンナ、二ヶ年以上繼續して労働する者は六アンナ乃至八アンナ、労働季節には勞賃の半額を前貸してゐる。彼は近隣の農民の甘蔗を買占めて大規模な取引を行ひ、又自己の製糖工場(日産能力四〇〇—六〇〇噸)を持ち、一ヶ年、九〇日乃至一〇〇日の操業によつて、八〇千マウンドの砂糖を製造する。この工場は農作物收穫以後に開かれ、是れに閑となつた日僱労働者を收容するのである。

各地方の、以上の諸州を通じて、其發展の段梯に於て各々差異を有つてゐるが、次の事が判明する。即ち、大部分の地主は資本家經營は、一方に於て舊來の地主として巨大なる小作地を擁し、高利貸付と商業操作をも抱含する前資本家的搾取關係に立ち、他方に資本家的搾取關係に立つと云ふ奇妙な交錯、併存の状態にあることである。この併存の下に地主は資本家的經營者は、比較的幼稚な經營技術ではあるが、賃労働の搾取に基礎を置く利潤を、彼は小作地の直接生産者の餘剰生産物の殆ど全部を收奪することによつて補強し、補充してゐる。此處で第一のものが比較的指導的な性質をもち、第二のものが依然として支配的な性質を保持してゐる。經營に於ける雇傭労働者の野蠻な、前資本家的搾取、法外に低廉な、而も現物拂ひ現金拂ひを混淆する所の勞賃、熱帶的氣候の下に於て法外に長い労働時間、更に次第に増

嵩して行く農村の人口過剰の條件の下に於て、經營主は労働力の正常的な再生産に意を用ひないで済むこと、蓋し高利貸・商人・並に彼等自身によつて土地から追放される者は、飢餓に追れ、たとひ其全部でないとしても、經營者の意の儘の條件に依つて使役されうるからである。此の如きが、印度に於ける地主は資本家的經營の特徴である。

これ等の經營は、未だ極めて小部分且つ小數で薄弱であるし、又世界經濟の發展の現段階に於て窮極的に成功を遂げ得ないものであるが、然し印度に於ける農民革命の烽火の前夜に立つて、自己の、農村に新しく且つより強力なる階級的支柱を樹立せんとする所のイギリス帝國主義農業政策の新なる潮流の現れである事は充分に注意されねばならない。

第二節 高利貸再編成の志向

イギリスをして地主は資本家的經營を獎勵せしむる同じ狀勢が、それと密接に關連する高利貸再編成の志向を決意せしめてゐる。

現在の經濟恐慌によつて印度の農民は破産し、曾て豊饒であつた土壤は今や消耗し、收穫は累年減退し、家畜は急激に死に絶えて行き、地平線に餓死の恐ろしい姿が聳え立つてゐる。かくて農民は、或は農業生産行程から放逐され、或は高利貸の恒常的な搾取對象たることを續ける條件を喪失してゐる。この状態は、「農村高利貸の資本が……年を経る毎

3、以上エル・ウリヤノフスキー、前掲書、四九—五九頁による。

に愈々凍結して行く」(銀行業調査委員會、§ 113)こと、他方には農民の憤懣の爆發の危機と云ふ事態を招來する。銀行業調査委員會は提議して云ふ。「吾々は金融業者の資金と經驗とを協同組合運動に誘致せんとする。……金貸業者が協同組合の執行委員會に參與することは、評價し難い程有益であり得よう」(§ 123)但し其場合「爾後協同組合員に私的手續による貸付を行はなことを條件とせねばならない」と。又云ふ。高利貸をして特別協同信用組合を組織せしめ「該組合をして個人ではなく、初級組合に貸付を行はしむること」。「時を経るに従ひ、金貸業者が充分に堅實となり、より多くの信頼を起さしむるに至つた時」、地方の高利貸を、地方に於ける株式銀行の代理機關に變向すること。「銀行事業が一層發展して行く際には、登録された金貸業者は、金融銀行の全權委任代理者となす事が出来る。……銀行は地方に支店を開設する代りに、銀行が地方の私營金貸業者の金融上の共同經營者となると云ふ原則に基き、登記金貸業者と共營状態に入ることが出来る」(§ 123)のである。

以上でイギリスの意圖は明である。それは、かくして高利貸の手中に蓄積された資本を、端的に且つ直接的に、廣くイギリス銀行網に吸叫し、利用し、彼等と共營せしめ、代理店の職能を附與し、高利貸に商業資本を農村協同組合に誘導することによつて、土着高利貸業を合理化せんとすることである。問題の要諦は、地主に資本家的經營の奨励と等しく、印度農村に於けるイギリス金融資本の勢力を一層強固にし、地主・高利貸・商人の三位一體をイギリスの印度支配の鞏固なる城塞として、今や襲來の怖れ充分なる農業革命の流に抗せんとすることに存在してゐる。

第八章 恐慌裡の印度農村

一、農業の一般的状態

イギリスの印度政府の農業政策が、何等かの事態の改善に努力しつつも、否其改善への努力を何等か示さねばならぬ程に、イギリスの印度統治は、印度農民を典型的植民地状態の鑄型に流し込んで了つた事は、吾々の上に論じた諸政策の過程に示される。今、之等の一般的諸結果を概括することが必要である。

一方に於ける大土地所有の創設と、他方に於ける土地獨占の進展の一般的結果は、先づ次の事に表明される。(百萬エーカー)

	英領印度面積	同可耕未耕地	對全面積	同耕地	對全面積	休閒地	灌溉地
一九一三—一四年	六一九・六	一一五・六	一八・六%	二一九・二	三五・三%	五二・六	四六・八
一九一九—二〇年	六二五・一	一一三・三	一八・一	二二二・九	三五・六	五二・三	四九・四
一九二五—二六年	六六七・六	一一一・九	二二・七	二二五・八	三三・八	四九・三	四七・六
一九三〇—三一年	六六九・三	一五四・〇	二三・〇	二二九・一	三四・二	四九・六	四九・七
一九三一—三二年	六六八・九	一五五・一	二二・二	二二八・八	三四・二	四九・一	四八・九

Indian Year Book. 全土の増大は獨立せる領土の併合によつて説明される。

之によつて見れば、世界大戰以降、耕作地の絶對量は増加してゐるが、相對的には殆ど何等の進展をも示してゐない

而も他方に於て可耕未耕地の増大と、百萬を單位として數へられる所の巨大なる農業労働者群の存在に鑑る時、この土地の耕作を妨げてゐるものは、明に土地の獨占である。

この土地の獨占は、都市に於ける工業の阻害政策と相關して、人口を不斷に農業に追ひ、土地に對する人口の壓迫は益々著しくなる。かくしてそれは、一方に於ける相續による不動産分割の舊慣と相重つて、農民の經營を愈々縮少せしめるに至り、それは又、バタイ、カンカット其他の小作制下の法外な高率地代を維持せしめてゐる。之等の小作關係並に其他の奴隸制度の殘滓をも含めての前資本主義的搾取關係の殘存は、高利貸の必然的跋扈を結果する。その結果は更に小所有者を極少所有に、土地を離れた農民への途に追ふのである。農民の經營の八〇%内外が、多くの地方に於て、貧小農によつて占められてゐることは既に述べた所であるが、彼等の文字通り赤貧なる状態にあつては、經營の改善は不可能事である。彼等がよし政府の配分する改良種子を植栽するとしても、瘦土は種子を保育しえずして間もなく變種する。化學的肥料は國內に生産を見ても、彼等には利用すべくもなく、小麥、亞麻仁等々の農産物、獸皮、獸骨の如き畜産品の輸出を通じて巨大なる肥料成分は國外に持ち出され、深耕通風の要は指摘されつゝも、之を行ふべき改良手段がない。家畜肥料は森林立入の自由を持たない小農民の燃料として消費される。勿論彼等は家畜の爲の牧場も持ち得ない。かくて人も家畜も災害に對する抵抗を著しく弱められてゐる。

されば印度農業が、人口の増大にも拘らず生産の停頓を來してゐることは何等不思議ではない。(百萬トン)

一九〇〇—一三年	米	小麥	其他穀物	備考
	三二・五	八・四	二一・八	Shah & Khambata 兩氏による修正

一九一四—二二年	三三・三	九・三	二一・八	(同 右)
一九二五—二六年	三三・〇	九・〇	二二・三	(ヴァルガによる)
一九三〇—三一年	三三・二	九・三	—	(無修正、官廳統計)
一九三一—三二年	三一・七	七・三	—	(同 右)
一九三二—三三年	三一・一	九・四	—	(藩王國を含む)
一九三三—三四年	三〇・四	九・四	—	(同 右)

Shah & Khambata, Wealth & Taxable Capacity of India, 其他官廳統計

生産の絶對量の増加は、あるとしても只耕地面積の擴大からのみ、主として説明する事が出来る。例へば、米と小麥については次の如くなつてゐる。(單位百萬)

米、作付面積(エーカー)	一九一九—二〇	一九二五—二六	一九三〇—三一	一九三一—二	一九三二—三	一九三三—四
生 産(トン)	七八・七	八〇・二	八〇・六	八一・三	八二・七	八二・〇
小麥、作付面積(エーカー)	三三・〇	三〇・七	三三・二	三一・七	三一・一	三〇・四
生 産(トン)	二二・六	二四・〇	二四・八	二五・三	三三・〇	三六・一
一九三二—三三年以降、藩王國を含む、官廳統計及び Indian Trade Journal.	一〇・一	八・七	九・三	七・三	九・五	九・四

主要穀物種子にとつては、土地の平均生産力の遞減を示してゐるが、この事は上述の諸原因に加へて、人口の増加と關連して、耕地面積が擴大し、其際休閑の劣等地が耕作されと云ふ事情に原因を持つてゐる。

生産遞減の諸例を示すと次の如くなる。(エーカー當り封度) Agricultural Statistics of India, 1930—31 (1933年刊)

作物	一九〇六—七年迄の五年平均				同 一九二一—二二	同 一九二六—二七	同 一九二九—三〇
	一九〇六—〇七	一九〇七—〇八	一九〇八—〇九	一九〇九—一〇			
米、ベンガル(冬)	一、二三四	一、二三八	一、二七六	一、二七九	九八三	一、〇三六	一、〇二九
ビハール(冬)	—	—	—	—	一、二三四	一、〇三六	一、〇二九
上ビルマ	—	—	—	—	一、二三四	一、〇三六	一、〇二九
下ビルマ	—	—	—	—	一、〇三四	—	—
マイソール(灌漑地)	—	—	—	—	九七七	—	—
小麥、中部諸州	—	—	—	—	八四一	—	—
パンジャブ	—	—	—	—	六〇〇	—	—
大麥、西北國境州	—	—	—	—	七二六	—	—
パンジャブ	—	—	—	—	八七六	—	—
玉蜀黍、パンジャブ	—	—	—	—	七二六	—	—
聯合諸州(非灌漑)	—	—	—	—	九〇八	—	—
棉花、聯合諸州	—	—	—	—	一、〇〇〇	—	—
中部諸州(非灌漑)	—	—	—	—	一六〇	—	—
西北國境州	—	—	—	—	八六	—	—
マイソール(非灌漑)	—	—	—	—	一六〇	—	—
黃麻、ベンガル	—	—	—	—	七九	—	—
ビハール・オリッサ	—	—	—	—	一、二七一	—	—

右表は地方別平均で、且つ地方的饑饉年をも含んでゐるが、一部を除いては一般に土地の生産性は後退の状態にあり食用植物に就ては、世界大戰時代に於ける好況より殆ど全部が低下してゐる。右表は又、灌漑地と非灌漑地を合しての

平均であるが、一般に灌漑地は生産の増進、或は後退としても微弱なる程度であり、之に反して非灌漑地の後退は遙に著しい事を知るのである。

尙、印度に於ける農業の後退状態を示す事例を補足すれば次の如くである。(聯合諸州の例)

地域	可耕地の内耕作地の割合(%)			可耕地の内二毛作地(%)			一犁當り労働牛		一犁當り耕地面積	
	一九一〇	一九二一	一九三〇	一九一〇	一九二一	一九三〇	一九二〇	一九三〇	一九二〇	一九三〇
インド・ガンジス河平原	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
西部	八九・三	七六・三	六六・一	一四・七	一三・八	一三・五	二・一八	二・三三	九・八六	九・七
中部	八七・八	七三・七	七二・六	一七・七	一七・九	一六・八	二・三三	二・〇八	五・七九	五・七三
東部	八六・七	七二・二	七九・八	二〇・五	二〇・九	一九・一	一・九	二・〇〇	五・五九	五・〇九
ヒマラヤ山麓西部	八三・五	六九・〇	六八・五	一七・九	一三・五	一五・九	二・八六	二・七	七・七四	七・六一
東部	七九・〇	七六・五	七九・六	二六・一	二六・〇	二八・三	二・三三	二・二一	五・九二	五・四九

Indian Analysed. Vol. III. p. 174.

二、最近の農業恐慌

印度農村の一般的悪化の状態は世界大戰以降上昇する事のない農業恐慌によつて、深化され強化されてゐる。大戰は諸資本主義國の最頂點にあつたイギリスの地位に大打撃を加へた。戦後の不況が長びくにつれて、イギリスの政治家、財政家、實業家の間に、極めて徐々にではあるが、世界に於けるイギリス資本主義の基本的地位が永久的に變化して來たことが了解された。安定化、合理化の凡ゆる努力が具體的な好結果を齎さない事が理解されると、彼等は

其の巨大なる植民地の一層鞏固な保持に、恐慌の負擔を植民地大衆の上に轉化することに、熱意を持ち初めた。然しそれは矛盾を、より大規模に再生産する結果となる。植民衆に對する増大する負擔は、其購買力を減退せしめ、イギリス商品の販路は益々狹縮され、本國の工業は著しい打撃を蒙ることとなる。印度に於ても財政好轉の爲の努力は、輸出の強行となり、イギリスの商業資本並に其買辦たる印度土着商資本の全機構を通じて、原料の商品は極度に叩き買される。印度は世界第二位の棉花生産國であり、黄麻と茶は事實上獨占的供給國であり、小麦はカナダと第三位を争ふ所の原料生産國であるが、この事態は、戦後を通じて徐々に、或は急速に變化しつつある。戦争を通じて、合衆國、カナダ、アルゼンチン、オーストラリアに於ける資本主義的農業は急速に發展した。地位の變化は、簡単に次の數字によつて判明されよう。

小麦、正味輸出量	
	一九二三年
カナダ	一九〇九—一三年 六六・〇
合衆國	二〇・一
アルゼンチン	一四・二
オーストラリア	二一・五
印度	二四・二
	三七・〇
	一〇・七
	一四・三
	一・四
	七・五
	一・四

合衆國のトラクター數は一九一八年の八萬臺から、一九二八年には七六・九萬臺に増加した。だが印度に於ては、之等の諸國の取つた農業に於ける技術的革命的進歩を何等利用する事が出来なかつた。のみならず、進歩的農業國に於けるかゝる發展は、一般的不況と重つて、商品の過剰を來し、價格は下落し、農業恐慌は既に早くより潜在的に進行して

ゐたのである。

この状態に、舊來の生産様式と生産手段に依存し、而も品種の悪化をも防ぎ得ない程既に破局的状態にあつた印度農民が、適應出來得かつた事は當然であつた。沈滞は益々深められ、も早や單なる打撃によつてすら、それは倒壊する腐朽した枯木にも等しいものであつた。

一九二九年十月に起きた合衆國取引所恐慌に端を發する最近の恐慌は、當然に農業市場に非常な影響を及ぼした。それは衆知の後く全世界を捲席し、イギリスも亦最も強く其打撃を蒙つた所の一である。本國の經濟の悪化と共に印度に對する負擔は相對的に過重して來た。この印度民衆に對する負擔は、逆に、印度の購買力を一層減退せしめて、本國の恐慌過程を更に深いものとせずにはおかなかつた。それは印度農産物の價格を下落せしめ、本國金本位の維持の爲に一九三一年秋から一九三二年末までに八三萬磅の金を本國に送り出し、此年から印度は巨大なる金輸出國に轉化した。又イギリスは印度市場を確保する爲に、一方では外國ダンピング防止の爲に印度關稅を高め、他方ではオッタワ會議によるブロック確立の努力に於て、印度から棉花の販賣市場を奪ひ乍ら、印度に對しては本國との結合すら保證しないと云ふ結果を印度に押しつけてゐる。

物價の反落は何よりの恐慌の指數をなしてゐる。主要なる農産物の卸賣物價指數は次の如くである。(指數一九一四・七—一〇〇)

總指數	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四
穀物	一四一	一四一	一一六	九六	九一	八七	八九
	一三三	一二五	一〇〇	七八	六八	六六	六九

第二部 農業に對する諸政策

豆類	一五七	一五二	一一九	八九	九二	八四	八四
油子類	一四二	一五五	一二七	八二	七六	七三	九二
黃麻	一〇〇	九五	六三	四九	四五	四一	三九
棉花	一六七	一四六	九一	八三	九二	八〇	七三
茶	一五四	一四〇	一一四	八六	六一	九五	七三
棉製品	一五九	一六〇	一三九	一二三	一一九	一一三	一一一
黃麻製品	一五〇	一二二	八八	七六	七五	七七	七五

一六八

Indian Trade Journal による。

即ち穀物類は一九三三年迄に五〇・四%、豆類四六・五%、油子類四八・六%、黃麻五九%、棉花五二・一%の下落を蒙り、之を總指數の下落四〇%に比較すれば、農産物價格下落が、工業製品の下落に比して著しいことが判然する。更に卸賣物價と小賣價の缺狀差が存在する。ボンベイでは、一九二九年食料卸賣指數一五四、小賣指數一五九は、一九三一年には前者九九に對し、後者一三二と開いた。又カラチでは、一九二九年の差度一三は、一九三二年一月には三二と増大した。

この缺狀差は都市と農村の物價の間にも大きな開がある爲に——農村の高利貸、富農はこの開を利用して儲けてゐる——益々大となつてゐる。

又農産物價格を Harvest Price について見ると次の如くなつてゐる。(ルビー—アンナ)

米、ベンガル	一九二七—八	一九二八—九	一九二九—三〇	一九三〇—三二
	七—八	六—〇	六—〇	四—一

マドラス	七—四	六—四	六—六	四—四
ビールマ(扱)	三—一	二—三	二—五	一—七
小麦、聯合州	五—二	五—五	三—四	二—五
パンジャブ	四—四	四—四	三—〇	一—九
玉蜀黍、聯合州	三—三	四—九	三—四	一—三
ビハール	三—五	四—八	三—八	二—四
棉花、中部州	三—〇	二—九	二—〇	一—五
ボンベイ	三—〇	三—一	二—六	一—九
黃麻、ベンガル	八—四	九—〇	八—〇	三—九
原糖パンジャブ	五—七	六—〇	六—一	四—〇
ボンベイ	八—六	九—五	九—五	七—六

Agricultural Statistics of India.

されば農民の實際の收得は、物價指數の下落によつて推察するよりも遙に下廻つてゐる。

輸出商品と輸入商品との價格差は次の如くなつてゐる。(一九一四・七—一〇〇)(カルカッタ卸賣指數)

輸出	一九二八・九	一九三〇・一二	一九三二・一二	一九三三・三	一九三三・六
輸入	一三三	八五	八一	六九	七五
差額	一五〇	一二五	一二四	一一五	一一三
	一七	四〇	四三	四六	三八

即ち一九三三年三月までに輸出商品は五一%の下落に對し、輸入商品は二七%の下落である。前者は主として農産生產品であること並に外國貿易は凡てイギリス商人の手中に獨占されて居り、其結果一般貿易の衰退による損害を、輸出

原料品購入價格を出來うる限り低下せしむることによつて補填せんとする事情によつて強められる。
輸出の減退は次表の如くである。(百萬ルピー)

總輸出額	一九二八—二九	一九二九—三〇	一九三〇—三一	一九三一—三二	一九三二—三三	一九三三—三四
穀物穀粉	三、三〇一・三	三、一〇八・一	二、二〇四・九	一、五五八・九	一、三二四・一	一、四六三・二
種子類	三三六・九	三四七・九	二九八・八	二〇三・七	一六〇・八	一一七・五
棉花	二九六・三	二六四・七	一七八・六	一四五・九	一一三・一	一三六・六
黄麻	六六六・九	六五六・〇	四六七・三	二三七・八	二〇七・〇	二六九・八
其他	三二三・五	二七一・七	一二八・八	一一一・九	九七・三	一〇九・三

一方に於て、かゝる價格の下落、輸出の減退にも不拘、播種面積(英領印度)は、一九二八—二九年から〇・六百萬エーカーを増して一九三一—三二年には二六二・九百萬エーカーとなつてゐる。これは農民が其經濟状態が悪化したつゝも、地代の支拂、租税納入並に高利貸への支拂を含めて、生活せねばならぬ状態を反映するものであり、それは又價格の一層の下落に力を加へるものである。

播種面積の増減は左の如くなつてゐる。(千エーカー)

總面積	一九二八—二九年	一九三一—三二年
穀物類	二五、三三八	二五、九〇一
内、米	三〇、三六八	二〇、〇一四
同小麥	八、一三三	八、二六八
油種子類	二、九三三	三、三三〇
棉花	一七、八六六	一五、八三三
黄麻	一六、五〇七	一四、四八七
其他	三、〇三三	一、八四五

此處で農民の輸出乃至原料農産物からの退却が明示されてゐる。更に之を各中心産地について見れば次の如く、其處には概して右表に示されるより激しい變化が見出される。この事は、農産物價格の低落が如何に農村に打撃を與へるかを示すものである。

小	大	中
パンジャブ	聯合州	ビルマ
一九二八—二九年	一九二八—二九年	一九二八—二九年
九、九六九	七、一七六	一一、七三三
一九三一—三二年	七、八九七	一二、五四五
棉	花	黄麻
ボンベイ	中部州	
一九二八—二九年	一九二八—二九年	一九二八—二九年
五、一九一	五、〇七八	四、三二一
一九三一—三二年	四、六二〇	

三、農家經濟状態

農民状態の破局的悪化は不可避である。筆者の手にある資料は、農産物價格激落のまだ最初の年のものであるが、それでも其状態の悪化は充分に窺ふことが出来る。

例へば、パンチャールプ州の状況は次表に示されてゐる。(ルピー・ア・ヘクタール)

灌漑植民地	一九二八—二九年	一九二九—三〇年	一九三〇—三一年
良好なる灌漑地	五三—〇一二	四二—一五—二	一一—五—七
平均	三二—二—〇	一八—七—六	九—二—九
政府直營灌漑地を除く灌漑植民地	四七—七—八	三六—一—二—九	一〇—一—四—二
平均	三三—一—一—四	二四—三—〇	五—八—四
總平均	三二—八—四	二〇—一—三	七—一—四—七

Farm Accounts in the Punjab, 1930—31. (India Analysed vol. II p. 19) — エーカー當り平均純收入(土地所有者)

右の計數は此州に於ける九縣を含み、比較的良好なる經營を基としたものである。従つて降雨にのみ依存する其他の地方を包括すれば、平均は恐らく、此年で四乃至五ルピーにすぎないであらう。而も此州の約六〇%の農民的經營は五

第二部 農村に対する諸政策

一七二

エーカー以下であることに鑑みれば、彼等の年収は恐らく四〇ルピーに足りないであらうし、主として降雨に依存する地方に於ては事態は更に悪化してゐるであらう。土地が地主に属する場合には次く如くなつてゐる。

エーカー當りバタイ(五〇%)制下の運河灌漑地農業經營

I Lyallpur 二七・二五エーカーの經營

	總收入	支出	純收入	純收入中地主の取分
地主	一七一四〇	六一五〇六	一〇一四一六	
小作人	一七一三一一	二三一三九	一四五一一〇	二二・七%
計	三五一一一一	三〇一三三	四一四一八	

II Risalewala 八〇・二五エーカー

	總收入	支出	純收入	純收入中地主の取分
地主	二五三三〇	八七七一	一六一一一	
小作人	二五三七一一	二三一〇一	一一三一一〇	九〇・〇%
計	五〇一〇一一	三二二〇〇	一八八一一一	

III Montgomery 二五エーカー

	總收入	支出	純收入	純收入中地主の取分
地主	二〇一〇〇六	七一三二二	一二一三三四	
小作人	一九一四〇〇	二三一九八	一〇三一一八	一四〇・九%
計	四〇一八〇六	三一六二〇	九一一一八	

尙右の調査による状態は次の如し。

I Lyallpur 縣

A 地主		B 地主		計	
地	一九五二六	一九六二七	一九七二八	一九八二九	一九九三〇
小作	四〇一九一	二六三三〇	二二二一一	二四一三二	二〇一四一
計	二六〇〇四	二二〇二二	二二二一一	二四一三二	二〇一四一
地主取分(%)	六六・九	五三・九	一八・七	七三・三	三二・七
地主	三九七二〇b	三七九一b	三九〇一七c	三六一五二d	二六一一一d
小作	一九一一一	一六三三二	三三三二	二四一三二	一一三三〇
計	五九二一一	五四五一一	六一三三九	五一一三七	一八八一一
地主取分(%)	六六・七	六九・一	六三・七	七〇・九	九〇・〇

II Montgomery 縣

A 地主		B 地主		計	
地	三五二三六e	二五二五九e	一九二二二e	二六二八四f	二二二二二g
小作	一九六〇〇	三三六〇〇	四一六一一	一六一三三	二〇三三八
計	五五二三六	三九一五九	二四二二二	四三二一七	三三〇一九
地主取分(%)	六四・九	六七・七	八二・九	六二・一	六八・〇

III Sargodha 縣

A 地主		B 地主		計	
地	一五二二九i	二五二七六	二六二四二	二二二四一	二二二四五
小作	四一八一	二二六一九	八一五九五	〇一三五	〇一三五
計	二〇四一〇	三七一五三	三五三三七	二一七二〇	二一七二〇
地主取分(%)	七三・九	六七・九	七四・六	九八・三	九八・三